

# 試作 艦娘たちの憂鬱

かのえ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

前世を持つ提督に前世を持つ艦娘が集まつてくるお話。愛が重くて提督つらいよ（・・ω・・）

【第一部開始、不定期更新】

目 次

第一部 彼女と出会うまでの憂鬱 丙

1 提督候補の憂鬱

2 電の憂鬱

3 神通の憂鬱

4 夕立の憂鬱

5 響の憂鬱

6 鳥海の憂鬱

第一部 彼女と出会うまでの憂鬱 乙

7 阿武隈の憂鬱

EO 7 神通改二と神通改

8 時雨の憂鬱

9 龍驤の憂鬱

EO 9 提督と元帥

10 飛龍の憂鬱

第一部 彼女と出会うまでの憂鬱 甲

11 雪風の憂鬱

12 扶桑の憂鬱

13 北上の憂鬱

EO 13 提督の憂鬱

14 彼の憂鬱

15 彼女の憂鬱

閑話

金剛型会議へようこそ

月夜に吼える足柄

第二部 彼女と向き合うまでの憂鬱

- |   |        |    |
|---|--------|----|
| 1 | 憂鬱な新年  | —— |
| 2 | 憂鬱な取材  | —— |
| 3 | 憂鬱な岩風呂 | —— |
| 4 | 憂鬱な真夜中 | —— |

141 133 125 118

# 第一部 彼女と出会うまでの憂鬱 丙

## 1 提督候補の憂鬱

生まれ変わり、なんなものがある。よくいう前世の記憶があるとかそういうやつだ。前世の自分は程よく生きていてそれなりの人生を歩めていたはずだというのに気が付けば死んでしまっていた。死ぬときは苦痛がなく死にたいと思つていたために一瞬で意識を刈り取られたその出来事は望み通りだったのだが、まさかこんなことになるとは。

この世界には「艦娘」というのが存在する。そう、あの「艦隊これくしょん」の艦娘だ。なにやらシーレーンはズタズタにされて輸入が制限されているけれどスマホとかそういうのが出来るくらいにこの国が豊かなのは彼女らの働きのおかげだ。食生活はちょっと不満だし前世ほどにはこの国に人間がいなかつたりするけれどまあまことに充実した生活を送れているのです。

「そこ！ あなた手を抜かない！」

「了解です大井教官！」

自分の、前世の知識では練習巡洋艦が身に纏つていた服を着た軽巡洋艦「大井」は俺に檄を飛ばすが……なんか嫌われる氣がする。自慢ではないが、この提督やその補佐をする人員を育てる学校では上位に位置していると思うのだが何故か自分だけ、という事が多い。大井だけに、ではない。

ほかにも彼女の妹の木曾や、もちろん練習巡洋艦の香取や鹿島などなど多くの艦娘が自分らの教官として指導にあたつているのだがそのほとんどが俺にだけ厳しいような氣がする。やはり顔か、顔なのか！ 平均的だと思ってたけどほかの提督候補生美形ばつかだもんなあ。それはそうか、女子のやる氣を出すには昔からアイドルと相場が決まっている。

「ということでイケメン君、君の顔をくれないか？ 同期の仲だろうに」

「いきなりなに言つてるんだい君はね」

ドン引きされた。すると横から口を出される。

「鹿島教官がすぐ嬉しそうに苛めるお前だけぞぞするくない？」

「まさかお前、Mか？」

「なにを今更」

聞いたら即答された。やつぱり鹿島はどこでも人気ですねえ、さすがの伝説の女王様だ。……やめてくださいって幻聴が聞こえたのでやめます。

やつぱり提督の殆どは男で、その半分以上が結構整っている顔をしている。ずるい。女性提督もいるにはいるらしいのだが、提督が女性だと部下の艦娘からナメられたりするらしいので素質が相当すごいということでなければ推奨されていないらしい。ちなみにこのナメられるというのはぬるい表現で、お察しくださいというやつだ。

でも美形提督から一人だけ寵愛受けるとかされても色々あるんじやねえかとは思うのだけれど何やらうまくいっているからいいらしい。問題はたまに起きるけど。ダメじやん。

「いつも思うんだけどお前のそれ、異様だよな」

「もしかしてお前つて妖精の親分じゃないの？」

「……大妖精？ 提督になつたら大妖精提督って呼ばれちやう？」

友人たちから言われてついふと思いついた事を言う。いや、大妖精提督はないわ。

今日の訓練や座学が終わつて飯を食つていると至る所からわらわらと妖精が寄つてきて「ティクトク！ オツカレサマデアリアマス！」と敬礼してくる。そしてよじ登る。おいこらやめろカレーが食べづらい服を汚したらどうするんだ比叡教官が洗おうとして布切れにしちゃうだろ。

「てかまだ提督じやないつて。というか飯食つてる時くらいは離れて！ ねえ聞いてよ！ ……あ、みかんの缶詰ありがとう。これは杏仁豆腐かな？」

「さすがは大妖精提督、妖精を使って甘味まで自在に手に入れるか」「銀蠅か？ 大井教官が知つたらヤバいぞ」

「バレナケレバ、イイノデス！」

対面の二人から色々言われるが俺は何もしていない、妖精さんが勝手に！

提督になるための素質とはすなわち妖精が見えて心を通わせることができてかつ、その上で彼女らの協力をえられること。見て会話まではできる人はたまにいるらしいが、協力してもらえるかはまた別。艦娘の艦装を動かすには彼女らの協力は必要不可欠なのでここが一番大事だとか。ちなみに艦娘は普通に心を通わせられるらしい。するくないかな。というか艦娘が提督になればいいじゃんと思うけれど同じ艦娘なのに、みたいな亀裂が過去発生したとか当時提督役をさせるだけの艦娘の余裕がないだとか。

というかさ、こいつらいうこと聞かないんだけど。こんなで提督候補やつてていいのか俺は。 いうことを聞いてくれない、と言うよりかは良かれと思ってやつてくるフシがある。異常に好かれているのだ。過去に例を見ないレベルだとか言われている。

「ほんと、はじめて見た時びっくりしたよ。妖精さんの山が歩いてくるつて」

「普通に町中歩いてて数匹載つてるのを幾人かから驚いた眼で見られたことはあつたけど、さすがは海兵学校。妖精さんも多数生息しているんだなあ……ん、小銭を拾つた？ 届けておきなさい」

教官の艦娘からのあたりは強いけれど、この妖精さんをどうにかして従わせようとする経験は絶対提督になつても役に立つし、提督になれたらこれはもうすごい勢いで元帥にまでなつちやうのでは。ふはは今のうちに崇めておくが良い同期共よ。

「いたいた！ 木曾教官がお前呼んでるよ！ なんかテストの回答に気になる点があつたつて」

「……やだ、イケメンとサシとか怖い」「はよ行かんかい」

調子に乗つてたら木曾教官に呼ばれちゃつた。 できの悪い提督（候補）は出荷よ。 そんな。

やつぱりこつてりと叩きこまれたでござる。 いやあ木曾教官の眼

光はほんと鋭い、美人がかっこよさを追求するとどうなるのかつていう理想形を行つてゐるよあの人。なんか姐さんと呼んで付いて行きたくなるよね。

しつかし戦術から体術から万能すぎるでしょあの人達。一応鍛え上げられた海軍士官を載せてた船が人の形になつたのだから当然とも言えるけれど、提督つていらなくない？ 現場で作戦指揮してもらつたほうが絶対に勝てると思うんですけども。

「お帰り。やっぱり木曾教官には付いてなかつたか？」

「見られるかボケ、おっぱいは付いてたわ」

けどあまり大きくない。

「俺、木曾教官になら掘られてもいいかも」

「さつき鹿島教官に苛められたいて言つてたのにどつちなのよおめえは」

「どつちもイケるぜ」

「おい寝る場所変わつてくれ」

さつきMを暴露した彼がもつと大きな爆弾を投下してきた。なんだこいつホモか。ま、別にホモだからつて差別しないし？ ちょっと怖いから離れたいだけだし？

「ホモが男ならなんでもいいわけ無いだろ。好みがあるんだ好みが。お前は違う自惚れるな」

「アツハイ」

※

「つたく、ほらおしまい！ もうちよつと頭使えよ、いざ」というときにはやられるのは俺達だし、俺らがやられちゃえば頭脳たるお前を倒そくと敵さんやつてくるだろうが

「了解であります」

「いつたいった。明日も早いんだ、しつかり体調整えろよ」  
彼が敬礼して去つていく。片目で扉を閉めて去つていく彼を見送つた彼女はため息を付いた。

「きつく言い過ぎたかな……」

左手を撫でる。艦娘はたくさんいるが、提督は自分の艦を間違えることはないし、艦娘は誰が自分の提督なのかを理屈でなく心で理解している。木曾は理解していた、自分の提督が誰なのかを。そして彼がどのような存在で、どんな趣味嗜好をしていて、どう戦つて、どういう言葉を自分にかけるのかを。

「前世、か」

艦娘は全員前世の記憶がある。一人残らず例外はない。旧日本海軍の軍艦だった彼女らは軍艦として戦い、散つていった記憶を保持している。一部欠損があるものもいるが、それは轟沈の瞬間が多く、それを思いだせるような事があれば体が恐怖で止まってしまう。

長門や酒匂などが最たる例だ。彼女らに暗所で突然ものすごい光量の光を浴びせれば、いかに武人気質の長門であろうと少女のように身を縮こませ、目と耳をふさいで泣き出すし、酒匂であれば半狂乱になる。それだけアレは彼女らにとつてひどい記憶なのだ。

当然木曾も国から離れた地で解体された記憶があるが——彼女の前世の記憶はそれではない。もつと違うものだ。同じ木曾の名前の重雷装巡洋艦としてある提督と闘いぬき、平和を手に入れた一人の艦娘の記憶。彼女の記憶はそれだった。

人に生まれ変わりなんて無いし、艦娘にだつて当然無い。轟沈すればそれまでだ。だというのに記憶を持つて生まれ出た木曾。こことは違うどこかの世界で共に戦つた彼に会うことは無い、そう思つていたのに。

「こうしてまたお前と会えるなんて、感謝するよ。神様つてやつにね」  
自身もまた神靈の一種だというのに彼女は神に感謝をした。

「アイツには悪いが……出てきていないお前が悪い。今世の最初はいただくぜ」

今年、彼はここを去り間違いなく艦娘を指揮するだろう。もともとが優秀であつたし、いずれ常勝の将となるのは分かりきつているのだ。しかも若いうちからその将の下で戦ってきた部下が全てを叩き込んでいる。

「練習艦もしまいだ。大井姉さんには悪いが抜けさせてもらうぜ」  
木曾はニヤリと笑みを浮かべた。

## 2 電の憂鬱

毎日のように扱かれて艦娘と共に戦う方法を日々学んでいたら、気が付くと卒業の日を迎えてんやわんやしているうちに鎮守府に着任する運びとなつた。海兵学校の提督科を卒業したからといつて通常すぐに提督になんてなれるわけもなく、雑用や副提督などといったことをこなしてからようやく一人前と認められ艦隊を与えられるのだが。

まあ主席卒業だし教官からの推薦もありかつ提督の空きが出たとか仕方ないね、特例だ！ お兄さんこのままエリートコース突っ走つてお金たくさんもらつてかわいい嫁と子どもに孫に囲まれた生活送っちゃうゾ。

いやあ、教官の扱いは辛かつた。入学当初は中の下くらいだつた成績が一方的な虐めによつてみると上昇、卒業試験前にそれまで常に一位だつたお坊ちゃんイケメン君をぶつ倒し躍り出たのだった。いやあ田舎からかなり出世したものだよ、今世の家族も喜んでくれるかなあ。

「主席おめでとう、これから一緒に護国のため頑張つていこうな」「おう」

次席のイケメン君、中身もイケメンで惚れてしまうやろ！ ちなみに惚れた場合恋敵は鹿島教官になる模様。勝てない（確信）

「お前運いいよなあ、教官たちに目をかけてもらえて。それに先輩に現役提督がいるんだろ？」

「こいつの先輩つて五月雨連れたあの人？ なんかゲッベルスに似た顔の」

「先輩というか……友だち？」

「そこ疑問形なんだ」

だつて提督になろうつてなつたきつかけ。あいつのどこにいる島風がすんごい可愛かつたから。可愛いは正義、仕方ないね。前世でもホイホイされたのは島風だつたしやつぱり島風可愛いんだよなあ島風。

無事卒業して、同期は別鎮守府に回されたり同じとこでも工廠や裏方だつたりとあまり会うことは少なくなつてしまつたが。けれど緑色のスマホのトークアプリでつながつてゐるしだつて俺たち仲間だもんげ！ つてやつ。

「では初期艦を選んでください。現在初期艦として選べる艦はこちらとなります」

本営所属の軽巡洋艦「大淀」さんから渡された資料に記載された初期艦は、うんいつも見るメンバーだつた。主人公、ツンデレ、メイド、プラズマ、ドジつ子の五人。しばらく艦隊の運用を学ぶためにいろんな鎮守府から艦を譲り受けることになるらしいが、この初期艦だけは自分の艦になる。

艦と提督との間には絆とかなんやらがあつて力を十二分に出すためには自分の艦を使わないといけないらしい。この示された五人は俺との絆があるとか妖精さんがなんかの装置で測つた。詳しくは知らん。

つまりここで選ばなくともいつかはうちの鎮守府に移籍してくるつてこと、説明終わり！

「せつかくだから俺はこの暁型四番艦を選ぶのです！」  
無論前世での初期艦でもある。

「では後日、鎮守府に『電』、他鎮守府から派遣の『大井』、『木曾』、『比叡』が着任します。迎え入れる用意をしておいてください」「了解！」

なんかバランス悪く無いかな、ほら重巡とか軽空母とかさ。あ、戦艦と空母はいいです資材を食うので……というか比叡がしばらく置物になつちやうやだー。

「そうそう、派遣の艦娘は貴方の知る人達ですから」

ふと思い出したかのように言い出した大淀の言葉に脳内でキーカードを引き当てた決闘者のS.Eが流れた。どういう……ことだ……！ 俺の知つている艦娘なんて友人提督のところのを除けば教官たちしかいないのだが。

「もしや教官たちがうちに……」

「はい、ですがもう教官ではないですよ？ 貴方の部下です」

なんてこつたい。

つまりどういうことだらうかと妖精さんを見る。学校からここまでひつついてきた妖精さんたちはみんなニヤニヤと笑うだけでなにも答えてくれない。リーダー格の一匹にじとつとした視線を投げたら露骨に目をそらされた。おい、絶対になにか知ってるだろお前ら。考えられるのはいくつかある。妙に厳しかった元教官たちのことだ、いきなり提督になつて調子に乗るんじやないと監視に来た。あ、これ有力説だ。ふたつ目はこの俺様に惚れて、好きな子に苛めたくなるアレをしてたからついてきたとかいうのだ。いやあモテる男は辛いなあとか脳内でふざけようかと思つたけど最初に思ついたのが有力説過ぎて冷や汗が流れる。

卒業の時艦内で調子に乗つてたのバレてたんかな……。

数日が経つて艦娘たちがやつてきた。

俺の初めての艦たちだ。四分の三が学校の教官だけど。ものすごくやり辛そうだけど。ふと思つたんだけど教官たくさん抜けちゃつて大丈夫なのかな、一応退役した艦もいるし彼女らが指導にあたつたりもできるとは思うが。

「電です、どうかよろしくお願ひいたします」

「重雷装艦、大井です。あのガキが私の提督なんてね、無様な作戦だけは立てないように」

「木曾だ最高の勝利を与えてやる。大井姉さんはこう言うけど大丈夫だ、お前を信じる俺を信じろ」

「比叡です！ 気合！ 入れて！ 一緒に頑張りましよう！」

電の自己紹介にほわわくんとなり、次の大井での背筋が寒くなつた。これが落差……つ！ そして木曾に男にはいはずの乙女の心臓が高鳴り比叡で気合が入る。

ふと気がついたけど大井に木曾、改二じやない？ 海兵学校時代は軽巡として色々してたから改くらいだと思つてたけど実は重雷装巡洋艦だつたのか、やつたー！ 正面海域のイ級は会敵とともに魚雷で爆発四散！ インガオホー！

それに比叡も改二な気がする。過剰戦力じゃないですかねえ、僕は電ちゃんと共にレベル1から始めます。

「俺が提督だ。これから共に戦つていこう。とりあえず電を秘書艦として艦隊運用を始めていこうか。よろしく頼む」

俺の、俺達の艦隊これくしょんはこれからだ！

「命中させちゃいます！」

「ギエニアアアアアア！」

「なのです！」

暁型四番艦「電」、練度99

「え、ええ……重巡ワンパンかよ……」

さいつしょつからクライマックスな自艦隊に提督は困惑することしか出来なかつた。

※

「では行つてくるのです！」

電は意氣揚々と自分の所属していた鎮守府を出発した。ようやく会えるのだ、自分の提督に。

創りだされた自分には前世の記憶があつた。前世の練度と今の練度とで多大な差があつたせいで思うように体が動かせなくとも蓄積された経験は、自分の提督ではない提督の下であつてもそれなりの戦果を上げることができていた。

人を守るために戦う、その信念を持つ電はこの生まれ変わりに異論はない。けれどもずっとそばにいた彼が近くにいないことは、彼女の心に影を落としていた。

「お、あの子つて」

「ああ、暁型の電だ。しつかしいきなり提督に興味が湧くつて……もつと早ければ俺と同期だつたろうに」

「いいんだよきつかけなんてなんでも良いのさ。俺は護国的心に目覚めた！」

「適當ぶつこいて……」

港町で声を潜めて行われたその会話は電の耳にはしつかり聞こえてきた。あまり適当な心持ちで提督になられてものまる、と思いつつ何故か心がざわついてその声の方向に目を向けた。

「それにうちの親戚も海軍だつたんだ」

「へえ」

「ばあちゃんの兄ちゃんが熊野の甲板掃除をしていた。つまり……俺は熊野の全身エステができる！」

「……」いつ相当なアホだ

会話を一人の少年。片方は海兵学校の制服で、もう片方は見慣れない学生服。地方から来たのだろうか。電はその見慣れない学生服の少年を一目見た瞬間に『繋がった』

そう思つた瞬間、改裝されていなかつた電は改の状態に。そして練度も最大にまで取り戻した。『あの』特殊装備分の練度は取り返せなかつたがそれでもいい。やつと、やつと会えた。あの提督に。

「妖精さん、あの人のこと頼むのです」

「ラジャ！ ソウビハ？」

「妖精さんがいなくても大丈夫。あの提督の下でない私なら”それくらいの練度”と誤魔化せます」

「リョウカイ！ マタネ！」

電から離れた妖精は彼の元へと駆け寄る。そして服をよじ登つたかと思えば手元の飲み物を奪つて飲み始めた。

「ちよ、君！」

「ケプ、アリガト！」

「まあまあ妖精さんのお腹分だとそんな無いからいいだろ？ てかほんつと好かれてるよなお前は」

「だよなあ。不思議だ」

彼は少年と青年の間にまで育つた。奇しくもそれは電と彼が前世で出会つたときと同じ姿だつた。その鋭い手腕で深海の敵との戦いを終わらせた男の懐かしい姿。電は自然と笑みが浮かぶ。

「電です、どうかよろしくお願ひいたします」

あの時と同じ言葉で、同じように目一杯背筋を伸ばして愛しい提督

へと挨拶をした。

(ところで派遣されてきた大井さん、木曾さん、比叡さんが改二の状態  
なのですが……まさか、ですよね)  
そのままかである。

### 3 神通の憂鬱

艦娘にもごく稀に変異種なるものが生まれるらしい。どうして生まれてくるのかわからないが、戦闘自体に問題がないのであれば大体個性ということで片付けられる。

「とは言つても、これを個性と言つて良いのか……」

むむう、と眉を顰めながら建造された目の前の軽巡洋艦を眺める。優しげな顔立ちに凛として透き通った瞳、どこか鋭い雰囲気を漂わせるも、それ以上に包容力を感じさせる。女侍、といった出で立ちで魚雷を刀のように装備し額には鉢巻が巻かれている。

軽巡洋艦「神通」、俺の目の前にいる少女は海の上では苛烈に華を咲かせる、らしい。

いやまあそれはどうでもいいのだ。普段はニコニコ笑いながらもふとした拍子にヤバい表情を見せる大井で慣れている。慣れたくもなかつたけど。問題は

(この神通、建造された時から改二ってどういうことなの……)

「あの、提督。……そんなに見つめられると照れちゃいます」

顔を真赤にした、かわいい。じやなくて

「ねえ電」

「はい？」

「この神通て俗にいう変異種つてのだよね」

「なのです」

着任初日、とりあえず軽空母レシピを使つて建造してみたのだが、まあそんなうまくいくわけがなく軽巡が建造されるよと妖精さんに言われて数日待つた。ゲームでは数時間以内でどんな艦種でも建造が出来たのだけれどさすがにそんな早く建造できるというわけでもない。が、船舶同様の時間がかかるということでもない。

秘書艦にしていた電からの建造終了の報告を受け工廠へと向かつたのだが、出てきたのはすでに改二の状態だつた神通。

これまで確認されてきた外見上の変異種は通称『ヤング長門』のようなものだつたり軽空母状態の『千歳』、『千代田』みたいなもの。と

いうかそもそも改二というもの認識されていないらしく、見た感じ改二状態であるいまうちにいる「大井」「木曾」「比叡」だつて全員書類上は改なのだ。故に俺は改二という言葉ではなく変異種なのかと電に聞いたら肯定の返事が来た。

なんで変異種と聞いたのかって？ そりや改二っていう知られてすら無い言葉を言つて怪しまれるのも嫌だつたしね。

「着任の書類のための写真は撮つてあるのです」

「ありがとう、電。それじゃあ神通さん、執務室に案内するよ」  
なんか神通さんつてさん付けしたくならない？ 俺はなる。加賀さんとか妙高さんとか語呂が良いというかなんというか。やたら神通さんは自分の左手が気になるようなんだけどどうしたんだろうか。いまうちにいる艦娘全員もだけどやたら左手が気になるらしい。なにかのおまじないだろうか、こんどあの友人提督に聞いてみるか。「けど奇妙な縁を感じるな」

「……どうかなされました？」

「いいや、なんでもない」

前世でも最初の建造艦は神通さんだつた。ほんと不思議なものだ、正面海域を電と神通さんの二隻でしばらくレベリングしてたような気がする。最初はその少し内向的な見た目に惹かれて建造できたことを喜んでいたのだけれども、史実を知つてやるときはやる娘さんだと分かつた時からなるほどこれが真の「大和撫子」かとますます好きになつてしまつた。

改二が発表された時は狂喜乱舞したし、姿が敵に向かう覚悟を見せているようで、彼女にはかなり出撃してもらつていた。アブウがチートになるまでは。イベントは攻略するものだからね、仕方ないね。でも半々くらいでは使つてました。

「あら神通さん」

「大井さん……大井さんも私と同じ？」

「そう、貴女も、なのね」

ああ分かつていたわ薄々気がついていたわとブツブツと大井がつぶやき始めた。というか目の前に提督がいるのに挨拶がないつて提

督泣いちやうよ？ いくら出身が同じだからといって無視はヤメテ！

ハツ、出身。……そうか、この二人は川崎か。カワサキかあ……二人共強烈な個性あるもんな。川崎の面々を思い浮かべてそう思つた。けどそう言えば別の造船所出身でも艦娘は全員個性的だつた。

「あ、提督こんにちは～ウフフ」

思い出したように挨拶をして近づいてくる。何やら嫌な予感がして背筋に悪寒が走り、思わず一步下がつてしまふ。少ししたの位置からガツと肩を掴まれ頭の高さを彼女と同じ所まで下げられる。痛い、痛いよ！ 人が軍艦に勝てるわけ無いだろ！

「ねえ貴方、彼女をいやらしい目で見てたでしょ」

「い、いえ見ては」

「今日は許すけどもし彼女が別の神通だつたら……」

耳元でドスの利いた声出さないでください、漏らしちゃう。提督怖くて漏らしちゃうから。てか別の神通てなに、どういうことなの。別の神通とはどういうことですか、別の神通ということですか。まるで意味が分からんぞ！

「今夜私の部屋にいらっしゃいな。この提督の下にいる娘集めてお茶をしたいわ。ね、提督？ 全員の夜の日程開けておいてくださいらない？」

「り、了解であります教官！」

「あらやだ今の私は貴方の船よ。うふふ……」

大井には一生勝てない、そう思つた瞬間だつた。

※

瞳を開けたら遠い昔の始まりと同じ光景だつた。

「ケンゾウセイコウ！」

「センドダイガタ！ ジンツウ！」

「ニスイセン！ ニスイセン！」

妖精たちの声を聞きながら体を起こす。そう、また産まれたのか。

そう思うのと同時に自分の提督がまた彼であることに歓喜した。はじめて会った時の彼のポカンとした顔、大方私のような内向的に見える娘が戦場に出ることに疑問を抱いたのだろう。本当に懐かしい、また一緒に戦えるだなんて。

だけど、繋がりが足りない。特殊兵装として渡された大切な大切なアレがない。彼にとつて特別な意味はなくとも、艦隊という家族の生存率を上げるためにものだつたとしても、私という乙女にとつては幸せの象徴だった。

「神通さん、ですね」

「電ちゃん」

「まさか改二の状態で建造されるだなんて……」

「改二？」 本当だわ、この装備は一度目の改装の時と同じもの」

そのつぶやいた独り言を耳に入れた電ちゃんは、目をまんまるに見開いて。そして驚きの声を上げた。

「もしかして神通さん!?」

「え、電ちゃん。まさか貴女も『前』の記憶が

「はい！　はい！　まさかとは思っていましたがびっくりです！」

改二という名称はあまり知られていない。『前』の私達だつて初めて知つたのは『大井』『北上』が大本営により改装されてようやくだつたのだ。電ちゃんによれば、この世界では改二は事例が少ないためにまだ変異種の一つくらいにしか認識されていない。改二と聞いて反応出来るのは私達のような前世持ちぐらいとのことだ。

懐かしい若い提督に連れられて執務室に。途中で大井さんに出会いお茶に誘われた。大井さんが見た目改二の状態だつたので思わず同じかと聞いたらそうだと言われた。なんということでしょうが、世界を超えてまた彼女らと一緒に居られるだなんて。

「单刀直入に聞くわ。あなた達もここではないどこかで彼に指揮されていた記憶、あるんじゃないかしら？」

大井さんに集められた艦。「電」「木曾」「比叡」は本当に前の記憶を持つていた。船だつたときに練習艦だつた電ちゃん以外の三隻は、それもあつて海兵学校で教官をしていた時に彼と出会えたという。だ

が、大喜びで話しかけても彼はただの教官に対する態度で懐かしさなど微塵もなかつた。

記憶があるのは自分たちだけで、彼は同一人物であつても記憶が無い。かつての手腕などかけらも見せず、ただただ無知な学生だつた。「過去さえ思い出さなければよかつた、最初はそう思つていたんだけどやつぱり司令は司令でさ。根本的なところは変わつていなかつた。気付いてからは前よりももつともつとすゞい司令になつてもらおうと指導に気合！ 入れました！」

「一時期比叡がしおれてたのはどうしてだつて思つてたけどそつたのか」

「む、そういう木曾だつて剣にキレが無かつたときありましたよ」

教官だつた艦は全員、提督を一番にしようと鍛えたらしい。公私混合じやないかな、と思つたものの自分ももし教官だつたなら提督を素晴らしい提督にするために毎日血反吐を吐くような特訓をさせてた自信がある。

「……神通さんが教官じゃなくて良かったわ」

「私にも加減は分かります！」

「どうかしらねえ」

大井さんも似たり寄つたりじやないのかしら。この娘は好意を素直に出せすぎつく当たる娘だから。

「あつ」

「どうした比叡」

「いや木曾さん。私たちはその、提督を強くしようときつく指導してたじやないです」

「そうだな」

「じゃあ香取さんや鹿島もかなり厳し目でしたけどまさか……」

「もしそうだとしても練習巡洋艦は戦闘向けじやないのです。どう頑張つても着任したての提督の下に来られないのです。海兵学校で羨ましがつてるといいのです」

やつぱり私の知る電ちゃんだなあ、と思いました。

## 4 タ立の憂鬱

「てーとくさん！ 次はなにをすればいいっぽい？」

そのセリフを言うのはお前じやない。そうだろ、ミカア！

オルガ提督<sup>ハコ</sup>こつこを早くやりたいんですが、三日月さんの着任はまだでしようかね。それはともかく、我が鎮守府に赤いおめめの小さな狂犬、タ立ちやんがやつてきました。ちなみに赤目の時点ではわかつたと思うけれど改二です。先に彼女の姉の村雨など着任したけれど彼女らがなんか変異種だつたりしなかつたので油断してました。

よく見なくともぴょんぴょんと動く頭部の耳っぽい髪の毛がとてもかわいらしいのですが、戦闘時はあの神通さんみたいに敵に全く容赦が無いらしい。こんなに見た目はお転婆なお嬢様なのに。

「はいはいステイスティ

「わふわふ！」

「ようししい子だ。じゃあそこでしれつと逃げようとしている望月を捕まえに行こうか」

「了解っぽい！」

「ちよ、今哨戒任務し終わつたところじや……睦月型が勝てるわけ無いじやんこんな化物……」

目にも留まらぬ速さで駆けたタ立により逃げようとした望月は捕まつた。そうは言つても望月さんや、回避値の上限は二人共一緒なんやでと心のなかでつぶやく。こういう数値がどこまで現実に反映されるかは知らないけれど。

建造して現れた艦娘は全員が練度99と推定できるほどであり、提督として何か指示するまでもなく力でワンパンできているのが現状である。提督不要論が脳内で駆け巡るものの、何故か艦娘たちからはぞんざいに扱われるでもなく、むしろ好意的に接せられて困惑してしまう。

「ほめてほめて～！」

「よしよし。んじやあ二人共補給に入つてくれ」

「えー、補給するなら捕まえなくてもいいじゃん」「指示聞かずに部屋を抜けだそうとした君が悪い」

「一理ある」

望月はけつこう惫けたがるが、なんだかんだで働いてくれる。いるよね口ではだるいとかもう無理とか言いつつホントは生真面目で誰もやらなくなつたら真剣に物事進めちゃうようなの。そういう娘は提督的には結構ポイント高いよ。

「時間もちょうどいいしさー、提督も補給、しよ？」

「確かにいい時間だな。少し早めだけど夕食だな」

「提督と一緒にっぽい？ 嬉しいっぽい！」

ぐりぐりと頭を胸元に擦り付けてくる夕立を遠ざけようと腕に力を込めるもピクリとも動かない。軍艦に人間が勝てるわけ無いと知つてはいたけど駆逐艦なら、ていう淡い思いは消え去つた。骨が折れたり内臓が潰れる勢いじゃないだけまあいいけれど、苦しいです。「二人とも、何か不満なところとか無いか？ いま艦隊を指揮しているのは艦が少ないと俺一人だから、どうしても手の届かないところがあると思うんだ」

「んー、文句ないよ」

「夕立は提督さんと一緒になら毎日が楽しいっぽい！」

「そうか？ 無理とかしていいのか？ 普通は俺以外にもう一人副司令とか置いたりする……」

俺がそこまで言つたところで、少し離れてドアを開けようとしていた望月が顔を向ける。突っ込んできてる夕立に対応するために多少前かがみになつていたため、背の小さい望月でも今の俺と目線がほぼ等しくなつた。眼鏡の奥の彼女の瞳は眠たげに半分閉じている普段とは違い、どこか怪しげに光つていた。

胸元の夕立もこちらに顔を向け、その真つ赤な瞳が俺を射抜く。どこまでもまっすぐで、まんまるな瞳は犬みたいにキラキラと輝いていた。

「司令官だけでいいよ」

「提督さん以外、いらなければいい」

望月はどう読めば良いのか分からず表情で、それに対し夕立は誰が見ても分かる満面の笑みで。全く同じことを返してきた。

「……そうか、それならいいんだ。ちょっと前までうちにいた大井がうるさくてな」

「大井さんはすぐすぎる人だからねえ、そうしようげることはないよ。あたしと一緒にゆるくやつていこうぜ。なあ？」

大井やほかの俺の元教官たちは一旦大本営へと移動している。俺が実際に提督としてやつていけるかどうかの報告や、海兵学校の引き継ぎなどなど色々あるらしい。提督と艦娘の繋がりみたいなので薄々彼女らが俺の艦だとは気付いてはいるが、複雑な心境だ。上司というか目上だった人を部下として率いるつてなんとも言いがたい奇妙な感覚だ。

うちの鎮守府にまたやつてくるのはいつになるやら。出来れば早めに比叡に帰つてきて欲しい。資材的に運用できないけれど、直感だが彼女なら夕立を制御できそうな気がする。彼女も犬っぽいし。

ようやくまとわりついてくるのをやめた夕立と望月と並んで食堂へ向かう。前世の知識的には艦隊の食べ物は間宮とか鳳翔さんがやつてるというのがテンプレだつたが、そんな夢のある話があるわけがない。基本的に全員で分担しつつ作っている。もちろん俺もだ。今日の当番は

「遅いわよ！ クソ提督！」

「ごめん曙。仕事がキリ悪くてさ」

「……」

「曙？」

「……」

こいつだ。綾波型八番艦「曙」、出会い頭からクソ提督と呼んでくるなんともまあ上官に対して反抗的な少女だ。そして返事をしない。あだ名で呼ばないと返事をくれないので。

「ぼのたん」

「ぼのたんて呼ぶなクソ提督！」

曙、て呼んでも返事しないからぼのたんって呼んだのに罵声を浴び

せられた、提督悲しい。

「全く、クソ提督が遅いからサラダまで作つちゃつたじやない。残したら承知しないからね！」

プリプリと怒りながらも配膳していく曜、席についた俺は目の前に座つた夕立にじつと見つめられる。

「提督さんこそ不満は無いっぽい？」

「俺か？ 全然ないよ。こんな状況で不満なんて言えないさ。君たちの前では余計にね」

彼女らは小さい女の子ではあっても、記憶には敬意を払うべき経験がある。あの戦争を必死に戦つてきた彼女らを思えばこの程度で音を上げられない。が、しいて言うならば

「大本営に認められれば、君たちに雑用なんてさせずに任務に集中させられるんだけどなあ……」

※

提督さんが寝た。夕方に提督さんが副司令を置くとか言い出したけど、とんでもない。そんなの置かれちゃつたら秘書艦として提督さんと一緒に過ごす時間が少なくなつちやうっぽいし、艦隊に知らない人を入れたくない。だつて提督さんは私達の提督さんだもん。

用事があつて大本営や街に行くのだつてほんとうは止めたいけど、それが本当に必要なことだから止められない。提督さんが私達のためにやつていることだから。

「やつぱり提督さんは私の提督さんっぽい。隠してるところも同じっぽい」

彼の日誌、個人的な内容だから私達や組織に対した配慮をする必要のない本心からの言葉。四六時中提督さんを観察していても唯一分からぬ本心がそこだけにある。

「提督さん、嬉しがつてる。女の子として見られてないのは残念だけど、『今は』それでいいっぽい」

犬とじやれているみたいで樂しいって書いてあつた。拒絶されて

いないとわかると明日ももつともつとひつつきたくなる。嗅ぎ慣れていた落ち着いた匂いではなく、懐かしい若々しい匂いは心臓が弾んできて顔が真っ赤になる。

「記憶が無いなら私だけの提督さんにできるっぽい？ みんなには悪いけどやる気が出てきたっぽい！」

どうせみんなも同じことを考えているだろう。一番のあの人以外にもアレをみんなに渡して、しかも効果があつたということはそれだけ全員にチャンスがあつたということなのだ。あの人が着任できていない間にどれだけ距離を詰められるか。

「夕立？」

「村雨もお散歩っぽい？」

「違うわ。夕立も寝られるときには寝ときなさい。提督にちよつといいとこ、見せたいんでしょ？」

「……村雨は余裕っぽい？」

「まさか」

姉妹の中でも比較的容姿の似ている姉はクリスリと笑うと夕立の頭をぽんぽんと叩く。彼にそうされるほどではないけれど、やっぱり心地が良い。

「女の子としていいところを見せるのもいいけれど、やっぱり私たちは駆逐艦。アピールするなら海の上、そうじやないかしら？」

「ほい！」

「それじゃ、きちんと寝て明日に備えましょ。……とは言つても夕立には歯ごたえ無いかもだけど」

「そんなこと無いっぽい。提督さんが見てくれるなら、いつでも素敵なおパーティっぽい！」

素敵な素敵な提督さん。彼をただの新米として扱っている大本営に彼の実力をを見せつける。そのためには夕立たちが頑張ると一番の近道っぽい。でも、闇雲に注目させすぎちゃうと彼が面倒な目に合うかもしれないから加減が難しいっぽい。

「提督さんは今の地位に不満があるっぽい」

「ふうん……提督さんだけじやなくて上にもちよつとだけいいとこ

ろ、見せなきやね

「ぽいー。」

見ててね提督さん、提督さんのためなら夕立なんだつてするつぽい

！

## 5 韶の憂鬱

「女の子はみんなアイドルなんだよ！」

「どうしたんだい司令官、今日はやけに気合が入つてるね」「やあ響。今日の夜は那珂ちゃん含めた数人でカラオケいくからそれでな」

「ああなるほど。道理でね」

うおおと気合を入れていたら透き通るような銀の髪に雪のような白い少女が声をかけてきた。トレードマークの真っ白な帽子を右手に持ち、少し癖のついた髪を揺らす彼女の名前は暁型二番艦「Bep ный（ヴェールヌイ）」

だが、彼女の希望で俺たちは生まれた時の名前の「響」と呼んでいる。別に「信頼できる」という意味の異国の名前が嫌いなわけじゃない。近くに姉妹がいるのならこの名前の方がしつくりくるのだ、とのことだ。

「あまりはしゃぎすぎて翌日に疲れてを残して神通さんに怒られないよう注意しないとね」

「言つても響、今日を一番楽しみにしてるのたぶん神通さんだよ。いつも魚雷を装備しているところに光る棒がだな」「カラオケなのにかい？……なんだ、やっぱり川内型は面白いな」「まつたくだ」

鎮守府にもつと艦娘が増えた。基本的に電を秘書艦においているのだが、彼女の非番の日や出撃する日などには他の艦に任せている。響はあまり口を開くタイプではないものの、どこかしら天然の氣があり、話していくとてもおもしろい娘だ。

響と会話をしながら仕事を進める。鎮守府の規模が大きくなればなるほど仕事量が増えていき激務になるらしいのだが、着任してから日が浅く、そんなに艦娘もいないので結構暇なのである。俺のやることと言つたら資材管理に建造許可願、上の人間に話がしやすくなるためのお食事会などなど。

お食事会、と聞いて曙は『ハア？ クソ提督の癖に立派な、身分ね。

羽目を外し過ぎないように私がついていくわ。ちょっと、襟が立つて  
るわよみつともない！」と囁み付いてきた、可愛い。なんというか、  
曙つていいお母さんになりそุดなあと思つてしまつた。思春期の  
息子と喧嘩しちやつて夫に泣きつく曙ママ……アリだな。

「提督く、少し時間いいかしら？」

「夕張か。どうした？」

執務室に入つてきた少女は夕張、出撃が無かつたら工廠に入り浸つ  
て何やら怪しい開発をしている艦娘だ。彼女の開発では艦娘が聞く  
と嫌な気分になる音が出たりするなど不思議なところがあるが、出来  
上がる兵装は普通なことが多い。うちの鎮守府、工廠には明石がまだ  
着任していないためにあそこの主は夕張、というイメージが形成され  
つつある。

「この装備のデータなんですけど——」

うちにやつてきた艦娘たちはみんな強さが異常である。以前にう  
ちよりも少し先輩な提督、と言つても副司令や他の仕事などで鎮守府  
に在籍していた期間は俺なんかよりも遙かに長い人の艦隊と演習を  
したのだが、あちらが機動部隊でこちらが水雷戦隊。近代の海戦は制  
空権が物を言うというのに、うちの子たちはいとも簡単容易く敵を粉碎し  
た。圧倒的であつた。

神通が切り込み、夕立が吠える。武闘派の彼女らが暴れ回り、電以  
下の駆逐艦たちはサポートに回る。見事なまでな立ち回りで艦載機  
を撃ち落とし、それらからの攻撃をかわす。演習の後あつちの艦隊は  
引きつった顔をしていた。

「——ということで那珂ちゃんにこの装備を……て、聞いてます？」  
「聞いてる聞いてる。また罪のない駆逐イ級が海の藻屑となるんだ  
ろ。提督知つてる」

「聞いてないじやないですか。というか提督、こつちにやつてくる駆  
逐イ級は偵察に加えて時に攻撃してくるんですよ。罪はありあり  
じやないですか」

「そう言われれば」

夕張のデータを受け取り、ぐぐつと伸びをする。最近こうも書類仕

事ばかりだと体がなまつてくる。毎朝ランニングとかはしているが、学校時代に比べてそんなきつくなかった。どんどん筋肉が落ちて体重が減ってきていたし、元教官組が艦隊に加わつたらと思うと震えが止まらない。

とりあえず神通さんに剣道の試合でも申し込みに……やめておこう。防具ごと真つ二つにされそうな気がしてきた。いや、彼女なら防具だけ無事で中身の俺が爆発四散！ なんてこともありますかもしない。やっぱりここは我が鎮守府のマスコット犬こと夕立と散歩に出かけるか？ なんか深海棲艦数匹毎朝狩ることになりそうだ、やめやめ。

「それじゃ提督、また夜にね」

「おう」

夕張はまたデータ取りに戻るらしい。ふと時間を見てみるともう夕方だ。任務で離れている艦、訓練している艦がそろそろ戻ってくる頃だろう。仕事も少し手を離して彼女らを迎えて行くとするか。

俺の歩く少し後ろをついてくる響、彼女は妹の電と同じ部屋で過ごしているが、他の暁型がまだ着任してこないので部屋が少し寂しい、そういわれた。

「司令官、私達の部屋においてよ。そして一緒に寝よう。電も喜ぶ」「いや、それはどうかと思うんだけど」

「残念だ……」

ほんとに残念そうな声色が後ろからする。一番上の姉がいないうらか知らないが響と電は結構な甘えたがりだ。頑張つて建造してあげないとなあと思うのだが、艦を狙い通りに建造なんてできないし暁があまり出てこないイメージがあるから当分先になっちゃうかなあ。

「私達が司令官の部屋に行こうか」

「まあいいけど、寝てる間に来るなよ？ 非常事態のために一瞬で起きる訓練させられてたから起きてしまうかもしれない」

「つまり起こさなければいいんだね」

「人の話を聞いてた？ 寝てる間に来るなって」

「私は絶対に起こさない。信頼の名は伊達じやないってどこ見せてあ

げるよ」

「やだこの子完全にマイペース」

起こさないなら、とややあつて認めてしまうあたり押しに弱いなあと実感してしまった。認めたけど鍵はかけさせてもらうがな、どうやつても入れないだろう残念だつたな！

※

「響ちゃん、こんばんは」

「那珂ちゃんか、カラオケは楽しかつたかい？」

「うん！」

那珂ちゃんは本当に楽しかつた、といつた笑顔をみせてくれる。彼女はムードメーカーでいつも私達を励ましてくれる。そして、励ますだけではなくやるときには神通さん顔負けの戦いで危機を切り抜ける。本人は「アイドルはキラキラしてるものだから」つて、あまり戦闘時の評価を受け取りたがらないけれどみんなが彼女を認めている。四水戦の子が那珂ちゃんを尊敬するのはそんなところも大きい。

「電も行つてたのか」

「なのです、響ちゃんが秘書艦で行けなかつたの残念なのです」

「またいつでも機会はあるさ」

那珂ちゃんに別れを告げて電と歩く。彼女も私もすでに寝間着に着替えてすでに寝るだけだ、というのに廊下を歩いているのは司令官の部屋に向かうためだ。司令官のことだ、部屋に鍵をかけているが合鍵を持っている私たちには関係がない。あの人がいない今だから大っぴらに彼に甘える事が出来る。

「それで、鎮守府近辺の歓楽街だつたけど」

「大丈夫だつたのです。多少煩わしい視線はあつたけど、許容範囲内かな？ 改二の建造が四隻ですし、私達の練度も異常。注目されるのは当然といえば当然だけど……」

「考えられるのが彼を建造用と拉致されないかということだ。他の鎮守府の動向も探りたいけれどもそんなことはできない、困つたものだ

な

鎮守府内ではあからさまなことはされないが、やはり外に踏み出せばそれなりに注目されているのが実感する。彼と自分たちの本当の実力からすればまだまだこの程度、とは思うけれども改二という物自体認知されていないのなら仕方もあるまい。

と、電と会話をしつつ司令官の部屋へと向かっていると、いつもは結んでいる髪の毛を全て下ろした鎮守府三大ツンデレの一角が彼の部屋の前に立っているのが見えた。ちなみに鎮守府三大ツンデレには諸説ある。

「夜更かしかしら？ 最近の暁型は不良になつたものね」

「曙こそ、こんな夜遅くにどうしたんだい？」

「司令官さんを襲いに来たのですか？」

「ばつ、電、変なことを言わないの。私はただ、クソ提督がきちんと寝ているか見に来ただけよ。あいつが寝不足で困るの私達なんだし」  
曙は分かりやすい嘘をついている。君のその腕の中にある枕は何なのだろうか、そう口にしようとしたがどうせ『寝たか確認しに来た私を布団に引きずり込んできた時に仕方なく寝るためよ！』なんて言うのが目に見えているので言わない。どうして昔も今もずっと素直じやないのだろうか、疑問だ。

「そうなのですか、私と響ちゃんは一緒に寝ようと思つて來たのですね？」

「そうだよ。司令官は来るな、来るなよと言つていたけどアレは間違いないふりだ。彼の信頼には応えないと」

昔ながらの伝統芸を使う司令官、あそこまで何度も来るなど言われたらそれはもう来て欲しいと言つているようなものだ。だから一緒に寝ても問題がないし、そもそも彼を起こさないように部屋に入るだなんて朝飯前だ。深夜だけれども。

曙も素直になればいいのにね。ぐぬぬ、といった表情で自室に帰つていく彼女を見送りながら心のなかでつぶやいた

「今日も一日お疲れ様、ハラショー」

彼の温もりに包まれながら私達二人は瞳を閉じた。

## 6 鳥海の憂鬱

長崎産の火力眼鏡つ子がやつてきて数日、電による重巡ワンパン撃破なんて霞むほどの華々しい戦果を上げる彼女は、やはり同じく武闘派の神通さんのように普段は穏やかな一步引いた娘さんだった。

執務室のクーラーが涼しい今日このごろ、セミがミンミンとくそうるさい求愛行動をしているのを遠くに聞きながら戦果報告をまとめている。新米提督ではありえない前代未聞の領域と言われるレベルの戦いをしているらしい我が艦隊だが、力で戦略をねじ伏せているために俺は置物なのである。一応戦略立てて戦闘中の指示などもしてはいるが、果たしてそれが本当に役に立っているのかが分からない。勝利して支配すれば過程や方法なぞどうでもよいのだ、時を止めるハイな吸血鬼も言つてたもんね。そのあと負けたけど。

「鳥海さん、ほんと火力が戦艦並なんだけど重巡なのか疑問に思えてきた」

「他鎮守府の船との比較ですか？」

「そうそう。上からこれはどういうことだと詰問されてなあ、彼女が持つてきた二号砲に電探を他鎮守府の鳥海のものと同一に差し替えても差が出てきてね。改装されていない長門型と同等ほどとも言われた」

「さすがは長崎の眼鏡ですね」

「電、それって褒めてるのか貶してるか微妙なラインなんだけどどちらのさ」

「さて、どっちなのでしょう」

たまーに毒を吐くから電が時々わからない。

黒髪の少女が部屋へと入ってきた。  
軽口を叩きながら比較データを眺めていると、遠征から帰つてきた

「補給、いただきました。司令官、次はなにをすればいいでしよう?」「見たか電、ミカを。あの目は裏切れねえ」

「三日月ちゃんは今日は夕方まで休んでおいてくださいなのです」

「うん、電ちゃんもお疲れさま」

ミカア！ と叫ぶ前に最近着任した三日月が執務室から出て行つちやつた。そんなに会話ををしていないというのに、オルガ提督ごっこ出来なかつたし。ほんと残念だなあ、着任ほんと心待ちにしてたから。

しょぼーんとしていると困つた顔をした電がため息をひとつ、そして無言で次の書類を渡してきた。俺はな、楽しみにしてたんだよ。ミカとオルフエンズごっこするのを、こんなんじや満足できなイゼ。

「もう、司令官さん！ 遊んでいないで仕事をするのです！」

「だつていま渡されたこの書類もだけど、朝一番に来た通達が気が滅入る内容なんだぜ？ うちの艦娘を数人連れて上に顔を出せなんて厄介事の匂いしかしない。しかも指定が『神通』『夕立』『那珂』『Бернини』『鳥海』ときた。艦がほとんどいないうのにこいつら連れて行くとか自殺行為だろう」

「通常とは異なる姿をした艦が複数所属する新米提督率いる鎮守府がこれだけ戦果を上げるならにか秘密があると思われても仕方ないのです」

「そとは言つてもなあ……どうにかして断れないか。もしくは連れて行く人数を減らせるか」

頭を抱える、なんともまあ面倒なことになつたものだ。例の五月雨を初期艦に選んだ友人提督からの手紙によれば、新米のくせにといふ妬みも多々上がつてゐるらしい。別に俺が妬まれても困りはしないのだが、もしそれで艦娘たちにまで何かあれば嫌だ。

どうしたものかと本日何度目かになるつぶやきを口の中でかみ殺し冷えた麦茶を呷れば、丁度出ていた艦隊が戻つてくるであろう時間ということに気がつく。執務室のそとからノックの後に鳥海です、との声がして彼女がやつてきた。

眉の上までに切り整えられた前髪と眼鏡で優等生、という雰囲気が漂うもその扇情的な服装がどうしても俺の居心地を悪くさせる。胸元が大きく開き、お腹を露出させて更にはミニスカート。今までうちにいた誰よりも肌色面積が多めで提督つらい。

「鳥海、那珂、敷波、望月、曙、雷。演習より帰投しました。こちら演

習の結果となります

「夜戦で相手をほぼ轟沈または大破にして勝利か、そしてこちらに大破以下の判定なし。お疲れ様、ゆっくりと休むといい」

この頃、演習相手の実力がどんどん上がってきてる。戦艦を中心とした砲火力主体の相手なら今日のように勝てるが、流石にうちの艦隊が異常なまでの強さがあるといつても限度がある。手練の空母を複数擁する艦隊と戦えば負けは見えている。そろそろうちも空母を建造しておきたい。ふむふむと考え込んでいると鳥海さんから声をかけられる。

「司令官さん、やはり私は指揮が苦手なようで。司令官さんさえよければ二人つきりで今回の演習の分析をしませんか？」

「それは構わないけれど、どうせなら他の子も」

「二人つきりがいいです」

「お、おう」

ずいっと詰め寄られる、距離的にも魅惑の谷間が視界にいやでも入ってしまい、その女性らしい丸みが多分にありつつも引き締まつた肉体は男を魅了するのには十分すぎて、邪な目で見ているのがバレないようになると必死に目をそらすと綺麗な茶の瞳と視線が絡まる。すると気付かないうちに首が縦に振られていた。何故だ！

少し離れたところで書類仕事をしていた電からジトツとした視線を投げられる。いや違うんだ男としての性が勝手に！

本当に鳥海さんが美人でクラつとしちゃう。  
「鳥海さん、それはいいですけれど今日はまだ司令官さんはお仕事がたくさんあるのです」

「そうですか。では鳥海、司令官さんのお手伝い作戦に入ります！  
やるわよ～！」

「え、演習の後だというのに元気だな……」

眼鏡をキラリと輝かせて謎のやる気を發揮した鳥海さん、その優等生のような見た目に違わない丁寧かつ迅速な仕事ぶりは惚れ惚れするほどであった。

※

「やはり計算通りですね。司令官さんの好みは前と一緒、まだ駆逐艦ばかりの今の艦隊内であれば私は圧倒的に有利ね」

姿見の前で恥ずかしさをこまかしながらも、どうすれば胸元を強調できるのかを研究しつつ彼のことを思う。世の中には子どもが好きだという特殊な男性がいるらしいが、彼がそうでなくてよかつた。少なくとも自分に性的魅力を感じているようだつたし、まずは手応えを感じる。

「それでも内面の大人らしさ、包容力というのは雷ちゃんには負けてしまうわね」

「そうかしら？」

「ええ、だつて私も雷ちゃんに時々甘えたくなるもの」

姿見にうつる自分の奥、ベッドの上に腰掛けてぱたぱたと足を振る少女、雷ちゃんは本当にどうしてか小さい少女なのに母性を感じさせる。いくら研究して計算したとしても彼女のようにはなれそうにない、計算じや再現しきれない。

「電がもし私が司令官と一緒になれば『二人で墮落して行っちゃうのです』とか言つてたけど

「確かにそういうなりそうね」

「絶対に無いわよ、私がついてるんだもん！」

きつとそういうところが司令官をダメにしちゃいそうなんだよなあとは思う。

脳内で彼と艦娘との関係性をもう一度整理する。今のところスキンシップが激しい夕立ちゃんも、司令官さんの中ではじやれてくる子犬のようにしか思つていはないはず。まあ、彼女自身それでいいと思っているフシはあるが。

次点で近いのはおそらく電ちやんだろう、なにせずっと一緒にいるのだ。初期艦は秘書艦を兼ねるからしかたがないだろうが、この姉あつて妹あり。時たま「ごいお母さんオーラを撒き散らす。

「もし私が司令官とケツコンしたらね、とりあえず司令官は仕事しな

いでずっと家にいられるように私が頑張るの！　ううん、もし家から出ようとするならベッドに縛り付けるわ。だつて私が何でもお世話しちゃうんだもん」

うわあ、と思わず声が出た。見た目の通りの純粋さ故にとても恐ろしいことをキラキラと輝いた目で語る。これが大井みみたいに暗く濁つた瞳であるのならまだしつくりくるのだけれども、これはいけない。

「うーん、でもだめだわ。司令官を部屋に閉じ込めただけでは満足できなーいわ。もつともつと大きなことをしなきや満足できない」「大きなことつて？」

「うん、既成事実とか」

「雷ちゃんみたいな子どもがいう言葉じゃないわよねそれは」「見た目と心の年齢が違うのは鳥海さんもでしょ？　問題無いわ！」

見た目は小さくても中身はそれなりの年齢、見た目通りの純粋さで今でも一緒の布団で寝てキスすれば子どもができるだなんて信じてるのは曙ちゃんくらい。あの子は見ていて微笑ましいけれども初心すぎて時たま心配になる。変な大人にだまされないだろうか……それはないか。一途だから他の男性に釣られることはないだろう。それは私も、ここにいる雷ちゃんも。

「あの人はほんつと女性としての魅力がすごいから司令官を手に入れるのなら今のうちよね」

「計算以上に鈍い方だから攻略が難しいし、かと言つて金剛さんみたいに押し押しでも駄目だつたしどうしたものかしらね。本当に読めないわ」

「やつぱりベッドに縛り付けて」

「艦隊のほとんどを敵に回す勇気があるのならやつてみると良いわ」

匂いから夕立ちゃんが一瞬で司令官さんを見つけ出しそうなのと怒った神通さんに那珂ちゃんから蹂躪される気がする。

「……無理ね」

雷ちゃんも同じ結論に至つたようだつた。穩便に彼の心を手に入れるには、やはり色仕掛けか。スカートの丈を更に短くすることを検

討し始めた。

「そういうえば鳥海さん、この枕は司令官のよね？」

「はい、少し寝心地が悪そうだったので高めの枕に買い換えて差し上げました。残ったのは捨てるのももつたいなかつたので私が」

「ふうん、そのこと司令官は知ってるの？」

「さてどうでしょう。彼が不在の間に枕を入れ替えたので」

「そうよね。特別司令官に伝えることでもないし」

「ええ」

# 第一部 彼女と出会うまでの憂鬱 乙

## 7 阿武隈の憂鬱

戦前のことはさわりしか知らないために、たまにどうしてこの子たちがという組み合わせがある。一番艦の暁を欠いた暁型三隻に加えて曙、そして阿武隈の集まりはまさにそういう組み合わせだった。が、まあ来歴を見てみればなるほどなと思う。

第一水雷戦隊旗艦であつた阿武隈。この集まりは現在我が艦隊に着任している中で彼女の下にいた艦の集まりであつた。そして名前繋がりではあるが護衛艦「いなづま」「いかづち」「あけぼの」ははるさめ型の姉妹でもある。この世界では俺だけしか知らない知識だ。

「なのです！」

「うつ……電ちゃん、突っ込んでくるのはやめて……痛い」

「とりやー！」

「雷ちゃん!？」

「えい」

「響ちゃんまで!？」

お腹に電が、背中に雷が。そして阿武隈から見て右に響がひつく。おおう、懐かれてるなあいことだと思いつつどうしようか迷っている様子でうずうずしている曙を見る。

「左あいてるぞ」

「べ、別に羨ましいとかじや

「俺は羨ましい、突撃していいかな?」

「この変態!」

お腹を抓られる。やめて、提督お腹が弱点だから変な声が出ちゃう。それはさておき、あの艦娘に大量にひつつかれている阿武隈は、妖精が大量に乗つかつてきている俺となんだか似ていてシンパシーを感じてしまう。うんうん、なんか嬉しいけど困るよね分かるよ分かるよ。あとお腹に駆逐艦が突撃するのなかなかに辛いよね夕立で知つてる。

しばらくするとおずおずと曙が阿武隈の右側にくつついで、提督適当命名「艦隊合体超改二阿武隈」みたいな感じになつた。頭部に何かを乗つけてみたいけど頭部か……艦首？ 北上様を持つてこなきや。「危ないこと考えながら前髪いじらないでくださいよう」「んー？ 危ないことなんて考えてないけどなあ」

「うそっ！ 艦首のあたりを危ない目で見てたから絶対考えてました！」

なんと最近の軽巡洋艦は読心術まで持つていてるというのか。  
「そんなわけありません！」

そりやそうだ。

艦首とか崩れやすい前髪とかともかく、どこかしら幼い雰囲気を漂わせながらも海兵学校で見た資料の阿武隈よりかは大人っぽい彼女をじいっと眺める。外見は外国の少女ではあるがれつきとした我が国の船である、かつて今の友軍と戦闘した時に彼らの姿を真似たところから来たのかもしれない。真相は阿武隈自身も知らないだろうし神のみぞ、といつたところか。

例によつて改二状態での着任であり、もしかして俺の知つてる改二艦は全て改二状態で建造されるのではと思いはじめた。

「もう、やんなつちやう。第一水雷戦隊旗艦阿武隈、ファミレスへ出撃します！ 提督のおごりなのでわたし的には全然おつけーです！」

第一水雷戦隊の会カツコカリの会合に何故か誘われたので親睦を深めようと思い参加することにした。鎮守府からそれほど離れていないところにあるファミレスにやつてきた。着席して注文をした後、隣の響と曙に腕を引つ張られてドリンクバーコーナーへとたどり着く。

ファミレスといえばドリンクバーでミックスジュースだよな！  
とりあえずコーラとオレンジジュースを混ぜた。響はカルピスで曙はオレンジジュース、かわいい。

「コーラとオレンジジュース混ぜたんですか？」

「よく気付いたな阿武隈」

「あたし的にはナシです」

真正面には雷と電に挟まれた阿武隈が座る。なにげに艦隊の指揮を取り始めて数ヶ月たつのに、こうやつて鎮守府の外へ複数の艦娘と一緒に来ることはなかつた。

「それにもしても深雪が着任と同時に大破入渠とは……」

「びっくりしたよね司令官。執務室で電と倒れてたもん」

雷の言うとおり、ある日執務室の扉を開けばそこには倒れた電とおなじく倒れた見慣れない駆逐艦の姿があつた。阿武隈の着任の少し前に本部から派遣されてきた彼女、吹雪型の深雪さんは不慮の事故によりしばらく療養している。

「次に顔を合わせるときには中破までになるよう努力するのです」

「電、当たる前提で話すのはどうかと思う」

響の言うとおりである。同じく大本営から派遣してきた白雪が妹である深雪の分まで頑張ってくれているが、まあさして仕事もないし深雪にほぼつきつきりな感じだ。

大本営の妖精の謎の技術により、この吹雪型二隻ともが俺の艦であると分かつたうえでの派遣らしい。建造しても艦娘との繋がりのようない場合、大本営に連絡してその艦の提督を探すらしいのだが今のところ俺の建造艦は全て俺の艦なのでどういった手続きを取るのか不明。

あちらにいる艦でうちの娘と確定しているのはあと「龍田」「赤城」であり、すでに顔合わせはしているのだが……うん、この派遣艦つてゲームと全く同じだ。なんというか本当に不思議というか。着任順もなんか一緒に気がする。もしあれで先行登録とかしてたら電と一緒に大井も着任できていたんだろうか。

やだ、なんか寒気がしちゃう。大井が帰つてくる前に北上様建造しようとがないと。

「北上さんがいれば大井さんをどうにか出来ると思つたら大間違いと思ひますけど……」

「なに？ 北上様を建造できれば北上LOVEな大井が落ち着くのではないのか！」

阿武隈が黙つて首を振る。悲しいね……

「まつたく、クソ提督はヘタレね」

「まあまあ曙ちゃん、そこも提督の可愛いところなのです」

「アンタのその感性、理解できないわ……」

あの隣でそう言われると困ります。というか電よ、俺が可愛いつてどういうことだ？ アレか、JKが学校の中年の先生に向かつてかわいいかわいい連呼するあれか？

「うん、紅茶にメロンソーダを入れてみたがなかなかに不思議な味だな。ハラショ―」

「さすがにどうかと思うわ……」

隣では響がカルピスを飲み終えて不思議な飲み物を作り始めていた。それを雷が諫めるが……だめだな、これで響が止まるわけがない。どんどんエスカレートしていくよくわからないものが出来上がるだろう。彼女はそういう娘だ。

こういう贅沢が出来るというのも先人の艦隊が国を守ってくれたからだ。これからもこう余裕のある生活を送れるように俺たちが頑張らないといけないな、と思う。

「そうですね頑張りましょう」

阿武隈のとびきりの笑顔はとてもかわいかった。

ところで阿武隈さんや、本当に人の心を読んでいないよね？

「当たり前です、エスペーじゃないんですから」

それもそうだ。エスペーなんているわけないじやないかははは。

※

「第一水雷戦隊の会カツコカリ楽しかったなあ！」

ふんふーんと鼻歌混じりで歩いていたら、向こうから。ビシツ背の伸びた侍のような女性が歩いてきた。あれは神通さんか、訓練の反省でも考えていました。雰囲気だ。あたし的には今のままで充分すぎるくらいだとは思うけれども神通さんは不満みたいね。

神通さんの下にいた二水戦の娘はまだ着任していないが、那珂ちゃんと四水戦は村雨ちゃんと夕立ちさんがいる。艦隊が寂しいし、もつ

ともつと駆逐艦が着任してほしいなあ。

「お疲れ様です神通さん、訓練でお悩みですか？」

「お疲れ様です阿武隈さん。そうですね、訓練で悩んでいますけれども相手がうちの子たちでないので……」

なるほど、那珂ちゃんにあたしが着任して余裕が出たから、大本営へ旗下の艦が少ないのであるし神通さんを貸し出すことになつたのね。あたし的に神通さんが抜けるのは結構な負担になりそうだけど、期間も半月と短いしままあまあオッケーかな？

それにあちらに行つてしまらく生活することはそれだけ情報が得られるということ。大井さんや木曾さん、比叡さんにも会えるだろうしいいことばかりだと思います。

「第一水雷戦隊の会力ツコカリはどうでした？」

「人数が少なかつたけど楽しかったです！ 神通さんも早くみんな揃うといいですね」

「ええ本当に。……それで」

「はい確かに見られてはいました。隠すようなこともないですしなにも困りませんケド……それだけ提督が注目されているということだしあたし的にはOKです」

「戦力増強はどこでも重要な課題ですものね、彼らの気持ちも分かりはしますが」

仲間内でスパイなんて……。見られて困るようなものもないしあたし達の練度が高くて改二の状態で建造される理由は私たち自身と提督が原因だから真似はできない。無駄なことをしていると早く気付いてくれればありがたいです。

「提督に害がないうちはこちらも手を出しませんが、何かあれば頼みますよ？」

「相手に気づかれない作戦行動はあたし的には十八番なんです。任せて任せて！」

## EO 7 神通改二と神通改

練度が高くなればなるほど艦娘は性能を上げていく。もし着任したばかりの艦娘と熟練の提督の下で何年も戦つてきた同型の艦娘が演習を行つた場合、よほどのラッキーパンチをもらわなかぎり後者が圧倒し勝利する。人体での戦闘を行う上での慣れということもあり、建造されたばかりの艦娘がそうでない艦娘たちと演習を行うということは、人体の上手い扱い方を習うということが一般的であった。だが、今ここで行われているのは新造艦と十年近く敵深海棲艦と戦つてきた艦との演習であるにも関わらず、前者が後者を歯牙にもかげないレベルで翻弄していた。

新造艦で変異種の神通、後に神通改二と正式に登録されるその艦は自分の下につく駆逐艦と共に大本営が観測した中で最大練度である神通改率いる水雷戦隊と激しい戦闘を行つていて。

この神通改は最前線を任せられる提督の下でエースとして戦つてきた艦娘だつた。練度47という史上最高のそれに自信を持つていてし、またそれにあぐらをかくこと無く鍛錬を欠かさない『神通』という艦について提督たちがイメージするそのままの少女だつた。

「これで最近建造されたばかり……！」

毎回演習の度に感じる戦慄を隠せない。それは彼女率いる水雷戦隊もだし、その上にいる提督の言葉だつた。陣形の変更、速度の緩急などといつたものから体に迫つた砲撃のかわし方という、明らかに人体に慣れている動き方。別にナメてかかつていたわけではない。戦果が異常と言われつつも、それは新造艦の範疇だろうと思つていた過去の自分に一言物申してやりたい気分だ。

(あれが、私)

最近海兵学校を卒業したばかりだというのに特例で提督になつた若者が建造したという変異種の神通。様々な鎮守府に現れた神通達の中でも最強と言われた己を遥かに超えたその戦いぶりは、まさしく戦場の華だ。

艦娘はその修羅場を乗り越えた数に加えて提督との絆によつてそ

の練度が上がっていく。強い敵と戦う機会があるはずもない新参の彼女がここまで力を持つということはそれだけ提督との絆が強固だとでも言うのか。

いや、絆だけでもない。彼女の指揮や戦い方もそれこそ測定可能最大の50に迫る47まで伸びた己よりも遥かに細い勝ち筋を拾う死闘を勝ち抜いてきたかのような纖細さがある。

「きやつ！」

『霞さん、大破です。引いてください』

『まだ行けるわよ！』

『大破判定です、引いてください』

副提督の通信に入る。相手神通が率いる朝潮の魚雷が命中したのだ。もつともこれは妖精さん謹製の訓練用でダメージが入るわけではないのだが。魚雷を放った朝潮も小破判定が出ている、彼女はこの鎮守府の朝潮であるためにどれだけの実力があるのかは知っていた。しかし旗艦の違いか、今までに見たことのないような戦果を上げているように見える。

（駆逐艦の扱い方も上手！）

一体どういうことだ。しかも提督のサポートが無い弱体化した状態でこれだ、もし提督が指揮をする対深海棲艦戦ではどういう強さになるのだろう。神通はそう思いながら、異常な別の自分から学ぼうと、勝ちを拾おうと死にものぐるいで海の上を駆け、砲撃を放つ。

「まだです、あなた達の限界はこれ以上のはずです！」

「妖精さん大丈夫!? よし、てーっ!!」

演習の様子をモニターで見ながらこの鎮守府の提督は腕を組む。横に立つ副提督は指示を出さず、両方の損壊状況が変わった時だけ声を出していた。そして約十分後に演習終了、結果は変異種の神通率いする艦隊が半数生き残ったのに対してもちらは全滅、D判定の完全な敗北であった。

提督は気付かないうちにこわばっていた体を解すかのように大きく息を吐く。艦隊にあの神通が派遣されてからそろそろ一週間、確実に自分達の練度は上昇していると感じていた。

あの鎮守府は異常だ。新造艦のはずが測定できない練度を持ち、艦時代に多大な戦果を上げた艦娘の多くが変異種である。大本営は彼女らを調べて、他の鎮守府の艦娘にも同じような改装が出来ないかと考へているらしい。

「あれがアーツの『神通』……なるほど教官たちが妙に気にかけていたのは、才能を認めていたからですね」

「彼女は君がよく話題に上げる例の」

「はい。同期で、主席のやつの艦娘です」

ただし年齢はあいつが結構上ですが、と付け加える海兵学校を二番で卒業した副提督。彼はその成績以上の力もあり数年もたてば最前线で艦隊を率いているだろうと言う稀代の天才、というのが提督の中で評価だった。才能だけで言えばこの艦隊を率いている自分では敵わないレベルで、経験を積むことが出来ればいずれ元帥まで上り詰められる。なぜなら彼の父親は元帥であり、徹底的に海の男になるよう磨き上げられてきたのだから。

だが、その天才をして勝てずに一番に立つた男があの神通の提督なのだ。

「あいつの吸収速度は氣味の悪いほどでした」

副提督は思い出すかのように瞳を閉じる。

「子どもが自転車に乗るために普通なら三輪車から慣らすなどするのをすっ飛ばして補助輪なしで自転車を与えられる。はじめはこぎ出すことなく倒れてしまうのに、一度でも自転車走らせてしまえばカンを取り戻すかのような速度で乗れるようになり、気がつけば段差を乗り越え悪路を走行している。あいつはそんなやつです」

「艦にある歴戦の司令官や艦長と戦ってきた記憶を参考し、変異種である彼女が変異種としての力でもつて記憶通りの戦いかたで戦果を上げた。なんてことは」

「ありえないですね。あの動き方は海兵学校で彼が好んだ戦い方だ。しかもあの神通はそれを自然に行っているように見えます。提督もそう思われたでしよう?」

「ああ……だが建造したばかりの艦に戦い方をどうやって覚えさせた

んだ」

訝しみながら、そして羨むように遠くの神通を見つめる。副提督は思う。自分の上に立つこの提督は新参の癖に頭角を表している例の同期に対して珍しく好意的な者だった。彼と同期で仲も良かつたので、ここに配属されたことを感謝している。

例の変異種ばかりの艦隊から様々などころへと艦が派遣されいると聞く。そして同型艦で現在最高練度の艦と模擬戦を繰り返し、幾度もボロボロになるまで叩きのめす。最高練度という奢りを打ち砕かれ、限界と思っていた実力の上を示され、全体的な艦娘の地力が底上げされつつある。

まったくすごいやつだよ、と副提督は口の中で呟いた。

「私はあの神通が味方でよかつたと思うよ。なんだあの火力は、重巡洋艦並みかそれ以上だ」

「艦娘は我々の思う艦のイメージが力を宿したものという考えがあると聞きます。神通は数ある軽巡洋艦のなかでも特筆されるべき戦果を持つている艦です。我々のそういうイメージが強くあの神通に宿つたのでしょうか？」

「ああ、なら納得だ。かの鎮守府の変異種はほとんどが武勲艦だったはず……先生方も興味津々に違いないな」

艦娘についてわかっていることは少ない。艦の記憶を持ち第一に国を守るということを信条とする少女たち、全員が全員目の覚めるような美少女。一般に知られているのはこのレベルである。

学者は艦のカウンセリングや妖精との対話を通じて艦娘の正体というものを探っているのだがなかなかに上手く行かない。何年もよくわからないままのために『深海棲艦とは艦娘の沈んだ後の姿』なんてことも囁かれたり『深海棲艦は地球が遭わした人間を滅ぼすための生物』だなんて都市伝説も広まる始末。そして艦娘、または深海棲艦を尊いものとした新興宗教団体も現れるなど混沌としつつある。

艦娘とは何か、それを知るための手がかりになるかもしない例の艦隊の変異種たち。あの艦隊に目を向けているのは大本営だけではないのだ。

モニターを眺めてつつ思案していた提督がポツリと呟く。

「君も、そして彼も素晴らしい……新しい時代の波が来ているのかもしれないな」

「提督？」

「敵が再び集まっていると聞いた。偵察機の情報では今まで見たことのない艦が出てきているらしい。そんな中、彼が現れたのは偶然ではないだろう」

これは必然だよ、と提督は強く口に出した。

「敵艦隊前線泊地……これまでにない戦いになるな」

彼はパソコンに入っていた『改艦娘改装計画』と書かれたデータを呼び出した。この計画が順調に進み自艦隊の被害が少しでも減ることを祈る。そして、今まで聞いたことのなかつた敵の泊地について聞いた副提督は目を見開いて冷や汗を一筋流す。

「来年の夏、覚悟しておけ」

副提督は上司のその言葉に敬礼を返すも、動搖した心は収まることがなかつた。

## 8 時雨の憂鬱

艦隊にペットが増えた。猫に犬つころである。増えたペットの猫のほう、多摩ちゃんは今日はのんびりと出撃しにいった。朝起きたら枕元に無実のイ級がお供えされてたりしないかちょっと心配だけど流石にそれはないよね……ね？

後日起きた時枕元にあつたのは小判だつた、何があつた。

「秋時雨……良い雨だね」

「そうね、落ち着くわ」

執務室等がある建物から少し離れたところ、木で出来た長い椅子に座つて俺は時雨と古鷹に挟まれていた。晚秋の雨に頭上の和傘が打たれて音を立てる。古鷹の言うとおり、どこか気持ちが落ち着いてくる気がする。もしかしたら雨の音や周囲の風景からくるものではなく、物静かな時雨と穏やかな笑みを浮かべる古鷹に挟まれているからかもしれない。

時雨からびよんと飛び出た犬の耳のような髪の毛は夕立のそれと同じくどういう原理かぴよこぴよこ動く。可愛い。

「止まない雨はないけど、もしこのままずっと降り続ければ僕は提督の隣に永遠にいられるのかな？」

「それはないだろ。この和傘引っこ抜いて執務室に帰るわ」

「……もう」

ふくーっと頬を膨らます時雨、その白い肌からまるで餅のようだなと思い押してみたい誘惑に駆られる。一人つきりなら衝動に任せてもやつてたかもしれないけど古鷹もいるしやめておいた。古鷹みたいないい子に失望されたくないもんね！

時雨が肩にぽんと頭を当てる。前々から思つてたんだけど艦娘つてスキンシップが好きだよね。夕立とか突つ込んでくるし那珂ちゃんはハグしてくる。大丈夫？ 提督は男だよ？ オオカミさんだよ？

「気付いたら23隻もここにいるのかあ、戦果をある程度評価してもらえて資源とか融通してもらえてるのもあって結構余裕があるな」

「そろそろ大型艦を狙つた建造をするつもりですか？ 加古を是非お願いしますね」

古鷹が加古を建造してくれと言うが、まあ俺の思い通りの艦が建造できるわけでもなく確約できない。一応、ここには俺にひつづいてきてる妖精さんたちがいるし聞いてみるか。

「あはは、狙い撃ちは厳しいかな……な、妖精さん。古鷹がこう言つてるんだけど加古を建造できるかな？」

「ムリ！」

「ですよね？」

一回だけ建造するのを見学したことがある。資材を建造したい艦の出そうな割合で運び込んだ後、妖精さんたちが何やら唱えながらふしぎなおどりをするのだ。そしてピカッと資材が光つたかと思えば資材があつたところには艦娘が瞳を閉じた状態で現れる。まるで意味が分からんぞ。

この眠つている状態で艦の記憶と人体のすり合わせとか色々あるらしいのだが、なんとバーナーで炙るとそれがすぐに終わつて目覚めることが出来るらしい。人間に向かつて汚物は消毒だ！ をしていよいよな気分で実際コワイ。なのでうちではバーナーを一切使用していません。

「白露とか扶桑、山城も頼むよ」

「だつてよ妖精さん」

「ゼンシヨシマス！」

「それ無理なやつだね。

「それにしても提督は人氣者だね。僕が着任する前には神通さん、那珂ちゃんを派遣して今は鳥海さんか。提督自体にも演習のお誘いがたくさん来ているんでしょ？」

「そうだな。いやあ艦隊が強すぎて俺までそういう評価されちゃつてるから肩身が狭くてね」

大本営からの熱烈なラブコールにガン無視するのも悪いので艦を派遣することでお茶を濁しているが、時雨を建造したことでまたうるさくなるだろうなあとは思つてゐる。「呉の雪風佐世保の時雨」と言わ

れるほどにあの雪風に比肩した強運を持つ時雨はその艦歴もあつてか歴戦の猛者なのだ。それが改二で現れて通常の時雨よりもすごいところを見せるのだから、同じく艦歴の割に通常の白露型と性能が変わりなかつた夕立とは隔絶した素敵なパーティをする赤いおめめの夕立共々、大本営や他の鎮守府から少していいから貸し出してくれとせつつかれている。

「夕立一人じや心配だつたけど時雨いるならなんとか教導もできるかな？」

「夕立ちちゃんは興奮し過ぎると提督以外の言葉耳に入らないからですね」

「いや古鷹、案外俺のいうことも聞かないぞ？」

『敵をちぎつてはポイ！　ちぎつてはポイ！　つてするつぽい！』と

言いながら一人鎮守府正面海域とは言え敵中枢まで進撃していくたのを俺は忘れない。慌てて待機していた神通さんに村雨、敷波を出撃させたけれども笑顔でナニ力を顔にこびりつかせ無傷で帰ってきた。こいつやつべえと思つた瞬間だった。だというのに『てーとくさん褒めて褒めて〜』と言いながら無いはずのしつぽをぶんぶん振つて突っ込んでくるのはいつもの可愛い夕立で、どつちが夕立の本質なんだと真剣に考え込んだ、五分くらい。

「夕立ちしいね。でも大丈夫、僕はそんなことしないで提督のそばにいるから。提督に害する奴を出向いて倒すんじやなくて大丈夫なよううに提督のそばで守り続けるよ」

「お、おう？」

「ね、提督。邪魔なひとがいたら僕達に言つてよ。提督に害するものは何であつても許さないから」

やだ、時雨さんの目がこわい。人の目を見て話せと言われても実際は目を逸らしてしまう。けど、この子はずつと俺の目だけを見ている。どこかに視線がぶれるなんてことをしないでずーっと俺の目だけを見つめている。

「もう時雨ちゃん、提督が困つてるぢやない。はい提督、時雨ちやんだけじやなく私のいいところも見て下さいよ」

こんどはぐいっと古鷹に頬を掴まれて顔を回される。痛くないような適度な動作だったのでほぼ自然に古鷹の顔を見つめる形になる。女の子特有の柔らかい手が頬に触れて、心地が良い。時雨に椅子においていた手をぎゅっと握られたのを感じ取つたが、それ以上に目の前の女の子の異なる色を放つ瞳に吸い込まれた。

綺麗だ、としか言えない。

「提督は重巡洋艦のいいところ、知りたくない……？」

「いいところって」

頬に手を添えられたままゆっくりと古鷹の綺麗な顔が近づいてくる。ほんのりと赤く染まつた表情は俺の胸を高鳴らせて、近づいた顔の整ったパーツそれが魅了してやまない。もうどうにでもなれ、と思考を放棄しようどし、そして背後から時雨にぎゅうっと抱きつかれて離された。

なんか取り返しの付かない一步を踏み出しそうだつたのを強引に引き戻されたが……な、なんなんだこれは一体どういうことなのだ！

「あら、雨がやんじやいました。早いですね」

「今のうちに帰ろうか提督。僕と手を繋ぐかい？」

「あ、ああ」

重巡洋艦はヤバい、そう思いました。

※

「危なかつたなあ、あのまだつたら提督は……」

夜、僕は自室のベッドの上で枕に顔を埋めながら昼下がりの光景を思い出していた。古鷹さんは卑怯だ、そのプロポーションも立ち居振る舞いも確実に提督のツボを刺激してならない。余裕そうな表情を取り繕おうとして恥ずかしがっていたのも見てみれば提督を興奮させる要因になつていた。

僕、時雨もほかの駆逐艦に比べれば比較的頭身が高いし改装される前よりかは大人っぽくなつたと自負しているけれども、やはり重巡以上と戦つていくとなると厳しい物がある。

「どうすればいいと思う?」

「時雨もちよつといいところアピールしたんでしょ?」

「けど古鷹さんの印象に比べたら……て、こら夕立。僕に残る提督の匂いを嗅がない! うわあ!」

スンスンと鼻を近づけさせていた夕立に押されて倒れこんでしまう。夕立はそれに構わず服をめくつてまで匂いを嗅ごうとする。お風呂に入つて着替えたから服をめくつて嗅ぐのは正解だと思うけどもくすぐつたい……つ!

お腹に夕立の鼻が触れてピクンと跳ねた。

「……それ!」

「はい?」

「へ?」

急に大きな声を出した村雨に、僕も夕立も反応した。

「いい感じいい感じ! やつぱ白露型は犬っぽさをアピールするべきよ! 時雨は犬、夕立も犬。今はいなけど江風も犬だし耳ない娘も犬耳付けましょ! きつと可愛いわ!」

それは君の趣味じやないかな、と口に出そうとしてとどまる。夕立がなにか言おうとした気配があつたからだ。

「江風は犬といふか狐っぽい? てか村雨は犬っぽくないっぽい! 夕立たちと違うっぽい!」

夕立の言うとおりだ。江風の耳といふか髪は細長くどちらかと言えば狐っぽい。にやーつて鳴くし……いや、ンなるーつて言うか。でもたまににやーつて聞こえるし狐でいいや。

「金剛さんに聞いたけど雨模様の天気を英語ではc a t s a n d dogsで言つたりするらしいわ。雨の駆逐艦な私たちにぴつたりなちよつといい言葉じやないかしら?」

「わからなくもないかな?」

ま、犬耳つけるとなれば僕と夕立は関係ないし静観しておこうかな。そしてそんなことがあつたのを半分忘れて数日がたつた。出撃のために執務室へと歩いていたのだが、遠くから那珂ちゃんの声が響いてきた。なんだ、と思つて耳を澄ませてみる。

「あーっ！ 那珂ちゃんに許可無く犬耳つけてる！ アイドルは猫耳つて決まってるんだから外して!!」

村雨が上司に怒られていた。……怒るポイントそこなんだ、あとア イドルは猫耳つて初耳なんだけれど。

「今決めたの！」

聞いたらそう言われた、さすが艦隊のアイドルだなあ。

## 9 龍驤の憂鬱

軽空母「龍驤」という艦娘は前世においてはなにかとネタにされることが多かつたよう記憶している。しかしながら龍驤という『正規空母』は鳳翔に並び空母の元となつた船なのであり、二隻が空母開発の元になつたんだとか。

全ての艦娘に言えることだけど、陽気で似非関西弁な彼女は実は本当はすごい娘さんなのだ。

俺ははじめて見ると、いうわけでもないけれども改めて感じる艦娘の不思議の一端に触れ、興味津々にじいつとその龍驤さんを見つめている。古鷹の電気の走る片目とか龍田の宙に浮く天使の輪つかみたいなのだと、まあそれもとても不思議なものなのだけれども龍驤さんが艦載機を放つための式神とか……うん、ほんとよく分からない。そもそもつと不思議なのは同時期に着任した空母な千歳のカラクリっぽい艦載機と式神が互換性あるということだ。まるで意味が分からんぞ！

よく知られている千歳は水上機母艦である。「こくたまー」に、けれども全艦娘の中では比較的高い確率で変異種が建造されることも知られる。史実で改装されたことから由来するらしいのだが、例のごとくうちの千歳は千歳航改二、最終形態です。言い忘れてたけど龍驤さんも改二。

時雨以降に建造した艦が連續して改二で出てきているので偉い人とか同僚の視線がヤバい。侍娘神通さんの姉でありくノ一というか忍者な川内改二。彼女が建造されて数日というのに持ってきた情報によると、俺を建造専用提督とするみたいな話が上がつてゐるらしい。おい夜戦忍者、機密情報でしょそれどうやつた？ 聞くとニシシと笑つてごまかされた。

かわいいからつてごまかされないぞ！

「あのさあ、なんのさつきからキミ。ウチのことが気になるんか？」

「気になるよそりや。式神がどうして千歳のカラクリな艦載機と互換

性あるとか

「……そういうものなんやで、きっと。なあ？」

「なあ、じゃないが」

あまりにも注視しすぎたせいか気付かれてしまう。そりやそろか、俺も待機中の時雨夕立コンビからじいっと見つめられたことが幾度と無くあるが気になつて仕方がない。そんな散歩を待つ犬みたいな表情で見なくとも……て、犬かこの子ら。

勅令、と書かれた炎のようなものを出しピシッと海の上に立つ龍驤さんは艦載機を放つている。ようやく着任した空母でありこれで戦術の幅が大きく広がる。赤城もそのうち我が艦隊にやつてくることは決まつていたが、やはり空母は多ければ多いだけ良い。

「はじめて運用する空母ですもの。それに見られて龍驤さんもまんざらでは無いでしよう？」

「ゆーてもな、嬉しいけど限度つちゅうもんがあるんや。恥ずかしゆうてもう……な？」

「ごめんごめん」

堤防に腰掛けている俺の膝に何故か頭を乗せる千歳。ふつう男女逆じやないのかな、まあ良いんだけど。彼女と一緒に龍驤さんが顔を真赤にしているのを見る。

「てか千歳、なんで自然に司令官に膝枕してもらつとるんや！」

「おおナイスツツコミだ龍驤さん」

「ウチとかわつて！」

「なんでやねん」

突っ込んだと思つたらボケてきた。似非関西人のくせにやるな龍驤さんは。

それはそうと艦娘はスキンシップが大好き過ぎて提督ほんと困っちゃいます。先日、自室の布団に入ろうとしたら川内がそこにいて「夜戦、しよ？」とか言い出した時には色々とヤバかった……てこれスキンシップのレベルを遥かに越えているわ！ もし止めに来た神通さんのがいなければやらかしていたに違いない。「その、提督……？」別に私は夜戦が嫌いというわけではないです」と言わされたので、遠回

しにお礼に夜戦に連れて行けと言つていたのでしよう。川内ほどではないけど神通さんも夜戦好きなのでは？ おなじ川内型の那珂ちゃんはアイドルだから早めに寝ようとするけどね。うん健康健康。顔を下に向ける。千歳の綺麗な銀の髪がキラキラと陽にあたり輝く。長い髪は地面に触れないよう俺の膝に乗せられているが、なんともまあ無防備なこと。すらりとした鼻や見るからにすべすべしていそうなお肌に触れてみたいのを我慢する。

電と鳥海にまかせての非番、ぶらぶらと海沿いを歩いていたら龍驤さんを発見。彼女が式神艦載機を放っているのを見学していたら散歩をしていたらしい千歳が隣に最初座つて、そしてしばらくしてこうなつた。うん、何故だ。

「制空権を確保できるようになれば、偵察機を積める艦で弾着観測射撃が可能になるな」

「そうですね。私達の艦隊が出撃を許されている海域ならば手持ちの艦載機でも苦労しないでしようが、もしそれ以降に行くならば開発が必要です」

「それにもしもの事があるしな。敵さんはこちらの事情を待つてくれない、条約で縛ることも出来ない、宣戦布告なんて存在しない。備えはいくらあつても足りないよ」

戦績によつてより強い敵のいる海域に出撃することが許される。これは無謀な出撃により艦娘の無駄な消費を避けることが目的にある。身の程知らずな艦隊が全滅なんて目が当てられない。

千歳の言うとおり、俺が現在出られるのは北方のモーレイ海まで。制空権争いはギリなレベルではあるが、艦娘たちの力でゴリ押しすることにより空母無しでここまで許可をもぎ取つた。出撃海域が広くなるということはそれだけ認められて予算やらが割り振つてもらえるということ。なるだけ進みたいのは当然といえども當然。「司令官のおかげ様でゼロもある程度増えたし烈風も開発できた。さつすが大妖精提督やね！」

「その2つ名みたいなの広めるのヤメテ！」  
「えへ、分かりやすいからええやん」

ぶーぶーと龍驤さんが文句垂れる。まあいいじゃないの。「ウチの司令官だし？ 提督なら知らぬものはいないような二つ名みたいなのあつてもええやないか」

「せやけど工藤」

「誰が工藤や！ ……ま、ええわ。お偉いさんが大事に仕舞いつぱなしな烈風改とか欲しいから頑張って戦果上げていこうな？」

「龍驤さん待つてそれ初耳」

「ああ提督。それは川内さんが持つてきた」

「おい川内、おい」

千歳の投下した爆弾に頭を抱える。あいつバレたらどうすんだよマジでさ！」

「烈風改欲しいならウチらにまかせてや！ キミのために戦果上げるで！」

「提督はゆつくりお酒でも飲んで待つていればいいですよ。ふふふつ」

なんともまあ頼もしい空母だ。

※

龍驤は提督と二人、走る電車に隣り合わせで乗っていた。行き先は大本営、赤城を迎えに行くのだ。

「やつぱり空母がいるいないでは出来る作戦が段違いだ。軽巡以上の砲撃の正確さが増して消費も減った」

「その分ボーキサイトがへつてるけどな。まあしやあないけど必要経費つちゅうもんやな」

「だね」

彼がくるくるとペンを回しながらここ最近の資源についての報告書をまとめている。敵空母からの強力な艦載機をどうにか出来る優秀な戦闘機の配備が遅れてしまつてはいる——が、まだ当分は大丈夫なはずだと龍驤は考える。想定されるあんの憎き空母棲姫と出会わなければ大体の敵であれば勝算はある。そう、あいつらが出てくれればい

くら艦載機の熟練度が上がつてもそのうち限界がくるのは目に見えている。

自画自賛になるが空母『龍驤』という艦は本当に最初期の正規空母であり、軽空母の利点を示した艦だと彼女は自負している。そのため常に練度を高めるための厳しい訓練は続けているし、艦載機の妖精さんをビシバシと優秀なパイロットにするため鍛えている。全てはただ一人のために。

「戦艦は現在比叡だけ……艦載機の配備と戦艦の配備、どちらを優先するか迷うところではあるな」

先日、ようやく比叡がこの鎮守府に戻ってきた。聞けば彼女は教官をやつていたらしい。比叡らしいといえば比叡らしいか。長い経験に金剛型らしい落ち着いた丁寧な立ち居振る舞い、マナーに教養などこれまた淑女とはこうあるべきという姿を示してくる。當時は活発でボーキッシュなスポーツ系なのだけれど。

「ウチはどつちでもいいと思うで。赤城がやつてくるし艦載機の質は量で補える、戦艦じゃなくても鳥海とかいるし火力面でも不安はないやろ」

彼のやることに付き従う。それが艦の使命だと思うし、本能で、そして心からやりたいことだから。もしボロボロの状態でも彼が命じれば進撃しよう、それは彼がやつてほしいと自分に思っていることなのだから反対するなど無い。

この艦隊以外に所属する艦娘が国を守る、と口にする。確かに国を守るのは艦娘の原点たる軍艦たちに込められた願いではあるが、そうは言つてもこの龍驤という艦娘の元になつた『龍驤』を造つた国はここではない。この記憶は前の世界の『龍驤』という空母が経験したことでこの世界『龍驤』ではないのだから。ようやく艦に込められた願いから離れて自分がやりたいことに専念できる。

「ウチはキミの空母や。キミの命令に絶対に従う、どんなことがあっても」

敵深部での戦い、体がボロボロになつてもニヤリと笑みを浮かべて艦載機を放てたのはこの痛みが苦痛が全て司令官のためになつてい

るという幸福感に包まれていたからだ。耐えて、耐えて、耐えて！  
そして掴みとつた勝利

(——ああ、思い出すだけでも達してしまいそうや)

ゾクリと龍驤は体を震わせた。そんな彼女に気がつかない提督は背もたれに体を預け、瞳を閉じる。

「まあそこらへんはおいおい。まずは赤城を出迎えることからはじめよう」

「そうやね。それじゃいってみよう！」

## EO 9 提督と元帥

大本營、と言つても例の戦争の時のような組織ではない。まだ艦娘がこの世に現れる以前から國を守つてきた組織のトップがその原型にあつて、彼らがその下の提督たちへと指示を出している。提督たちに指示をだすトップの面々には選ばれた豪傑たち、元帥もその名を連ねている。

深海棲艦は敵国ではなくほぼ自然現象のようなもので、提督はゲームで言うとハンターミたいなものであり元帥とか大将とかはハンターランクである。一応その地位に見合つた仕事とか任されるために強いんだぞ、というだけではない。

そういうこともあって階級は戦時と比べれば容易に上下する。が、元帥は流石に一定の支持を得られなければなることができないし、簡単に変わりすぎてもやる仕事の引き継ぎが面倒なのでそこのところは適度に考えられている。

さて、件の異常な艦娘ばかりを建造し、更には新米提督らしからぬ戦果を上げている彼は少将であったが、今回大本營に呼び出されたことにより中将になつた。これは前例がないほど早さである。

「私にこの地位は合いません」

「過ぎた謙遜は良くないぞ中将。君はこの国にとつて多大な貢献を成しているのだ」

わざわざ一人を呼び出して大本營の主要人物が勢揃いなどはしない。が、元帥がわざわざ出てきたことに彼は目を白黒させる。連れてきた龍驤は元帥が出てくるのは当然、といつたすました表情であったが彼の背後に控えているためにそれを知ることはなかつた。

この元帥、実は彼の同期の海兵学校を二番で卒業した青年の父親である。深海棲艦が現れてから自分と同じ職に就こうという意思を見せる息子に英才教育を施していただはずが、ポツと出の田舎者に息子が抜かされて興味が湧き、積極的に彼と会話したいと志願して今に至る。

海兵学校を主席で卒業したからとすぐ提督になれるわけではない。

しかし教官であつた練習艦たちからの熱い推薦があり、また丁度提督を新しくつけようとしていたのもあつてこの元帥が彼を推薦したのだ。

教官である艦娘たちは新兵に対しても評価が厳しい。主席で卒業した生徒であつてもこのまま艦隊を率いさせることには危うすぎる、後方でまだ学び直すべきという評価を出すことだつてよくあつたのだ。  
（しかしこの青年は違う……：厳しい教官達からの破格な評価。すぐにでも艦隊を率いるべしという彼女らの言葉を信じて提督にさせてみたが）

しかも教官のうち二人、練習巡洋艦「香取」「鹿島」はこの提督が通っていた学校に海兵学校の案内に行つたその日、説明会が終了したと同時に彼の下へと走り周囲が引くような勢いで勧誘を始めた。こう言うのは学生時代の親友で現在中将である初期艦に五月雨を選んだ提督だ。つまり、教導を行う前から艦娘は彼を評価していたということなのか。

彼を提督に据えた当初、当然周囲の反発はものすごいものだつた。自分は副提督やそれよりももつと低い地位で働いているのに卒業したばかりのガキが提督になるだなんて、という妬みや文句はしそつちゅうあつた。元帥の一部でさえ教官の艦娘の間違いだ、一月もすれば降格処分だらうと笑つていたのに。

「そこの龍驤は変異種か、見たことのない龍驤だ」

「はい」

元帥の肩に乗つた妖精が耳打ちする。この妖精はこの元帥が最初に出会い、今も肩を並べて戦つている吹雪のものである。

「カイニ、リュウジヨウ、カイニ」

（改を超えた改装、つまり『改二』か。そしてそれを建造するこの男）

見れば滑稽だ。きちんとした身なりではあるが、そう見えるのは才能の無い者だけ。艦隊を率いることのできる人間であれば彼の服には妖精が張り付き、頭や肩ではのんきに昼寝をしたりワイングラスを傾けている者すらいる。ここまで妖精に好かれた者は今までいただろうか。

この異様なまでの好かれ具合が建造時に妖精の協力を引き出して『改二』へと艦を変化させたのだろう。

「君の艦隊にはまだ正規空母はいなかつたね？ 事前通達と顔合わせは終わつていると思うが、君のところへ赤城を送る」

しばしの雑談の後、本題に入り「入ったまえ」と元帥が赤城を部屋に招いた。

赤城、という艦娘は提督の間では冷静沈着な戦略家で通つている。口の悪いものは戦闘マシーン、だなんて陰口を叩くが彼女は確かに戦闘に関することに興味が多い。

この異常な提督に彼女のような戦力をもつと多くもたせられたのなら、唯一乗つ取られたあの県を奪還する手がかりになるかもしね。そう、この元帥は彼を建造用提督にすることへ反対する側に立っている。

彼が建造する艦娘は変異種が多く、また通常、変異種問わずにありえないほどの練度を示す。妖精が造つた練度測定機械が彼の艦娘全てに測定不能を返した。彼が現れるまで測定不能を出した艦娘など両の手の指で数えられるほどというのに。

この男に建造させれば多くの艦隊は強大な戦力を手に入れられ、領土の奪還が可能になると息巻く一派。

この男に建造させて艦隊を率いさせれば領土の奪還が容易に行えて、かつ戦力の分散を防げると分析する一派。

どちらも国を思う故の思いだ。確かに両者ともにメリットがあるが、この元帥は後者。

確かに即戦力は魅力的ではあるが、それをすれば艦娘本来の力を発揮させられない。艦娘は提督がいて真の力を発揮できる。いかに強い艦娘であつても、提督が指揮していなければ本来の練度の半分も実力を出せないのは非効率的すぎる。そう考えているのだ。

元帥たちだけではなく大本営は2つの意見に割れている。だが、戦略的に見すぎていて当事者のことを良く見れていない。もし艦娘と提督に建造されたばかりだというのに強い信頼関係があるというのであれば引き離してしまうと厄介なことになりかねない。

まず護国が根底にあるため反乱、なんてことはまず起こらないとは思うがと元帥は心のなかで考える。しかし彼は知らない、この提督の艦娘たちの優先順位が狂ってしまっていることに。

「赤城、よろしゅうな」

「よろしくお願ひします提督、そして龍驤さん」

そして元帥は提督の旗下に赤城が入った、たつた今この瞬間の彼女の顔を見て確信した。自分は間違っていない、と。赤城の顔は狂信者のそれだつた。この提督には人間には分からぬ艦娘を惹きつける『何か』があるのだ。

妖精にも、艦娘にも好かれるその才能。提督に最も必要でありながら元帥の立ち位置にいても持つてているとは思えないその才能が確実に彼はある。

（最初の「私には合いません」という言葉、最初は謙遜だと思ったがこれは逆に自信の表れで「中将なんかに収まる器じやない」と言つていたのか）

思い返せば簡単だつた。この男は敵最深部に駆逐艦「夕立」だけを突撃させて、未だそこでは確認されていなかつた重巡 *f l a g s h i p* 級を複数狩らせていた。夕立を出撃させた後に「神通」「敷波」「村雨」も追撃させていたが、おそらくこれも戦略だ。混乱を夕立て引き起こさせて確実に仕留める。

駆逐艦一隻で敵中枢に殴りこみをかけるなど正気じやない、だが彼はそれを艦娘にさせて彼女らは従つた。彼は確実に成功すると確信し、艦娘も成功すると分かつっていたのだ。その結果が *f l a g s h i p* 級複数討伐に、その地の深海棲艦の大副弱体化だ。  
(なるほど息子じや敵わぬ相手だ)

先日、息子が所属する鎮守府に彼の神通が教導へと行つていたことを思い出す。息子からの手紙は変異種である神通への感嘆と、教導を受けた後の水雷戦隊の練度の向上への興奮が見受けられた。たつた一隻の艦娘でそこまで変わるものか、と半信半疑ではあつたがこの提督について調べを進めていくうちにその思いが消え去つていつた。  
そして気付く。值踏みしているのは自分ではなくて相手だという

ことを。

能ある鷹は爪を隠す。人畜無害そうな顔をしながら立てた作戦は大胆。そして艦娘は自分を元帥などとは思っていないような態度をとる。彼の上司であっても彼女らの中では元帥などただの木つ端に過ぎないというのか。正面の艦娘の顔を見て——目前の赤城と龍驤が自分の器を見切っているような色を顔に浮かべているように見えて背筋が凍る。

元帥はこの日、全力で彼を支援することに決めた。

この元帥の働きかけによつて提督がそのまま艦隊を指揮できる方向へと調整されることとなる。しかしながら、彼の所持する通称『改二』艦への研究は必要として時折出向を要請することとなつた。大本営所属の妖精ですら分かつていなかこの変異種。しかしながら彼女らは時間があるならば他の艦に実装可能と豪語する。

後に彼の艦をプロトタイプとして研究が進められて正規実装された改二改装により、それまで『大妖精提督』と仲間内に笑いながら言われていた彼は『改二提督』と広く認知されるようになつた。これを知つた彼の艦隊の艦娘は提督が有名になつたと大層喜んだそうだが——少し遠い未来の話である。

我が艦隊に赤城が加わったのと同時に間宮さんがやつてきた。戦果を上げてるし戦闘する艦だけで鎮守府を回すのも難しいだろうという上の判断だ。これを見るに先日川内が持ってきた危ない情報、俺を建造用提督にするみたいな話はいまのところ保留になつてているようだ。艦娘つくるだけの機械になりたくないし提督頑張るぞい！

「やつと秘書艦二人体制から解放されるのね」

「なのです」

結構前から五十鈴の言うように秘書艦二人体制になつていたのだけれども手が回らないためにそのうち大淀が着任することが確定した。彼女が上とを取りもつことによつて作業の円滑化が進む。着任当初から秘書艦をしてもらつていたために、引き継ぎ失敗に寄る仕事の不備が減るよう電をほぼ秘書艦の一人にしていたが、ようやくある程度自由にしてあげられる。

五十鈴は長良型二番艦の軽巡洋艦である。どこがとは言わないけれど軽巡サイズではないし重巡以上かもしれない、でかい。彼女は長良型の娘さんがあるので阿武隈の姉にあたる——が、まるで全然！容姿が程遠いんだよねえ！ どこがとは言わないけれど！ でけえ！

「失礼します」

馬鹿で失礼なことを考えながら一息ついていたら扉が叩かれて二人の女性が執務室へと入つてきた。片方は先日迎えに行つた赤城型一番艦「赤城」。もう片方はその後建造した飛龍型一番艦、もしくは蒼龍型改「飛龍」である。飛龍曰くどちらでもいいとのことで、そして書類上では飛龍型一番艦になつてている。

赤城、飛龍共に弓道着のような装いをしておりすでに着任していた二隻の軽空母とまた異なる。弓道、ということで二人とも神通さんに負けないくらいに背に芯が通つているかのような立ち姿で大変美しい。幾度か弓を引く姿を見せてもらつたが、周囲の空気までその弓のように張り詰めたのには思わず息を呑んだ。

さて、毎度の「ごとく艦娘に相対した時には前世の知識とくらべてしまうことが多い。赤城は大食い女王で飛龍は多聞丸LOVEだとか……合ってるわ。ただ赤城の大食いはそういう趣味ではなくその艦種に見合つた必然的なもので、大体飛龍もそんなもん。あと鎮守府のペツトまとめ役の戦艦「比叡」もね。

比叡は着任と同時に鎮守府のペツトを全て自らの手下とした、すげえ！まあ海兵学校の教官をしていたくらいだし、艦時代は練習艦でもあつたしね。ということで夕立、時雨、ついでに多摩は比叡に従つていてる。やはり比叡は犬っぽいと思っていた自分の目に狂いは無かつたんだな！海兵学校時代は犬のように厳しく躰けられたけど！

比叡のことは一旦置いておく。大食いというイメージが強かつたために、実物の赤城と相対して会話して生活をともにするうちに彼女がただの大食いキャラではない、と実感し始めた。戦いに対する真摯さは誰にも負けていない、おそらくこの鎮守府一かもしかないくらいだ。艦載機の運用に対しても先輩格になる龍驤や同僚でもあつた飛龍と話し込んでいる姿がよく見受けられる。

普段落ち着いた『静』な印象の彼女が『動』に変わるのは戦闘のみ。俺はそこに微かな憧れと形容しがたい恐ろしさを感じている。

「おつかれさま飛龍、そして赤城さん」

「五十鈴もおつかれ」

五十鈴と飛龍が親しげに言葉を交わす。それもそのはず、二人ともあの「山口多聞」に関係があるのだから。五十鈴が「私のパートナー」だつた五十六に多聞、ほかの人たちは出世したわ。でもあなたはそれを越えるわね、必ず！」と言つてきたときにはご冗談を、と笑つてしまつた。んな人達と同じくらいになんて期待しすぎですよ五十鈴さん、と返したところむうと頬を膨らませられた。かわいい。

「こちら演習結果のまとめと改善点をまとめたものです」「相変わらず早い赤城。少しは休んでくればいいのに」

「いえ問題ありません」

すました顔で答えられた。母港に帰還してそんな時間が経つてい

ないというのに演習結果だけでなく色々まとめてくる二人の仕事の速さに舌を巻く。

ただ休養は大事だしきつと付き合わされた飛龍はつかれているだろうなあと赤城の隣に並び立つ彼女に顔を向けてみたのだが、疲れの色なんて見せちゃいない。ちらりと電に視線を投げて窺えば彼女は瞳を閉じて頭を横に振つた。そうだった、忘れていた。普段朗らかな飛龍を見て忘れていたが、その実は神通さん並みかそれ以上に”ヤバい”やつだった。彼女の尊敬する山口多聞は人殺しとも恐れられたいた人物……ツ！

休養どれと言つても無駄だらうなあと諦めた。

「ご苦労、早い報告ありがとうな」

「当然のことです」

「それじゃ提督、また夜にね！」

丁寧に礼をする赤城に片手をぴょこんと跳ね上げて体を反転させた飛龍。ううん空母こわい、駆逐艦に癒やされたい。

「現実逃避しないで仕事をするのです。大淀さんの着任まで時間がまだまだあるのですよ」

駆逐艦も怖い！ 倘に逃げ場はないのだろうか——なんかすでに逃げられないように包囲網敷かれて手遅れになつてる気がしたんだけど気のせいだよね？ ……ね？

※

「あーかぎつ！ おなかすいちゃつた。間宮さんのところ行こうよ！」

「はい、喜んで」

赤城は飛龍に誘われて間宮のいる食堂へと向かう。ちょうど三時頃ということもあってか、普段鎮守府内に散らばつている妖精たちが食堂へと集まり間宮からお菓子を受け取つていた。非番の駆逐艦もそのなかに混じつて甘味を楽しんでいる。

執務室で提督にくつついていた妖精もどこから持つてきたのかお

菓子を食べたり昼寝をしていたりしたが、彼女らはそういう自由な存在だ。彼女らに助けてもらっている立場の大本営もそれを咎めないし、提督たちも邪険に扱つたりもしない。いたずらをされなければ、ではあるが。

いたずら好きの妖精といったずら好きな艦娘の駆逐艦「卯月」が結託して騒ぎを起こしていたなあと赤城はぼんやりと思い出す。

「赤城はほかの艦隊にしばらくいたんだよね？」

「はい、私以外は電さんが私とはまた別の艦隊にて建造されたようです。他にも提督の艦は様々な鎮守府にいくらか散らばっているみたいですよ？」

「へえ、いつかは迎えに行つてあげたいね」

「戦力を集中させすぎるのを恐れているようで。艦娘が最も力を発揮できるのは提督の下だというのに許されないのは……」

珍しく赤城が不快感を示して眉をハの字に歪めるが、頭を振つて普段の顔に戻す。

「べつの鎮守府ではうちの加賀さんが提督を下僕にしていましたよ」

「ああ、言っちゃあ悪いけど加賀は人当たりキツいもんね。作戦の改善とかで顔突き合わせているうちにその提督の心折れちゃつたのかな」

「どいうよりかは”そういう”のに目覚めてしまつたらしく、熱のこもつた視線を加賀さんに投げていましたね」

思わず飛龍はうわあ、と言葉を漏らしてしまつ。確かに加賀は冷たそうな表情を常にしており、その手の人間から大変人気が出そうではあるが。しかし、その実内面はひどく乙女のであつて彼女は今の提督のそういう趣味に絶対辟易としているだろう。鉄面皮が崩れかけているかもしれない、と想像して飛龍はふふふと笑つてしまつた。

「やつぱり加賀つて面白い。けど提督と”繋がる”機会とかなかつたはずなのにどうやってそんなことが出来る練度になつたのよ」

「建造されてから死に物狂いで探し当てたのではないでしようか」

だつてほら、加賀さんは少女漫画脳ですし。そう続けられた赤城の言葉に飛龍は今度は思わず吹き出してしまつた。一通り笑つた後に

ふと飛龍は気になる。

「赤城は提督のこと探したりしなかつたの？」

「しませんよ。だつて提督の下に戻った時に情報を万全に揃えておけばその後の戦いがより完璧に進められるでしよう？」

赤城は加賀と色恋沙汰に関する想いを足して割ればちようどいいのではないかと何度もかになるか分からぬ感想を飛龍は抱く。

この赤城は戦闘に関する以外へは大概鈍感だ。だからはじめて知つたものに強く執着する癖がある。『前』の時ははじめて感じた美味、というものにしばらく固執して周囲が見えなくなつていた。一時期呆れられて、食に關係のない補給のための資材として手に入ってきたバークサイトでさえも「赤城給食」と呼ばれてたりもしたのだが、後日それを知つた赤城は顔を真赤にして恥ずかしがつていたのはとてもめずらしい光景だつたと飛龍は記憶している。

そう、盲目的なのだ。一途と言えば聞こえが良いがそういういたレベルを超える盲目的なのだ。赤城の提督に対する感情はもう恋を越え愛を超越し、崇拜の域にまで達している。龍驤も似たようなもので、二人とも狂氣の域にまで達していた。

「深海棲艦を潰せば提督は喜ぶ。相手は人間じやない、容赦も慈悲も要らないわ。ただ倒せばいいの、倒せばね……」

あいつらは船の怨靈だし自分たちが沈んだ時の無念さとかも混じつてるとと思うんだけどなー、と飛龍は思つたりもしたが口にするのをやめた。言つたところで「でも敵は敵でしよう?」と返されるのだ。自分や相棒（加賀）に似た容姿の敵が現れて、深海棲艦は自分たちのなつていたかもしれない姿、憎しみにとりつかれた姿と言つてるようなものなのに情け容赦なく艦載機を放つたのを飛龍は忘れていない。

明らかに春雨だつたり那珂や阿賀野だつたりすんのにオーバーキルしていくのだ。いつもと変わらない表情で仲間に瓜二つの敵を粉碎していく姿は味方にも恐怖を与えていたんだとか。

「あ、あの。出来ればたすけ」

「彼女は敵よ？」

「見るからに春雨ちゃ」

「深海棲艦よ？」

初期艦である電が敵わない艦の一人、それが赤城であつた。

# 第一部 彼女と出会うまでの憂鬱 甲

## 11 雪風の憂鬱

「雪風？ おーい雪風はどこ～？」

窓の外から響く最上型航空巡洋艦の一番艦「最上」の声がふと耳に入り、少し一息しようと椅子を立つたところだったのでガラガラと少し立て付けの悪い執務室の窓をスライドさせた。暖房で暖かな部屋に冬の始まりを感じさせる乾燥した肌に刺さる冷気が入り込む。思わず窓を開けたのを後悔したが我慢する。件の雪風は目の前で執務室の電話を使っているのだ、俺が一声かければ最上が寒空の下探し続けないですむ。

「おーい最上！ 雪風探してるのか？」

「あ、提督！ うんそうだよ」

最上の返答に、俺は雪風を指差す。首に双眼鏡をかけ、何故か資料で見た陽炎型で同じ服を着た艦が身につけているスカートがない雪風。彼女は電話機に耳を当ててこの国とは違う言葉で会話をしている。

「ここで電話してるよ」

「ほんとだ、ありがとう！」

そう言つて手を振りながら執務室に向かうべく最上は最寄りの入口へと歩き去つていく。

ここにいる陽炎型八番艦「雪風」は自らの提督が見つからないまま我が国の南西に存在する島嶼での任務をこなし、帰国する寸前になつて俺の艦と判明したためにそのままうちにやつてきた小さなげつ歯類。ペット枠であるためかしらないが比叡にひどく懷いている。

その任務にあたつていた島嶼において雪風は『丹陽』という名前で人々から親しまれている艦であり、あちらには艦艇だった雪風の一部が残っているという。かつての自分の一部に並んで笑顔で写真に映つていたのを見せられた時、どういう顔をすれば良いのか分からなかつたので一応笑つておいた。

いきなり大陸言語で鎮守府に電話がかかつてきた時には目を白黒させてしまった。秘書艦として隣りにいた電に対し紙にペンを走らせて言葉の分かりそうな雪風を呼んだらなんと相手は彼女目当たりだつたらしく話し込み始めた。艦娘もスマホとか持つてたりするのだが、機密とかそういうあれこれのおかげで電話を使えるのは同じ艦隊の艦、または提督だけと定められている。そのためスマホ 자체を持たない艦娘も数多くいて雪風はその一人である。雪風に直接電話がなかつたのはそのためだ。

今の時代、誰もがスマホ持つてゐるのに艦娘はあまり持たないから戸惑つてしまふ。ちなみによく秘書艦をするために連絡を即座に取り合う電はスマホ持ち。

「はわわ、雪風ちゃんが別の国の人みたいなのです」

電は雪風が知らない言葉で話すのを見てそう呟いた。

「艦時代にも長くあつちで暮らしてたしペラペラでも当然だな」「響ちゃんみたいに言語汚染されてないので他所の子だつたの忘れてたのです」

「ほんと電つてたまに口悪いよね」

「なのです？」

とぼけるでない、つか今は他所の子じやなくてうちの子だからな。「今から最上さん来るのですか、もしごつかつたらわたしが大破しそうなのです。注意するのです！」

ふんす、と気合を入れる電。電も最上もごつんこしちやつた娘だからな……ああそうそう。以前着任時に大破していた深雪は今は元気に輸送任務や護衛任務をしている。艦娘になる前に何もできなかつた反動か、積極的に仕事をしようとしている元気つ子な深雪の姿は見ていて気持ちがいい。どこかの睦月型も見習つてほしいものだ。ねえもつちーさんよ。

にやしいと鳴く姉に謎の色氣がある姉（双方改二）に両腕を掴まれて五十鈴に背後から睨まれながら対潜哨戒へと出かけていつたのを俺は両手を合わせて見送ることしかできなかつた。非力な私を許してくれ……だが私は謝らない。だつてそういう編成だつたんだもん。

「しそえ！　お電話ありがとうございました！」

「向こうで仲の良かつた人かい？」

「はい！　あそこにいた司令官です！」

電話機を置いた雪風がキラキラした笑顔で俺を見上げる。

深海棲艦がわらわらと海から湧き出てきた時、島々はほんと打撃を受けたそうな。我が国最南にある県は未だに占領されたままで奪還作戦は時折あるものの失敗してしまっている。雪風が派遣された島嶼もまた深海棲艦によつてひどい攻撃に晒されていた。そのとき一番最初に立ち上がり戦つたのがその例の司令官と『丹陽』らしく、彼らは——とくに艦のこともあり雪風は——人気がある。

あそこの雪風の練度は測定不能と言われており、現在測定できる練度50を逸脱した別格とのこと。推定練度は70とされる。

うちの雪風は提督がいない状態でそいつと互角だつたとかそういう話があるんだけどもね……提督が指揮しない艦娘は常時の半分程度しか実力出せないとか聞いたことがある気がするんだが？

「その人がこれまでのお礼と、雪風に装備を譲つてくれる事になりました。幸運ですね！」

「……雪風の努力の対価というかそんなんだろう」

あまり幸運という言葉は好きではない。確かに雪風は幸運という言葉が似合っているが、彼女があの戦いを生き残り姉妹を全て失いながらも終戦まで万全でいられたのは彼女の練度があつたからだ。「奇跡」や「幸運」という言葉に霞みがちなその練度こそがいざというときに運を引き寄せるのだ。ただ運がいいだけでは雪風は生き残れないような戦いを生き抜いている。

小さな小さな武勲艦。それが駆逐艦「雪風」なのだ。

「どうか装備だぞ、譲渡しても大丈夫なのか？」

「大丈夫ですよ。だつて雪風たちで最寄りの中核深海棲艦に魚雷を撃ちましたから！」

脳裏に不意にシャツシャツシャツと響く。夜戦、アイアンボトムサウンド……ウツ、頭が……。

いやこれは味方だからいいのか。複数の雪風による夜戦雷撃カツ

トインの様子を思い浮かべる。これはなんというオーバーキルか。ここに来る直前、うちの雪風は連合艦隊の一隻として戦つたと聞いている。人気からかあの地では極度に練度の高い雪風が揃っているために複数艦隊から雪風が多数集められた。その雪風たちによつて、深海棲艦が集まつてゐるところの中核をぶつ叩いたらしい。同一の武勲艦による一糸乱れぬ戦略通りの戦闘、特化装備による圧倒的火力！

敵深海棲艦がちよつとかわいそうなレベルですねえ。

後日に対雪風編成でヤバい敵が湧いたりしないだろうかちよつと怖い。

「そ、そうか。それなら余裕があつても当然……か？」

「はい！」

雪風がそう答えたと共に部屋の扉が開き、最上がやつてくる。タタタと雪風に駆け寄つてヒシッと抱きつく。

「もう、いきなりいなくなるからビックリしちやつたよ。昔みたいに誰も見つけられない状況にならないか心配で心配で」

「大げさですよ。されえはあんなブラックな出撃を課しません。ね！」

かつて雪風はあまりの激務にどこにいるのか不明になつたことがある。最上はかつて雪風と雪風の妹である「時津風」に護衛されたことがあり、それもあつて雪風を気にしたのかな？ 女の子の友情よきかなよきかな。

「それじや提督、雪風とでかけるね！」

「いつてらつしやい。夕飯時までには帰つておいで」

「了解です！ しれえ！」

二人が退室する。外から雪風の可愛らしい声が響く。「雪風、年末ジャンボ宝くじ購入任務、出撃です！」つてさ。子どもは風の子、元氣だなあ寒そうな服装なのにな。

さて仕事を再開するか、と書類を手にとつたのだがなんか喉に小骨が刺さつてゐるかのような感覚がある。なんだろうなあと首を傾げること数度、そして思い当り椅子を蹴つて立ち上がつた。

「司令官さん？」

「ひらめいた」

「何がなのです？」

電が困惑した表情で見上げる。おそらく俺が今までにない緊迫した表情を見せているからだろう。そうだ、そうだった。その手があったか！

「ちよつと雪風と時雨連れてお馬さんを見に」

「ギヤンブラーは嫌いなのです！」

「離せ電！ 男にはやらないといけない時があるんだ！」 H A ☆ N A  
☆S E!!

背後からの襲撃、地面に押し倒されて完璧に動けないように締められる。どうにかして動こうともがくがびくともしない。やつぱり駆逐艦には勝てなかつたよ……。

※

「ふんふーん」

少し前を鼻歌を歌いながら歩く雪風に手を引かれて最上は歩く。道行く人達からは艦娘、ということで色々な感情の籠った目で見られるが気にはならない。慣れてしまつたというのが二人にはある。

この都会から離れた小さな商店街において雪風は人気者だ。なにせ彼女との縁がある人が多少いるということで聳肩にされる。持ち前の懐っこさでしょつちゅうここに遊びに行く雪風が長く引き止められ過ぎないようにするのが最上の役目でもある。

雪風は確かに運がいい、でも運がいいのは戦いが絡む時だ。それ以外の運は人並である。いいや、と言うよりかはその傍から見れば幸運な出来事も雪風にとつては必然になのかかもしれない、卓越した経験から得られた勘は常人では理解の出来無い領域に達しているのだろうか。

「やつぱり戦いになると雪風は強いね」

「鍛えてますから！ 今日も大漁です！」

ニッコリ笑う彼女に釣られて最上もまた自然と笑みが浮かぶ。最

上の手にはタイムセールで得られた幾多の戦利品が握られており、今夜のご飯もきっと豪勢になるのだろう。

「宝くじを買うのをすっかり忘れていました！」

「あらら、また今度にしようか」

「はい！　あ、石焼き芋……最上さん、ちよつと待っててください！」  
すみません、と走り去っていく雪風。そして手に2つの芋を持って戻つてくる。

「お待たせしました、最上さんもどうぞ！」

「え、ありがとうございます！」

「お買い物に付き合つてもらつたお礼です！」

両手で芋を持つてもぐもぐと食べる雪風はその見た目も相まって本当に可愛らしいげつ歯類のようだつた。ほつぺたも丸々として柔らかそうだし頬袋でも装備しているのかなあとふと馬鹿らしいことを最上は思う。

「美味しい！　良いお店を見つけちゃいました、幸運の女神のキスを感じちゃいます！」

雪風は確かに幸運艦なんだなあと最上はしみじみ思いながら綺麗な黄金色の石焼き芋を味わうのであつた。

「そういうえば雪風つてあちらにいたようだけどどうして練度を『前』並に保つっていたんだい？」

「気に入つていた帽子を街でなくしちやつてて、不運だなあと思いながら探していくたらまたま提督を見つけたんですよ！　帽子もお巡りさんに見つけてもらいましたし帽子を無くしちやつてよかつたと思います！」

なんともまあ雪風らしい。ちなみに雪風の帽子を拾つた男の子は交番にそれを預けた後、自販機の当たりを引くというささやかな幸運が訪れたそうな。

## 12 扶桑の憂鬱

のんびりと自分の両隣に美人さんを侍らせて歩いていると、遠くからなんともまあ元気な女性が走ってきた。金剛型戦艦一番艦「金剛」である。夕立と同じかそれ以上の速度で走ってくる彼女。駆逐艦の夕立のタックルでさえギリギリだというのに彼女のバーニングラブ（物理）をまともにくらえれば先数日立ち上がれないのが目に見えている……ツ！

どうしようか、と身構えていたら背後から救世主が駆けた。

「HEY！ てーと」

「金剛お姉さまああああ！」

「ひ、比叡！」

俺達の背後から飛び出していったのは比叡、戦艦がほぼ同速で真正面から衝突しあうという字面だけ見れば大事故間違いなしなこの状況。はじめて遭遇した時は狼狽していたが今はもう慣れたものである。さすが比叡！ 倘にできないことを以下略ウ！

（いつもありがとう比叡様）

駆逐艦同士のスキンシップとはまた違った意味で背徳感を感じさせるように抱き合つて地面に倒れ込む二人に両の手を合わせると、左隣で歩いていた扶桑がつぶやく。

「山城、私達も金剛型みたいに姉妹芸をするべきかしら……？」

「姉様、私達はすでに姉妹で不幸芸をやっています！」

右隣にいた山城がそう言うが、不幸芸をやつてるのは君だけだからな。というかどうしてこう今俺は扶桑姉妹に挟まれて歩いているのか、役得ではあるのだけれども。

扶桑型戦艦、簡潔に言えば彼女らは欠陥戦艦と呼ばれている戦艦であつた。それは艦娘となつた今でも大っぴらには言われはしないが、多くの提督たち、そして本人たちの認識もある。しかしながら、例によつて例のごとくうちの扶桑、山城は改二状態であり燃費はとつもなく通常の彼女らよりも悪いが、他の追随を許さない最強クラスの戦艦となつてゐる。これにはビックリ。

扶桑は神通と似たような儂げな美人さんで、山城はどこかしら大井に似た陰鬱さを持つ美人さんである。先ほど西村艦隊の同僚であつた最上、時雨とすれ違つた時の微笑みながら手を振つた彼女らは聖母のようでいて、普段からそういういた表情をしていれば幸せが来そうなのを、とは思う。少しは雪風を見習つて笑顔でいることを増やしさい。

「しかしどうしたんだ、いきなりお茶のお誘いだなんて。そういうのは金剛型の専売特許かと思つていた」

「私達だつてお茶会しますよ？」

「姉様の言うとおりです。私達姉妹を筆頭に不幸な艦娘を集めた不幸のお茶会という——」

うふふふふと黒い笑いを出しながら山城が説明をする。なんか肌が寒くなつてきたな、けつこうな厚着をしていくというのに……。「——ということで私達姉妹が主催でお茶会をするのです。参加者は最上や提督のお

「山城、少し落ち着きなさい。着きましたよ」

扶桑が止めなかつたら永遠とネガティブな雰囲気を背にまとつたままの発言が続いていたろう。ナイスだ扶桑！　だが山城が言いかけたのは一体なんだつたのか。少し気になるが聞くとまた続きそうでむむむ。

と、少し考えていたのは一瞬。連れてこられた部屋の場所はなんと彼女ら姉妹の自室だつた。

「ちょっと待つて扶桑さん」

「はい？」

「ここ、君たちの部屋だよね？」

そう尋ねてみると、なにを今更といった表情で二人は顔を見合せた。え、なにこれ俺が何か間違つてたの？　だがまあしかしだ、この女の子ばっかりの職場で伊達に半年以上働いていたわけではない。そりやたしかに初心だつた頃だつてあるがこれくらい大丈夫さ大丈夫。

どうぞ、と山城が開いた先の部屋は、普段の服装が和装でかつ和風

美人といった出で立ちの二人のためにあるかのような畳部屋であった。ちなみにコタツが出してあり花柄の掛け布団が非常にキュートである。

「あまりじろじろ見ないでください」

「山城さんや、無茶をいわんでくれ」

女の子の部屋ということで心がそわそわする。海兵学校の生徒の95割が男性でかつ数年間奴らとの共同生活だつたこともあり、女の子の部屋なんてものに長らく縁が無かつたのだ。だからこそ艦娘の部屋に入った時などそわそわして落ち着かないため滅多に近寄らないようしている。たぶんこれで入つたの五回目くらい。

かーっ！ 辛いわあ～！ 女の子の姉妹部屋に一人とか辛いわ～！ かーっ！

「あれ、というか最上は普段参加してるんだろう？ なんでさつき呼び止めたり」

「提督、座布団です」

「ありがとうございます扶桑。でき、なんで最上を」

「緑茶と紅茶、どつちですか？」

「紅茶で頼むよ山城。最上は」

「クッキーります？」

なんでこいつら俺に話させてくれないの！ 何度切り出しても遮られたので聞くのを諦めた。扶桑が差し出してきたクッキーは先日霧島が買ってきたもののおすそ分けらしい。こういう小さいところで艦娘同士の交流を感じられるのは、ちょっととここに連行されてよかつたかなという気分にさせてくれる。

や、別に扶桑山城の部屋に行きたくなかったというわけではなくてね。

「いい天氣……空が青いわ」

コタツの対面に座る扶桑は海に出る格好とはまた違つた和装に身を包んでいる。艦娘として戦う扶桑は凜々しくあるが、今のかつろいでいる彼女はお嬢様学校で後輩に慕われるいい家柄のお姉さま、みたいななんとなく頼りたくなるオーラを出している。俺もお姉さまつ

て呼んでみたいんだが？

「なんですか？ 私が紅茶を淹れようとして火傷するんじゃないとか思つて見てるのですか？」

「そういうわけじゃないよ」

対する山城もいつもと異なる和装で。その眉間に皺を寄せるのをやめればいいのに、と言いたくなる。山城も西村艦隊の仲間と会話するときはその刺々しい、内罰的自虐的な面が多少和らぎ穏やかな顔を見せてくれるのだがこれがまあ普段とのギャップでやられてしまう。くそ、なんで艦娘は美人ばつかなんだ心臓が持たねえ！

「ならいいけれど……あつ」

唐突に声を出した山城に扶桑が顔を向ける。

「提督の分のカップが……不幸だわ」

「山城さんの『不幸だわ』きた！」

「殴るわよ？」

「ゴメンナサイ」

仕方がないので温かいコタツから立ち上がって一旦自室まで戻り自分のカップを取つてきた。おお寒い寒いと言いながら二人の部屋に戻ると、すでに一人のカップには紅茶が注がれていた。カップをコタツの上に置き座ると、その間に扶桑が紅茶を注いでくれる。

「遅いです」

「寄り道しなかつたんだけど」

「山城、もとはと言えば私達が提督の分を忘れていたのが原因よ？」

「姉様、そうですね。言い過ぎましたすみません」

「いや別にいいさ」

先ほどまで俺が座っていた位置に山城が座つているので二人を左右斜め前に見るような場所に座ることとなる。二人ともが正座をしているのでなんとなくあぐらをかきづらい。現代っ子のためにすぐに足が痺れてしまいそうだ。

そこからしばらくは二人と会話を楽しんでいたのだが、部屋が温かいのと紅茶のいい香りのせいかとてつもなく眠くなってしまう。他の部屋、しかも女性の部屋ということで眠ってしまうのは非常にま

ずい。だけれどもまぶたを開けようとしても開かず、体を動かそうにも暖かさと気持ちよさで動きたくないって、全身がそう叫んでいるようだ。

どうにかして眠気を覚まそうと瞼氣な意識の中でもがいてみるも、耳元で囁かれた優しい声に背筋がぞくぞくと震えた。

「提督、眠いのですか？」

「とつても気持ちがいいんですね」

どちらの声だろうか、先に聞こえたのはすこし柔らかみのある声、たぶん扶桑だろう。もう目を開けているのもやっとだ。右も左も分からぬ。ならあとに聞こえたのは山城だろうか、でもどこかしら普段とは違った慈愛を感じさせる、

まるで酩酊したかのような意識の中、二人の声が耳をくすぐる。吐息がかかるたびにビクツと体が跳ねてしまう。

「でもまだだめです……もう少しだけ目を開けておいてください」

「眠いのにごめんなさい、けどこれは提督のためなの」

扶桑と思われる声に言われずとも目を開けようとしている。彼らの言葉は歯抜けで理解することも難しい。ただただ気持ちが良いのだ。

「深呼吸をしてください。今よりももっと気持ちよくなれますよ?」「私と姉様のことを聞けば、いまよりももっともっと気持ちよくなる。そうでしょう?」

二人の耳元で囁かれているというのに、どこか遠くなる声にぐるぐるとぐるぐると意識が回つていき、そして闇に沈んだ。

※

『はあ、空はあんなに青いのに』

『青いのに、どうした?』

『いえ、どうして私達はこんな……』

金剛型、伊勢型、長門型。みんなみんな自分よりも強い、欠陥戦艦と呼ばれた自分たちなんて出番があるわけがない、そう思っていた。

でも提督は他の戦艦と同じように使い続けた。

もし金剛なら、伊勢なら。そう思うことが幾度もあった。だというのに提督は『立派に戦つてきたじゃあないか』と褒めることしかしない。責めるなんて、しない。

彼を見かけても金剛のように追いかけていくことなんてできやしない。ああは言つても心ではどう思われているのか気が気でなかつた、臆病だったのだ。

改二改装をして自分たち二人はまるで生まれ変わったかのような力を手に入れた。山城は姉である自分が第一であつたのに、この時期から提督になんとか感謝の言葉を伝えようと四苦八苦するよくなつたと記憶している。

そうだ、この頃からだ。彼と会話すると、目が合うと、隣りにいると、空の青さを羨んでいた自分が嘘みたいに世界が美しく見えた。それでも彼に好意を持つ他の艦娘のような積極性は出せずに、うちに秘めた思いを言葉に出すことができなかつた。

### 『扶桑姉妹は俺が育てた』

そう言つてドヤ顔する彼を山城が小突いたりしていただけれども、彼とこうやつて話していると毎日が憂鬱だつた昔を忘れるかのように、春風のような暖かさが胸に染みた。

その頃だつたか、あの「ケツコンカツコカリ」の話が出てきたのは、「私を選んでくれたらいいのに」と何度も咳いたか。

結局自分は選ばれず、だけれども戦闘が激化したことによつて全員が少しでも生き延びられるように、無事でいられるようにと指輪はもらつた。

生まれ変わつても自分の性分は変えられない。きつとこのまま本音を告げること無く、生まれ変わつた彼は自分以外の艦と「ケツコン」をするのだろう。それでいい、それでも今は少しだけ――  
「気持ちよさそうに寝て いるわね」

「はい、姉様。……こちらの気も知らないで、ひどい人です」

山城が私の膝の上に頭を載せた提督の頬を撫でる。そして耳元に口を寄せて、愛の言葉を囁いた。彼女の行動は全部、ついさつき自分

がやつたことと全く同じで、不器用な山城らしいと思ってしまう。

「一世一代の告白を聞いていないだなんて、まつたく不幸だわ」

「でも山城、笑っているわ」

「姉様だつて」

提督が起きるまでの間、私達はささやかな幸せを噛み締めていた。

### 13 北上の憂鬱

今日は大井と木曾がうちにやつてきている。大井はそのまま着任ということで、つかの間の平穏がここから崩れ去っていく可能性が見えて仕方がない。でも、ここでこういうこともあろうかと！ ある重雷装巡洋艦を建造していたのさつ！

「提督ただいまー……て、北上さん！」

「あ、大井っち。久し振りだねー、百億年ぶりくらいかな？」

「まったく一人は仲がいいな。久しぶりだ提督、知らないうちに大所帯になつてるじゃあないか。さすがは俺が認めた男だ」

重雷装巡洋艦の球磨型三番艦「北上」四番艦「大井」五番艦「木曾」、なんというか以前聞いた雪風艦隊なみにヤバい三人である。一応、重雷装巡洋艦の北上改、大井改は確認されてはいるが彼女らはまあ常識的範囲に留まっている。この三人は……現在の我が国で止められる艦が我が艦隊所属を除きほとんどないということでお察しだろう。空母で先制攻撃するか潜水艦でどうにかしなければ、対抗できない。こいつらに阿武隈を突っ込んだらどうしようもないことになる。もしかすると北上と衝突してしまうかもしれないけどね。

俺は薄々気付いている。ゲームで育成していたそのまんまの状態だうちの艦娘は。気付くの遅いとか言つてはいけない。

ゲームはゲームだ。どれだけ無茶な進撃をして、疲労を無視してレベリングしようとも決して責任の重圧に苦しまなければ、艦娘に嫌われるということもない。無論、オレンジ疲労が出た瞬間編成から外して大破撤退するごく普通な鎮守府ではあつたが、それでもこの世界の最前線に比べれば出撃頻度や攻略海域の難度があまりにも高い。

練度測定で50が最大というのもこの出撃頻度や難度といつたことが原因だろう。あとゲームではクリックで一瞬で出撃できるけれども遠くに行くにも時間かかるしなあ……。

ん、ゲームそのまま？ ケツコンカツコカリ？

この世界だとケツコンのケの文字すら出ていないんだけれどどういう扱いになるんだ、やだちょっと怖い。てかこの目の前の三人つて

……わかつたこの話はやめよう。ハイやめやめ。

「つたく、大本営のやつら。俺が重雷装巡洋艦と分かつた瞬間こき使  
いやがつて」

「うふふ」

「……大井姉さん、なにか知ってるのか？」

「ええ。私を置いて海兵学校をやめようとしました可愛い妹にちょっとし  
た罰を……誰とは言わないけど」

怖っ！ 大井教官やっぱり怖い！

「ゲツ、気付いていたのか！ ということは大本営に俺を雷巡とチ  
クつたのはもしかして」

「うふつ♪」

愕然とする木曾に、なんとも形容しがたい笑みを浮かべる大井。恐  
れおののきながらその様子を見ていると、両肩をポンポンと叩かれ  
る。

左を叩いたのは球磨型姉妹の長女、一番艦「球磨」だクマー。自称  
意外と優秀な球磨ちゃんらしいがとんでもない、優秀どころではなく  
川内型改二連中に匹敵するレベルの性能をもつ超優秀な球磨ちゃん  
だ。

そして右を叩いたのは二番艦「多摩」だにや。猫じやないと言うけ  
どまあ猫である。冬まつただ中の今、出撃せずに自由に過ごしている  
時にずっとコタツで丸くなっているので説得力がない。ちなみに比  
叢筆頭の犬連中は雪の中喜んで鎮守府を駆けまわっている。  
「大井のアレは諦めろクマ。個性として受け入れてやってほしいク  
マ」

「いやでも球磨ちゃん、妹の将来を思つてどうにかしてよ。な？」

「大丈夫にや。大井を嫁にする男は器がでかいから問題にやい」

「多摩ちゃんまで！」

二人との会話に夢中になつていたために背後からの攻撃に備える  
ことができなかつた。肩をガツと掴んでグツと押さえられてミシミ  
シと力を加えられる。最近どうも敏感な耳元に大井の吐息がかかる  
が、ピンクな雰囲気にならずただただ怖いという感情しか浮かんでこ

ない。

「提督？ 私の陰口かしら……？」

「い、いえ滅相もありません大井教官！」

「だ・か・ら。私はあなたの艦なのよ、今は……うふふ」

助けてといった想いを瞳に乗せて球磨ちゃん、多摩ちゃんに目を向けるが、目の前の二匹は肩をすくめるだけでなにもしてくれない。ちくしょう！ 君らの妹だろう？ どうにかしてくれ！

いや、この時のために俺は北上を建造していたのではなかつたのか。暴走した大井を止めるために北上を呼んだのではなかつたのか！

建造できる艦娘は選択できないというのに混乱した思考は選んで建造したと叫ぶ。後々考えればこの時の俺、パニック起こし過ぎだろ。

「阿武隈だ～今日も前髪キマつてるねえ」

「ちょ、北上さんやめてください。聞いてる？ やあめえてえよお～！」

駄目でした。

しばらくした後、落ち着いてから球磨型五人姉妹と俺の六人で食堂へと向かつた。ちなみにさつきまで北上にいじられていたアブウは第一水雷戦隊の会力ツコカリのために初回はいなかつた暁を加えた第六駆逐隊全員プラスの曙、計六人で出かけて行つてしまつた。

前回、一人前のレディとして響とミックスジユース対決をした暁であつたがコーヒーにメロンソーダ、アセロラ、カルピスを混ぜた謎の飲み物の前に轟沈。やはりフリー・ダム響には勝てなかつたよ……。なお勝者の響のコメントは「ウォッカも混ぜたいな」だつた。ファミレスにウォッカ無くてよかつたと思ひます、はい。

「榛名に清き一票を！」

「あ～、そこの君イ。赤城に一票入れてやつてくれ」

食堂では何故か妙にキラキラしてゐる榛名の実質的な双子の妹である金剛型四番艦「霧島」と、反対にげんなりしてゐる龍驤さんが選挙活動を行つてゐる。当艦隊名物の赤城 v s 榛名の一環だろうか。榛名

が着任してから主に金剛型姉妹主導で行われているそれは長年の因縁にケリをつけるべくやっているとのこと。因縁つて？

「ああ！ それって赤城団と榛名団のことだな。運動会の組み分けをなんでも上毛三山でやつてるところからきてるんだ」

「へえ、木曾つて物知りだな」

「いや、俺も教えてもらつたんだよ。てい……いや、忘れてくれ」

木曾の豆知識にふむふむと頷きながら椅子に座る。右に木曾、左に大井、正面に球磨ちゃん。俺から見て球磨ちゃんの右に多摩ちゃん、左に北上である。適当に席を取つたのに平然と北上の真正面を取るあたり、さすがはうわさに聞く姉妹愛っぷりだと感心。

「じゃあまだ木曾一人だけ着任できない記念、乾杯クマ」

木曾以外でかんぱーいとグラスを鳴らす。

「ちよ、球磨姉さんひどくないか!?」

「せつかく可愛い妹をいじつてあげてるんだからもつとリアクション取れクマ！」

さすがは色物揃いの妹を束ねる長女だけある。長女といつたら主に川内や金剛のせいにちよつとアレなイメージが定着しつつあったが、ここ最近の球磨ちゃんに暁のおかげでだいぶ緩和されつつある。「多摩姉さん、私がいない間に提督が他の女に欲情とかしてなかつたかしら？」

「ちよつと大井さんなにを聞いてんの隣に俺いるよ？ 提督いるよ？」

「大丈夫だつたにや。最近扶桑姉妹に骨抜きにされてたから艦娘以外の有象無象に鼻なんて伸ばせないはずにや」

「多摩ちゃんもなんで知つてるの？」

一気に恥ずかしさがこみ上げてくる。なんで知つているんだあの扶桑姉妹の部屋での失態を、しばらく顔合わせづらかつたんだからな。あんな和装美人に膝枕されてたとかもうね！ 良かつたけど！

「だつてよ大井つち。北上さまと一緒に提督骨抜きにしてみるー？」

「それはいい提案だわ北上さん！」

「球磨も混ぜろクマ！」

「多摩も、にや。ご飯食べたら球磨型のお部屋に拉致……じゃなくてれんこ……じゃなくて招待するにや」

「ちよつと本人がいる前でそういう物騒な言葉使わないでくれるかな？」

「拉致とか連行とか……ハイパー・コンビ主導の骨抜きって物理的に骨抜かれそうなんですがそれは。

「お、俺も参加したいかなーって」

「えー、木曾つて夜にはまたここ出るんでしょ？」

「北上さんの言うとおりよ。大変残念だけど可愛い妹を泣いて見送つてあげるわ。ね、多摩姉さん球磨姉さん？」

「にや」

「クマーマー」

隣で可哀想なくらいにずうんと木曾が落ち込む。今まで凜々しい姿しか見ていなかつただけにその姿にはどこかしらキウンとくるものがあるし、末妹つて大変なんだなあとしみじみ感じてしまった。なるほどだから電はプラズマに……これは違うか。

「提督、姉さんたちが苛める」

「愛されてるよう見える、いいねえ姉妹つて。俺も混ぜてよ」

「提督が私の妹になるの？ あつはつは！ 面白いね。球磨型の六番艦の誕生だよ球磨姉」

「北上以下は全員雷巡クマ。提督も重雷装巡洋艦になるかクマ？」

「艦隊の中で一番愉快な姉妹たち球磨型。彼女らとの楽しい夕食は始まつたばかりだ。

※

「ねえ大井つちは気付いた？」

「……ええ」

夜、なんだかんだ口八丁手八丁で木曾を翌朝までこの鎮守府に置けるように上と交渉した球磨は多摩、木曾、そして提督と飲み直しに行つた。ここ球磨型の部屋で電気を消して横になつてゐるのは北上

と大井だけである。二人は気付いていた、自分らと木曾が三人並んだ時に気まずそうな表情をした提督を。左手に注がれた視線を。

「記憶を持つていらないフリ、だつたのかなあ」

「それはないわ。教導しててズブの素人つてのはいやというほどに分かつてしまつたわ」

「ならどうして?」

一番最初、本命としてアレを渡された彼女に続いて戦力増強とアレを渡されたのは雷巡三人だつた。雑魚払いやとどめを魚雷で確実に行えるわけの分からぬ汎用性に夜戦時の超火力。戦力増強目的なら雷巡はうつてつけだ。様々な場面で活躍し勝利をもぎ取ってきた三人に渡すのは効果的である。

「記憶はなくともどこかで覚えてる、たぶんそういうことなのね。ひどい人」

大井は提督に一番キツくあたつているように見えるがその実、彼を深く愛しているというのはこの艦隊では皆が知っている。本当は自分一人のものにしたいと思いながらも、彼の本当の幸せを願うがために泣く泣く引いた彼女。彼へのあたりの強さはそんな内心を悟られないためというのもあるかもしれない。北上はそう考えている。

はあ、と溜息をついて北上は寝返りをうつた。親友のような関係の妹の苦しそうな顔を見たくはなかつたのだ。そして、同じような顔をしている自分を見られたくなかった。かるい友人のように提督に接しているのは大井と同じく本心を悟られたくないから。

「みんな、さ。色々だよね。提督に振り向いてもらおうとアタックするか、一步引くか、無関心を装うか、すでに諦めているか」

「そして提督は誰にも靡かずにここまで來た。来てしまつたのね北上さん」

「ん、もういつ目覚めるかつてところだよ」

「彼女が来る、提督の一番が来てしまう。」

「目覚めてどう思うんだろうね。愛し愛された人が記憶が無い状態つてのは」

「きつと私達以上に衝撃をうけるはずよ」

「そうだねえ」

北上は左手をそつと右手で包み込み、まるで胎児のように丸まつた。

「これだけ思い破れた娘がいるのにもし提督が裏切ったなら……自分を抑えられずに彼を海に沈めそうで怖いわ」

「大丈夫だつて大井つち。きっと提督たちは……ね？」

## E O 13 提督の憂鬱

川内型軽巡洋艦一番艦「川内」は勝手知つたる我が家といつたような気軽さでその部屋を漁つていた。ここは提督の寝室、執務室とは離れたところにある部屋だ。噂ではあまりにも忙しすぎて執務室に布団を敷くような提督もいるらしいのだが、ここはまだそこまで忙しくないためにそんなことはない。

現在深夜一時、いい子は寝ている時間であり規則正しい生活を送ることにより重大な判断を間違えないようにしようと心がけている提督はぐつすり夢のなかである。鍵もばつちりとかけており完全な就寝態勢であった。以前に暁型が二隻、鍵をかけたはずの部屋に侵入して翌朝提督に抱きついていたという事案が発生したのだが、響の絶対に起こさないという宣言通りに提督は起きることはなかつたのできついお咎め無しであつた。おやつは抜きだつたけど。

「ふんふーん」

本棚のある場所、提督が日誌を置いているところを暗闇の中すつと抜き去り一番新しく書かれたところを確認する。なにを書かれているのか一言一句間違えなく記憶した彼女は日誌を元の場所に戻し、大人特有のしかめつ面をした寝顔を微笑みながら数秒眺めて投げキッス、窓から退室していく。鍵は内通者の妖精さんに開け閉めしてもらうことで問題を解決している。

川内は歩きながら彼が日誌を記入している日記帳と同一のものに同じように文字を書き込んでいく。その内容に多少眉を顰めながらではあつたが。

「そういうことだつたのね。これはちょっと荒れるかな？」

いつも明るい彼は誰かに見せるわけでもない日誌に、軽い言葉づかいであれこれ適当にデリカシーの欠片もないことできえ書き込んでいる。例えば『川内が布団から顔の上半分だけ出して今夜は一緒に夜戦、しよ?』と言つたのはかなり理性が削られた。窓の向うに神通さんがいなければ即死だつた』とか『古鷹が美人過ぎて生きるのがつらい明日から顔直視できない』やら『まな板にしようぜ!』など。

この日誌は大体の艦娘が存在を知っている。夕立なんかは何度か忍びこんで読んでいたり、鳥海は提督の少し古くなつた私物を新品に交換するついでに読んでいたりと、まあなんというか提督にプライバシーなんてものはない。セクハラに近いような言葉が書かれた日誌を対象となつた本人が見たりしている、合掌。

「誰にも見られないと思つてるからつて何でもかんでも書きすぎだよ」

「川内さん、今日の分のアレ？」

「敷波も読む？ というか子どもは寝る時間だよー？」

川内に声をかけてきたのは綾波型駆逐艦二番艦の「敷波」だつた。懐中電灯を片手に歩く自分を子供扱いする上司にむつとしながら敷波は答える。

「夜間警備だよ夜間警備。今はミカと二人さ」

「なるほどねえ。でもあんまムリしないでよ？ うちに駆逐艦いまあんましいないんだからさ」

「へーきだよー。これから交代するから」

敷波に関して提督は『照れる姿がとてもかわいい、曙は敷波に似たんだな』と日誌にコメントしている。褒められると素直に受け取らずに反発するところが似ていて思つているようだ。曙は反発した後に罵倒するけれども、まあそれも曙の味。

曙に関しては『ラブリーマイエンジエルぼのたん観察記』として日誌の中に時々記録され、また『今日のわんこ』『ぶらすま語録』『響、心の一句』『すげえよミカは』などもコーナーが設けられていたり。

ミカ、と三日月が愛称で呼ばれるのは主に提督の影響が強い。滅多にあだ名で呼ばない彼があだ名で呼ぶのでみんなが真似をする。『すげえよミカは、今日はあんな小柄な体躯で米俵をふたつ担いでいた』と直近ではコメントされている。いつもいつもすげえよミカはとしが言わないので、三日月は司令官の自然な姿を見たことがない、とちよつぴり悲しんでいるらしい。が、同じくらいに自分のことをたくさん喋つてくれてることに喜んでいるとか。

「司令官も、もうちょっと大型艦建造やめて駆逐を増やしてくれたら

なあ

「でも今だと活躍の機会多くてたくさん褒めてもらえるでしょ」

「うん、まあそう……いや違くて」

あわあわと顔を赤くして手と首を振る部下に可愛いなあ、駆逐艦はやつぱり最高だなあとだらけた笑みを浮かべる川内。この鎮守府でかなり危ない人間（？）の一人である。

「ああもう！ それ見させてもらうよ！」

「はいはいご自由に！」

乱暴に敷波は川内の手から日記帳を奪い取り、開いた。

※

うちの艦たちはもしかすると俺の前の記憶と何かしら関係があるのかもしれない。そろそろ現実に目を向けなくてはいけない。ずっと目をそらしていたことだ、分かつていたのに気付かないふりをして、でもそろそろやめよう。

あの事故からの数年の眠りの中思い出した過去の記憶、目覚めた時は2つのそれが混濁してしまったが整理も付いてやつていけるようになつてている。

この記憶の曖昧な知識がこの世界で通用するだなんて思つちやいない、なぜなら記憶の中ではあつたはずの改二艦がここでは実装されていない上に練度の測定できる最大値が50までときている。凶悪な艦載機絶対殺すウーマンなツ級や姫級なども確認されていないのでこれから戦況が悪化するんだろうなあとぼんやりと他人事のように思つっていた。

またそこそこの実力を持つ艦隊の提督の艦娘であればケツコンカツコカリを済ませてあつたはずだというのに、ここではケツコンカツコカリなんて噂すら出ていない。

だからこそ俺の知識はただの参考程度であるから、艦娘たちについては記憶にある艦と触れ合えたらいいな、くらいの軽い気持ちもあつた。

が、まあそのお気楽な気持ちは次々に建造される高練度艦や改二艦によつて徐々に無くなつていき、こうやつて俺がケツコンカツコカリしていた艦たちが並んだことによつて様々なことを直視せざるをえなくなつた。

記憶の艦娘たちと俺の艦がもし同一であるということを考慮に入れたのであれば、海兵学校時代の俺の艦娘たちによる過剰なまでのシゴキや、思い出す以前の学生生活の中で海兵学校の説明会にやつてきた香取さんと鹿島さんによる異常なまでの勧誘行動に納得がいく。教官だつた艦娘たちは提督のはずの俺が情けない姿を見せているのが嫌だつたのだろう。香取さんたちは自分の提督を見つけることができてとても嬉しかつたのだろう。

彼女らの好意は嬉しいが、その好意を受け取る権利は俺にはない。彼女らと戦つたのは確かだ、確かだけれども違う。違うのだ。彼女らが好意を向けるべきなのは俺ではなく、彼女らを指揮した俺ではない俺のはずだ。

俺はどうすればいい。好意がたまらなく苦しい。

※

「……敷波のことなんかどうせ忘れてるよねつて思つてた」

「こつち来てから提督を見てたけど、前の半分くらいは記憶にあるみたい」

それに提督の様子がおかしくなつたのは雷巡トリオ見てからだし、と川内はつぶやく。

「戦いが激化して、改二改装されていて練度が最大でも大規模作戦中は毎日のように誰かが大破。ようやつと乗り切つても次にはもつと強い敵が湧き出る」

「節操なしに司令官はケツコンカツコカリしてたのは、まあ文句なんて言つてられなかつたよね。オンナノコとしてはちよつとフクザツだけどさ」

星1つもない曇天の夜空を敷波は見上げる。確かに提督は節操な

くケツコンカツコカリをしていったが、でも以前よりも深く繋がつた絆のおかげで彼がどれだけ自分を、自分たちを大切に思つてくれているのかが分かつた。

ケツコンカツコカリは指輪型の特殊兵装であり一見大したものではなく見えるが、しかしこれは提督と艦の絆が無ければ両方共にひどいことになりかねない諸刃の剣であつた。艦の魂に宿る力を強引に引き出すためには互いの信頼がなければならぬ、だからこそ練度99になるまでは使用が許可されなかつたのだ。

無論、練度がなくても絆が深ければケツコンカツコカリは可能だが、無茶をした前例が続出したためにこうなつっていた。

そして彼の率いる艦隊は、戦いが終わる頃には全員がケツコンカツコカリを済ませていた。

「全員とケツコンカツコカリしてたとか今の提督が知つたら卒倒するんじやないの」

「いや笑い事じやないよね」  
ニシシとイラズラつ子みたいに笑う川内に敷波はじと一つとした目になる。前の戦況が悪化していた時も明るい日誌が徐々に真面目になつていつたが、そこまで急激な変化ではなかつた。

でも今は、先日まで内容が『白雪のカレーがうますぎて遠慮しないでくださいねと言われてうめうめうめと食つてしまつた』『飛龍の大學生みたいなノリのスキンシップで勘違いしそう』『高雄型の一部が凶悪すぎてダメ』『暁のお子様ランチの旗を取つたらけつこう面白い反応だつた』などなんというか色々とアレだけど楽しそうな内容だったがだけに落差で余計メンタルがひどい状況なのではと敷波は心配している。

「心配しなくともきっと大丈夫になる。大丈夫にしてくれるよ」

「ああ……うん、そうだよね」

きつと提督一人じゃだめでも二人なら今を越えられる、そういう信頼があるからこその一番目。

ふと、二人は少し離れたところから眠たげな表情をして歩いてくる駆逐艦を見つめた。

「お、あそこで手を振りながら歩いてくるのは睦月じゃん」

「これ返すよ。交代の時間だからアタシはこれで」

「うん、おやすみ敷波」

敷波が帰り睦月に挨拶をされた後、川内は闇夜の中軽々と地面を蹴つて飛び上がり電柱の上に片足で立つ。冬の寒い風の中彼女のマフラーはたなびき、パタパタと音を立てる。

「さてと……んじや、提督の安眠を妨げるヤツとの夜戦の時間だよ！」

川内を見失いあちこちを探す自艦隊とは違う誰かの艦娘に向かい、川内は屋根伝いに駆けていった。

## 14 彼の憂鬱

もう冬まつただ中、世間はクリスマスで賑わっているようだがそんな楽しそうな彼らとは反対に俺の心は憂鬱であつた。何がメリークリスマスだ、どうせクリスマス終わつたら正月モードになるんだろう俺は知つてゐるんだからな。毎年毎年もう許さねえからな！

「とは言いつつも」

数日前に陽炎型の18番艦「舞風」がタタンツと音を鳴らしステップを踏んで渡してきた紙を見る。艦隊のクリスマス会ということで、最低限の哨戒を行う人員以外でパーティーをするというものだ。他艦隊などから『秘書艦と共に』と同じような催し物へと招待されていたが、地元商店街で艦隊による音楽隊での出し物をするため断つていた。が、まあパーティがあるなら行きたいというのは心情で、艦娘たちの提案は嬉しいものだった。

楽しいこと好きな妖精さんたちはもうすっかりクリスマスマードになつており、衣装がサンタクロースみたいな赤白になつてゐる者が多々いる。視界に赤色がちらついてちょっとどうつどうしいが、別に何か支障があるわけでもないのでそのままだ。

「音楽隊は成功だつたな」

特に老人たちからの評判が良かつた。艦娘たちはもともと本物の艦艇だつたために、彼女らに縁のある人物は存命であつたりするのだ。共に戦つた者、救助してもらつた者、国に帰してもらつた者などなど。

「そろそろ時間なのです」

「ん、そうだね。切り上げていこうか電」

用意していた包みを持って電と一緒に執務室を出る準備をする。さすがに艦隊の全員にクリスマスプレゼントを渡すとなると、いかに世間よりも高給取りと言えどもお金がかかってしまうのは目に見えているのだ。だからプレゼント交換会ということで各々の負担が減るようにしている。が、別にプライベートでのプレゼントを禁止はしていないのでそこらへんはゞご自由にといったところだ。

今回用意したものは無難に使えるものとして保冷のできるおにぎり用のケースだ。柄もかわいらしいひよこで女の子が持つ分にはちょうどいい感じだろうし、実用性もそこそこだ。遠征先にでも持つて行つておにぎり食べて戦意高揚してもらいたい。

ちなみに参加できない面々のためには他にプレゼントを用意しているので、彼女らにあつた時にでも渡そうと思う。

「もうそろそろ新年なのです」

「はやいなあ、電と会つてもう半年以上か」

「艦隊も大きくなりましたね」

「本当に」

気がつけば本当に大きくなつていた。そして進出できる海域も広がつて、艦娘たちの練度もあつてからベテラン提督の艦隊と肩を並べることも増えてきている。徐々に強くなつていく敵も難なく倒していくので、本当にうちの艦隊は強いなどまるで他人事のように感想を抱く。

ベテラン艦隊の練度の数値はこの国全体で見ればかなりの高レベルでまとまつているのだが、俺の知識からすればまだ新人提督といつたレベルでしか無い。こんなもので出てくるであろうレ級や鬼、姫といった壊れ連中に勝てるのだろうか？ だが、心配しても一介の提督が出来るのはただ艦隊を率いて敵を駆逐することしかない。

部屋から出て鍵を閉めようとしたら誰かの走る音がする。音のなる方へと顔を向けたらウサギみたいなカチューシャをぴょこぴょこと揺らしながら最速の駆逐艦が走つてきた。

「提督っ！」

「島風ちゃん、廊下を走つてはダメなのです」

「プレゼントだよ提督！ 早いでしょ？」

何かを抱えて走つてきた島風型駆逐艦「島風」は俺の前で止まるとそれを差し出してきた。案外重量があり、何かと思つて島風に聞けばマフラーという。

「マフラーかあ、今からの季節にはちょうどいいなありがとう島風。けどマフラーにしてはすつごく重い……これ違うマフラーだ！」

「バイクのマフラーなのです!？」

重さの時点で薄々分かってたけどさすがはスピード狂といった所か。艦娘も持とうと思えば免許を手に入れられるが、それは艦娘用の特別なものであり戸籍があるというわけではないために自分名義の車などを持つことはない。目の前の島風は最速でバイクの免許を取りてきて自費でバイクを購入しているが、色々な関係でそのバイクは俺所有ということになっている。

つまりこの島風は俺の所有物だからと改造用のマフラーをプレゼントし、交換させようと言うのだ。なんということ!

「いやね、わざわざ俺に渡さなくても自分で交換すればいいじゃないか。実際島風のものなんだし」

「えへ、いいじゃないですか提督。かわいい部下のお願いと思つて?」  
ね、と上目遣いでねだられる。

「いいよ」

「司令官さんはチョロいのです」

電はチョロいとか言うけど男の子ならみんなそうだよ? 可愛い女の子のお願いは断れないよ?

スピード狂があるので公道でバカみたいな速度を出していいだろうか心配になってきた、こんど島風について行つてみることを検討しよう。

またお金がもつと手に入つたら400近く出るのを買いたいとか言つてたのを思い出す。車重とか到底彼女のような小さい子じや扱えないものだと思うんだけど……いや艦娘だつたな、絶対俺よりか軽々と使いこなすわ。

「それじゃ会場に先に行くよ! 提督も早くね!」

小さい手を振つてスキップしながら去つていく。俺は手元にある渡されたマフラーを見てため息を一つ、電に扉を開けてもらい執務室に置くことにした。

島風に出鼻をくじかれたが、しばらくして食堂に着く。姉妹艦がいる艦たちはだいたい集まつていて、ほかはかつて同じ隊だつたりしたメンバーで集まつている。みんな楽しそうで、那珂ちゃんや龍驤さん

などのサンタクロースの格好をしているのもいてクリスマスなんだなあ、と実感する。思い出すのは海兵学校時代、何が悲しくて野郎でクリスマスを祝わなければならなかつたのだ。まあでも鹿島教官のサンタクロース姿は實に眼福だったので良しとしよう。

俺や、食堂についてから姉妹のところへと行つた電は先ほどまで仕事をしていたために制服であるが、非番であつたりした艦娘は私服でいるようだ。そして俺に気付いて話しかけてきた彼女もそつだつた。

「ん、提督。來たか」

「長門……なんか君がこういった服を着ているのは珍しいな」

「そうか？ 普段からこういうものだが」

どうだお洒落だらう、と少し自慢気に聞いてくる長門型戦艦一番艦「長門」。彼女の海に出る時の肌面積が多いあの服装だと鍛えられた筋肉が惜しげも無くさらされており、まるでアスリートのような肉体美から勇ましさを見て取れる。しかし、今のベージュのニットワンピースをお洒落に着こなす彼女はスポーティな美女ではなく、たおやかな美人さんであつた。

雰囲気が扶桑に似ているといえば普段とのギャップが伝わるだろう。なんか長門ではない別の女性と会話をしているようでどうにも落ち着かない。

「ま、陸奥が全部コーディネートしてくれたのだがな」

「……陸奥か」

「ああ、陸奥だ」

長門がじつとこちらを見つめるのに多少の気まずさを覚えて、逃げるよう視線を彼女から外して周囲を見渡す。すると遠くで二航戦の蒼龍、飛龍と会話をしていた長門型二番艦「陸奥」はこちらに気付いた二航戦に押し出されるようにしてこちらにやつってきた。この三人は波長が合うのか、かなりの頻度で一緒にいるところを見る。

他に陸奥と一緒にいることが多いのは如月、暁、そして夕雲。大人の女性の見本として尊敬しているのか、時々仕草を真似ているのが見れる。

「はあ～い提督、お仕事お疲れ様。それで長門はどうだつたかしら？」

随分と熱心に見てたみたいだけれど

「い、いや似合うなって。……服を見立てたのは陸奥って聞いたよ、さすがだな」

「あらありがと。じゃあ、私はどうかしら？」

グレーのセータード長門と同じく普段よりも肌を見せていない彼女は、にも関わらずどこか色っぽさを漂わせていてドキッとする。いつもの服装は体のラインが丸見えどころではないというのに、隠れている今のほうが余計にくるものがある。そしてブラウン系のショートパンツに黒タイツともとから長い脚がさらに長く見える。

正直に言うと見惚れて何も言葉が出なかつた。胸元に手を置いた彼女は返事がない俺を不審に思つたか、すこし訝しげな表情で声をかけられる。

「提督？」

「あ、うん。綺麗だ本当に」

小学生並みな感想しか言えなかつた俺を、蒼龍と飛龍が小声でささやきあいながら見ているのがなんかムカつく。きっと女の子に耐性がなくてタジタジになつてするのがおもしろいのだろうか、ひどい艦娘たちだ。彼女らも今時の女の子というような服装をしていて、とてもかわいらしい。

「ふふ、それじゃあ邪魔者は退散するか。陸奥を頼むぞ提督」

「妬けちゃうなあ……いこつか飛龍！」

「そうね、七面鳥たべようよ七面鳥！」瑞鶴が来たら怒つちやうしさ

今のうちに

三人が離れていく。よりもよつて陸奥と一人つきりにさせるなどなんてことをしてくれるんだ。

内心頭を抱えていると、今回の主催である那珂ちゃんを筆頭にした川内型による挨拶が始まつた。たぶん那珂ちゃんに巻き込まれる形だつたんだろうなあと川内と神通さんを眺める。那珂ちゃんは結構この二人に可愛がられていて、多少のわがままは何でも聞いてもらつているように見える。今回のこれもわがまだつたのだろうな。

『メリーカリスマス！』

那珂ちゃんのその言葉とともにパーティが始まった。

「メリークリスマス、提督。乾杯」

「乾杯」

隣りに座る、かつて一番最初にケツコンカツコカリをした艦である陸奥とグラスをカチンと鳴らした。果たして俺はこれから平常通りでいられるのだろうか。

## 15 彼女の憂鬱

過去の記憶と今の記憶に折り合いを付けた、と彼は思いつつも。けれどどこか大事なことを忘れてしまい、ふとした拍子に狂おしい感情が胸に湧き起ころう。昏睡から病院で目覚めてはじめて見えるようになつた妖精たちや、海兵学校で出会つたあのモニターで見てた一枚絵とは違うリアルな艦娘たちへの懐かしさ。

思い出せそうで思い出せない、霧がかかつたようなもどかしさが今も残つてゐる。

そして、知らないふりをして泣かせてしまつた隣に座る彼女への、今まで感じたことのない罪悪感は今でも自分を責め立てる。

お酒に強く、非番であるならば日付が変わつてもウイスキーなどを飲み続ける陸奥と同じペースで普通の男が飲んだ場合、あつという間に酔つ払つてしまふのは火を見るよりも明らかで。つまり提督はしばらくすると頭が重くなり、まつすぐ歩くのも困難だろうと第三者から見ても分かるくらいに酔つ払つていた。普段よりもハイペースだつたのにはシラフで陸奥と会話をして平常心を保てないと思つたからというのもある。

「てへとくく、これ何本に見える？」

「一本」

「しそえ、それ島風ちゃんの指じやなくてカチューシャです」

少し離れたところで陸奥とサシで飲んでいる提督を見つけた駆逐艦は今ここにいる島風と雪風のように絡みに来ていた。先程は暁が「まったく司令官はお子様ね。暁を見てなさい！」と陸奥が持つていった焼酎をグラス一杯全てぐつと飲み、誰もが予想したとおりそのあと電に曳航されていった。

また千歳が「飲んでますか提督ー！」と突撃した直後に千代田に連れ戻されるなどもあり、パーティの中心とは少し離れたところに座つていたが、周囲は賑やかであつた。

「お酌しようと思つたら、もうすっかり酔つ払つていらつしやいますね」

「鳳翔さんだ！」

「はい島風ちゃん、メリークリスマスです。甘いお菓子はいかがですか？」

「雪風も欲しいです！」

小柄な軽空母「鳳翔」は提督が前後不覚に近い状態になつてゐることに少し残念がりながらも、厨房から持つてきたクッキーなどを島風たちに渡す。

「陸奥さんもどうです？」

「あら、私の分もあるの？」

「ほーしょーさん俺もー」

「はいはい、お待ち下さいね。もう陸奥さん、提督はお酒が貴女ほど強くないのでですから加減して差し上げないと」

「はあい」

あ、この人反省する気全く無いなと鳳翔は密かに思つたが言うだけ無駄だらうし口にしなかつた。こうやつて注意したのも何度目だろうか、小さくため息をつく。その姿は小さい子どものイタズラに手を焼いて困つた若い母親のようで、いつもの提督であるなら脳内で『鳳翔ママー!!』と叫んだであろう。

ひとしきり騒いで飽きた駆逐艦を引き連れて鳳翔は別のテーブルへと移動していった。もうそろそろお開きの時間だ、お菓子を帰る前に持たせようと鳳翔は駆逐艦をまず呼び寄せた。

提督はそんな鳳翔に気付くこと無くグラスを口元に持つていく。

「酒！ 飲まずには

「一旦落ち着いて水を飲みましょ？ もう、お姉さんに合わせようとするんだから」

「焼酎飲みたいよお姉ちゃん」

「そこ捨うの？」

まったくお酒に飲まれちゃ駄目よ、と言つて陸奥は強引にお酒を取り上げた。どこかの悪党みたいに酒を煽ろうとしたのを阻止された提督は、ちょっと悲しげな表情になつたあとケーキをフォークでつづいた。

イチゴのショートケーキ、パーティで出される食べ物の材料費をいくらか負担した提督の要望によつて作られたそれは、正に提督がクリスマスに食べる理想のケーキと考えるものであり、酒と同じくハイペースで食していた。そんな彼の姿を眺めながら明日は大変だろうなど陸奥は心配するが、見てて面白いためにしばらく止めなかつた。しかし時間も時間、頃合いだろうときに制止する。

「もうお開きの時間よ、部屋に戻りましょ？」

「早いな、まだ始まつたばかりのような気が……おつと立ち上がつた拍子によろめく彼を支え、その温もりを感じてふと思ひ出す。

陸奥がここにやつてきて提督から云われた言葉は「はじめまして。陸奥、でいいよな？」だつた。昔の記憶、彼の若いころの姿と声でそう言われた瞬間に、頭が真つ白になるかのような衝撃を受けた。覚えていなífりをする彼からすれば当たり障りないような言葉だつたのだろう。だが自分が愛して、そして自分を愛してくれた人間からそのようなことを言われるなど、到底言葉で表すことのできないものだつた。彼が自分を本当に知らないのだと思つてしまつた。

また生まれこなければよかつた、あの素晴らしい日々を胸に抱いたまま永遠に眠つていられればよかつたのに。過去を思えば思うほど、戻りたくなる。どんどん思考の闇にとらわれていつた。思い描くのは今の提督ではなく『前』の彼。提督との繋がりから本能では彼が『前』と同一人物であるとはわかつていつつも、記憶と理性がそれを否定しようとする。

着任して数日はそうふさぎ込み、陸奥は姉の長門に迷惑をかけてしまつた。

『陸奥、この首に下げているものはただの飾りか？』

『違うわ！』

『どう違うというんだ。私は自分のことのように覚えているぞ、それに込められた想いと誓いを。まさか忘れたとは言わないよな？』

グツと、ネックレスにされた指輪を掴み長門は詰問する。

『死んでも必ずまた出会う、そう約束したのではないのか。どんな形

でもいい、出会って欲しいと言ったのはお前だろうに』

同じように愛して欲しいなんて贅沢は言わない、ただ会ってくれるだけでいい。互いにそう誓つたことを思い出した時、永遠と闇に向かっていた気持ちにふと光が差した。

前向きになつた気持ちで陸奥が観察してみれば、提督は陸奥や艦娘たちのことを覚えていながら知らないふりをしているように見受けられた。特に長門を筆頭とした自分よりかはかなり後ではあつたがケツコンカツコカリを最初のほうでした艦娘への対応が顕著だつた。どこか他の艦よりも一步引いた態度を取つてゐる。

どうして、と聞いてもはぐらかされるのは目に見えている。ならいいたくなるまで待とう、陸奥はそう意気込んでこのクリスマスに臨んだ。すでに彼女の戸惑いや悲しみは振り払われたのだ。過去は過去、これからは未来を作つていくのだから。

窓の外に雪が降る。明日の朝には世界は白く染まつてゐるのだろうか、冷えた廊下で白い息を吐きながら陸奥は思いを馳せる。

ベッドに突っ込んだら一瞬で寝てしまいそうなくらいにフラフラン提督の腕を肩に回してゆっくりと歩く。艦娘の力をもつて背負つたりしようかとも考えたものの、あとでそれを知つた提督が「女の子に背負われるだなんて」と自己嫌悪で落ち込むのが目に見えているのでやめておいた。

「……陸奥さん」

「榛名、どうしたのかしら提督の部屋の前で」

「提督のために、彼から離れてください」

提督の部屋の前、扉を背に陸奥を睨みながら立つ金剛型三番艦の榛名は普段の柔軟な顔からかけ離れた、目の前の存在を敵として見ているような表情をしていた。まともに歩けない提督を支えている陸奥は行く手を阻む榛名に眉を顰める。

榛名は陸奥が着任してからの提督の様子に胸を痛めていた。見ながらに陸奥との接触を避けようとし、時折気まずそうな表情を出する。一人でいるときには悩ましそうに顔を歪めていることもだんだんと増えてきて、その全ての原因は陸奥にあると断定していた。

「苦しんでいるんです、辛そうなんです。どうかその人に関わるのをやめてください」

「そう言われても困るわ。私はこの人の戦艦だもの」

「ならば榛名が、二度と貴女がこの人の前に現れないようにして差し上げます！」

ガコン、と音を立てて砲を陸奥へと榛名は向けた。無論、撃つつもりはない。ここで撃つてしまえば提督も巻き添えになるし、大事になるのはわかっている。だが、これがただのボーズとは言えども至近距離で味方に砲を向けるという懲罰ものな行動から陸奥は榛名の本気度合いを悟る。

「それで私を排除したらどうするつもり？　まさか後釜に居座ろうというつもりかしら？」

「そんなこと……！」

「無いとは言わせないわよ、私は知っているの。あなただけじゃない、提督のプライベートに踏み入って覗きこんだりしていることを。そういうでしょう？」

「榛名はただ提督を」

「好きなんだけ？　普通の恋愛つてものは知らないけれど、普通そんなことをしないってことくらい私は知っているわ」

静まり返る廊下、おそらく見えないだけで隠れたところに何人かの艦娘がこの光景を見ているのだろう。好きな人間をずっと見ていたい、知らないことを一つでもなくしたい。なるほどそうだ、だけれどもそれを踏みとどまるということも大切だと陸奥は信じている。

むやみに詮索などしなくていい、相手が全てを見せてくれるまで待ち続けよう。

「それに前のこと何も言わないのには踏み入つてほしくない事情があるからでしょう？　今のあなたならこの人のことを考えずに、耐え切れないので突撃しそうね」

「榛名は……」

「近くにいればいるほど、前との差異や煮え切らない反応にやきもきするわ。それでも大丈夫と言うの？」

「榛名は、榛名は大丈夫です」

勇ましく陸奥を見上げていたはずの視線は床に向かい、いつのまにか握りこぶしになっていた手は震えている。榛名だつて自分の性分は分かつていて、時に盲目的になつて周囲が見えなくなることを。でも、だからといって陸奥が提督を苦しめているのが許せなかつた、耐え切れなかつた。

大丈夫、と言つた言葉は震えていた。彼と積み上げてきた思い出は自分しか持つていない、小さな違いでも一緒に過ごしていくうちにそれが大きな疑心になる。本当に彼は自分の提督なのだろうかと、そう疑つてしまいそうだから。

「むつ……また喧嘩？　いい年なんだからさ、年から年中喧嘩しないで仲良くしようよ。まつたく、出会つた当初はこうじやなかつただろ」

呂律の回らない、そして聞き取るのも難しい大きさで呴かれたはずの提督の言葉はしつかりと二人の耳に入つた。さつきまで糸の切れた操り人形のようにその頭をぐたつと垂らしていたのが、今はしつかりと二人を見据えるために上げられている。

「もう何年一緒にいるんだ……戦つてる時はそうでもないのにどうして陸の上だ、と……」

そして再びガクリと頭が下がる。急に抜けた力が、支えている陸奥にまで衝撃として伝わってきた。

「……提督に怒られちゃいましたね。いいです、今日は引きます。ですが」

ピシッと榛名は陸奥を指差す。

「提督を苦しませるような勝手な真似、絶対に許しません」

「あらあら、この私がそんなことをするわけないわ。安心してちようだい」

数秒二人は見つめ合つて、そして視線を逸らす。榛名が退いた先にあつた扉を開けて陸奥は提督の部屋へと入つた。すでに寝息を立てている提督の頬をつねり「歯くらい磨きましょ？」と起こす。喉を突くなどしたらあぶないために陸奥は膝の上に寝かせて彼の歯を磨く。

そして寝支度をさせて就寝中の『万が一』が無いように共に布団を被つた。

そして翌朝、頭痛と共に目が覚めた提督が視界に入れたのは陸奥の顔だった。心臓が跳ね上がるかのような驚愕と、落ち着く甘い香り、そして今までに感じた以上の既視感と愛おしさがこみ上げてきて、色々と限界を迎えた彼は再び意識を手放してしまった。

そんな彼を陸奥はクスリと笑った後に胸へと抱え込む。

「また愛して欲しいなんて言わないって、そう言つたけど訂正するわ」

提督の前髪を搔きあげて、陸奥はその唇を彼の額に落とした。

「私を永久にあなたの傍に。永遠にあなたと生き続けたい、だからまた愛して。お願ひよ？」

そうささやき、そのままギリギリの時間までベッドの中で提督の暖かさを感じ続けた。

## 閑話

### 金剛型会議へようこそ

洋室、金剛型四姉妹の部屋。ふかふかなソファや絨毯など、畳の上にちやぶ台などといった扶桑型とは全く異なる趣なそのお部屋。高身長でありいまこの部屋にいる他の四人よりも頭が一つ抜けた彼女は、某朝潮型五番艦に「あのひとすごい！」と恐れられている女性である。

眼鏡を光らせた彼女、金剛型戦艦四番艦「霧島」は咳払いをひとつ、目の前にいる三人の姉とどうして連れてこられたのか分かつていい女性を見据えて声を発した。

「えー、金剛型会議を行います。議長はいつもどおり私、霧島です」

霧島の言葉のあと、そろ一つと手があげられる。四姉妹は全員その視線を彼女に向けた。

二番艦、比叡の隣に座らされている彼女は、この国の人間にとしては長い色素の少し抜けた髪の毛をポニー・テイルにまとめた和風美人である。扶桑に似た、と言えば分かりやすいし名前からして共通点がある。

そんな彼女の名前は大和。大和型一番艦の「大和」である。どうして金剛型会議に連れてこられているのかと言えば、姉のようで母のような比叡にガシツと掴まれ連れてこられたからである。彼女ら2人の成り立ちから顔立ちが非常に似通つており、知らない人が見れば仲の良い姉妹だと見ただろう。

「はい、発言を許可します名誉金剛型の大和さん」

「名誉金剛型というのも気になりますが、どうして大和を……場違い」というか

「気にしなくていいのデース。比叡の妹分なら私の妹も同然デース！」

「そ、そうですか」

大和はこの国の大半の間らしく外人に弱いようだ。金剛は帰

国子女だけど。

「榛名は大丈夫です！」

「霧島にも妹ができたようで嬉しいわ。歓迎するわよ～」

「だから気にしてないで、大和」

比叡がそう言つて大和の肩をポンポンと叩く。そして「金剛型は姉をお姉さまつて呼ぶから、大和も比叡のことを比叡お姉さまつて呼んでね」と一言。比叡の言葉に金剛型姉妹は揃つて首をうんうんと縦に振つた。

いきなりのことに戸惑い「ええ……」と口にしてしまうも、真剣な

他四人の表情から大和は顔を赤らめながら呟く。

「こ、金剛お姉さまこれからよろしくお願ひします」

「カワイイ！」

金剛が思わず椅子を蹴つて立ち上がり大和へと抱きつく。それを見た比叡がずるい、と金剛と大和2人にガバッと抱きついた。榛名がおずおずと三人に近寄つて体を寄せ、最後に霧島もくつつく。金剛姉妹丼カツコカリの完成である。後日、大和の妹の武蔵も巻き込まれて更に大きな塊になつたとかならないだとか。そして清霜がこれを見て「駆逐艦も集まつて戦艦になろう！」と言い出したとか。

あわあわと首筋まで赤くした大和が開放されたのはそれから数分後。霧島が仕切り直しといつた形で切り出す。

「では本題に入りましょう。前回は確か司令の好みは『不幸な子』かもしないというところで終わりましたね」

「は、榛名は大丈夫です」

「榛名、全然大丈夫じゃない顔デース」

「まるゆちやんを吐き出せばいいのでしょうか!?」

「妙なことを言つてないで正気に戻るネ！」

榛名、この面子の中では一番の幸運艦。今にも死にそうな顔になり変なことを口走つたのを金剛に咎められる。なおもし幸運艦が幸運の源のようなものを分け与えることが可能であるならば扶桑型が黙つていなければ明らか。

「扶桑姉妹に翔鶴、雲龍あたりだつたよね。確かに司令は好みみたい

だつたけれど

「はい、比叡お姉さま。ですが、明らかに不運な大鳳にはそこまでなようです」

霧島の言葉に全員が大鳳を思い浮かべる。陸奥に匹敵するかそれ以上な不運を持つており、不幸だわと言う方の扶桑型ですら同情的な彼女。しかしながら提督はそこまで好みといった素振りを見せていなかつたし、むしろ仲の良い訓練仲間のようであつた。

ちなみに今日も長良型の一部と大鳳、提督で走りこみに行つている。

「……思い出せば別に不幸でもなかつた加賀や蒼龍。むしろ幸運艦な飛龍にも鼻の下を伸ばされていましたね。例の日誌にも色々書いていますし」

榛名の言う彼の日誌は色々な情報を得るのに手つ取り早いし確実なものである。川内が書き写し青葉が隠し撮りした写真などを付けて皆に回す、あとたまに秋雲の絵。提督にプライバシーというものはなかつた。下手をすれば艦隊の大多数が彼の部屋の合鍵を持つており、PCのパスワードまで知つていて

「やつぱり胸デスか。sh i t！」

「……金剛型も負けず劣らずだとは思いますけど」

大和は時々浴場で見かける彼女らの胸部装甲を思い出す。金剛型はパツと見た目そこまでの大きさを持つていよいよ見えるが実は全員着痩せしている。というかサラシでキツくしばつてているためにあまり無いように見えるのだ。提督も私服姿を見たことあるし知つているはずである。日誌にも「金剛型の私服はヤバい」て書いてあつた、大和は知つていて

「それでは今回は胸で考察しますか」

異議なし、と霧島の言葉に大和以外が返す。

「空母勢つよいよね、胸だと」

「大鳳さんみたいなフラットな空母にはセクハラな言葉書いていませんもんね」

比叡の何気ない言葉に無意識に毒を混ぜつつ榛名が返し、続ける。

「雲龍型ですよ雲龍型。なんですか末っ子の葛城さん以外どうなつているのですか」

「少食なのにあのスタイル、霧島の面白い分析対象ですあの姉妹。秋月型もですがどうして食べる量に比べて肉付きがこう、女性らしいのでしようか」

一応言葉を選ぶあたり自称艦隊の頭脳である。なお興奮していたのであればもつと乱暴に「あの人達えつちな肉体してますね!」とド直球な言葉を口走ったのは金剛には容易く想像できた。

「たくさん食べてそれなりなスタイルの大和、そこのところどう思うかしら?」

「た、体质でしようか」

思わずところで飛び火したので大和は身構える。こういった話題になると妹の武蔵は「大和は胸に徹甲弾の被帽つけてるからな!」と胸元をガンガン叩いてカンカン音を鳴らしてくるのである。大和撫子らしく恥じらいを持つ大和は、元からサラシしか身に着けていないような痴女と言われても仕方のない格好の武蔵の、そのでかい胸を同じように叩いてみたいと思つてゐるが叩けずにいる。

一方清霜はこれが戦艦、と目をキラキラさせながら武蔵の胸をわつしと掴んでいた。

「うー、でも単純に大きさだけなら五十鈴や浦風、浜風もネ」

「けど色気が違いますよね、空母とかに比べれば」

その比叡の何気ない指摘に電撃が走る――

「色気……なるほど陸奥は色気ムンムンネ」

「金剛型は金剛お姉さま率いる愉快な四姉妹といつたものなので色気とは少し遠いわ……この霧島が気付けないところを、さすがお姉さまです」

「なるほど、提督を誘惑してきます!」

「そういうのが色気から遠いね! 棍名落ち着くデース!」

再び混沌としだした金剛型会議に大和は思わずため息をつく。そして窓から空を見上げて呟くのだつた。

「大和型も色気とは少し遠いですね」

夫の影を踏まないような場所にいそうな大和、見るからに色気とは別ベクトルな勇ましさの武蔵。確かに大和の言うとおりに色気とは遠いところにいる姉妹であつた。

## 月夜に吼える足柄

勇ましい姿から狼と呼ばれたのではなく、ゆとりのない戦いにしか性能を重視していない姿から「飢えた狼」と呼ばれたという説ある艦の足柄。妙高型三番艦の「足柄」はその評価通りに戦いに飢えており、また歴戦の名鑑もある。

敵との戦闘時に牙を向いて相手に吠える姿は勇ましい。

(のだけれど……)

砂浜、月明かりの下にひとり佇む彼女に、素直に美しいと霞は感じる。優等生然とした朝潮型一番艦「朝潮」の妹だというのに何かと反抗的な十番艦「霞」は三番艦の「満潮」と共に鎮守府三大ツンデレに数えられている。(三大ツンデレには諸説あり)

癖の強い陽炎型を率いる陽炎と共に朝潮も駆逐艦どころか、大型艦からも一目置かれている艦であると言える。というより今は多くの妹を束ねる駆逐艦長女たちは例外なく一目置かれる。大衆の前でパンツをチラ見せさせていてもだ。

さて、現在の霞は改二状態である。今現在、縁のある礼号作戦で一緒だった艦たちを率いているのだから当然といえば当然だ。司令部は彼女が積む。本来の旗艦になる大淀が提督の補佐にその力の殆どを割いているための处置であり、もし提督が礼号組で作戦行動をさせようとした時は大淀が旗艦に戻り霞は改二乙に改装されるだろう。

改装の度に「霞のお通りだ！」と担ぐのは恥ずかしいからやめて欲しいと霞は切に願う。あと積極的にボケたりいじつてくる連中であるから率いるのも勘弁願いたい。

美しくもどこかしょぼくれた雰囲気の足柄に話しかけるかかけるまいか霞は悩んだが、足音に気付いて彼女が振り向いたので、今更何も言わずに引き返すのもどうかという雰囲気になつた。仕方なく声をかける。

「また妙高さんにでも怒られたの？」

「霞ちゃんの中で私はいつも妙高姉さんに叱られているイメージなのね」

「いつも叱られているでしょ」

呆れた表情で霞は足柄にそう言つたが、それは事実である。それに對してうふふとイタズラっぽく笑うだけで足柄は否定しなかつた。

ちなみに先日は秋月型にお腹いっぱい食べさせてあげたいと勝手に張り切つて揚げ物をたくさん食べさせた結果、普段あまり食べない秋月型をダウンさせてしまうという事件を起こしている。彼女らの食べ残しを喜々として食べ進める加賀に対抗してカツカレーを搔き込む瑞鶴。そして瑞鶴に付き従つた葛城に被弾してしまつたりなど結構被害が広がつた。

この事態に提督は何故か胸元に手をやりつつ編成を組み直すこととなつた。妙高姉さん激おこで初風が大層怯えていたそつな。

『食の細い人に重たいものを大量に食べさせる人がいますか!!』

『ええー、だつて前は普通に食べきれてた量なのよ』

『前は前！ 今は今です！』

残すなどもつたいないという精神の秋月型が無理したのは語るまでもない。食事の量は少しずつ増やさないとお腹がびっくりしますまい、と天城が言いながら葛城を看病していた。建造時期が同じ頃だつたせいか、雲龍型も秋月型程度の食の細さである。約一名を除いて肉付きがいいのに。

が、その食の細さを足柄は心配しているようだ

「だつてしようがないでしょ！ あれだけしか食べないで作戦行動だなんて力尽きちゃうわ！」

と主張する。

確かにそれもそうだ、と霞は理解を示す。秋月たちと同じ量の食事で出撃しようと提督に言われた日には「このクズ司令官！」と罵りながら足蹴にするだろう。まずそんなことは起きないだろうが。食事は士気高揚に大きく関与しているのだから霞の対応は当然といえば當然。

しかし、今はそういう話をしているのではない。足柄は許容量以上を食べさせようとしていたのだから霞は咎める。

「バカね。聞くけれど武蔵さんの食べる量をドンと出されて食べきれ

るのかしら」

霞の問いかけに足柄がイメージした。

『足柄それだけで大丈夫か、途中で力尽きないか？　補給は大事だぞ』  
そう言いつつ、武蔵がバケツ一杯のカレーをものすごい勢いでかつ何故か上品に食べ進める姿が容易く想像できる。あと隣で必死になつて清霜の姿とかも。そして島風は適量を搔き込んですでに外を駆け回っていた。

その横で足柄はヒイヒイ言いながら武蔵と同量のカレーを食べさせられるのである。あの超弩級戦艦と同じだけ食せと言われたら絶望するに違いない。

「無理ね」

即答だつた。

ため息をついて霞は忠告する。

「他の人も自分と同じつて考えないこと。いい？」

「ごめんなさい霞母さん」

「クズ司令官の真似をしない」

ちなみに「霞母さん」と提督に言われた時の彼女は口では嫌そうにしつつも顔がニヤけていたと、とある重巡Aは語る。一体誰なんだ重巡A。

関係のない話であるが、青葉が霞に先日追いかけられていたのが多數目撃されている。なんでも恥ずかしい写真をばら撒かれたのだそうだ。全く関係のない話だ。

「霞ママ……」

「やめなさいつたら！」

妙高型で一番のノリの良さが多少鬱陶しく感じる。もしここに足柄と波長の合う大淀がいたら收拾がつかなくなつていたに違いない。大淀を足柄と組む機会を減らしている提督に感謝した。あいつらが一緒であれば霞はいじり倒されてしまうと何んなりする。

「ま、言うとおり妙高姉さんに叱られたのよね。それで反省中つてわけ

「あつそう」

こうもめんどくさいツッコミをさせられているときすがに霞も疲れる。こうなるのが分かりきつてはいるから足柄に話しかけるのを躊躇したのだ。面倒になつてきたので足柄のいうことを右から左に聞き流そうとする。

が、

「羽黒に男を手球に取るコツを……」

「色んな意味でやつてはいけないことをしたわね」

足柄の爆弾発言に突つ込まざるをえなかつた。

羽黒という娘は妙高型の末っ子の四番艦である。強烈な個性を持つ姉たちに囲まれているせいか、彼女らとは異なり穏やかで引っ込み思案という内気な性格をしている。もし男に言い寄られたら断りきれずにお持ち帰りされ、翌日変わり果てた姿で発見されること間違いなしである。

持ち帰ろうとした男が、

パニックを起こした羽黒の腹パン一発で男が沈むだろう、かわいそ  
うに。

この弱々しく見える羽黒、四姉妹の中で実は一番火力が高いのだ。  
人は見かけによらない、どうして武勲艦はこうもおとなしいような娘  
ばかりなのだろうと、提督が首をひねっている姿を幾度か目撃されて  
いる。

見た目も性格もあつて、世に放つたら男たちが放つておかないと  
う羽黒。彼女に男をどうにかするコツを伝授するなど鬼に金棒だ。  
火に飛び込む虫みたいにワンチャン狙う男どもが犠牲になつてしま  
うであろう。

しかし、男たちにとつて幸か不幸か。艦娘は外との交流があまりな  
い。犠牲になる男は羽黒を指揮する提督くらいなもの。

「羽黒も『これで司令官さんを落とします！』って言つてたし樂しみ  
ね」

「クズ司令官、落とされないといいけれど  
意識を、と心のなかで続ける。というか意識を落とされるだけです  
めばまだいい。重巡洋艦の出力で一般男性がなにかされたら消し飛

ぶのが見えている。しかし、それを分かつていながら

「テンパつたあの子がなにでかすか姉の私でも分からぬいし、樂しみだわ」

と足柄は笑っていた。霞は心のなかで手を合わせる。「クズ司令官、骨は拾つて一緒に墓まで持つていくから安心してちようだいな」と。霞もなかなかにおかしかつた。

「そうそう知つてる? 大淀が私達に任務が与えられたと言つていたわ」

「へえ、あたしたちで」

「沖ノ鳥島について。戦場が呼んでいるわ……つ！」

うおお、と月夜に吠える足柄。狼なのに遠吠えしないのね、と頭の隅つこで「んにやー!」と鳴く足柄に対しても霞は思う。

この足柄、狼というだけあってやつぱり動物系元締めの比叡の影響下にある。全力で空回りするところなどどこか似ているデース、と金剛から生暖かい目で見られているのを本人たちは知らない。

ちなみに足柄のことを「飢えた狼」と称したのは英国人である。英國からの帰国子女である金剛が足柄のことをどのように思っているのか、提督は聞きたいけれど聞き出せないでいる。

『礼号作戦実施せよ』、ねえ

「提督もこれを見越して霞ちゃんに最近旗艦を任せていたに違いないわ。それに、久しぶりに裏方から大淀が出てきてくれそうでみなぎつてくるわ!」

「ええ、そうね……」

バカばっかりな艦隊になりそうだと霞は複雑な心境になる。できれば旗艦は大淀がいいなあ、と思いつつも提督から任されるのであれば全力ですすんで旗艦をやろうだろう。口でなんだかんだ色々いつつも霞は提督に頼られたい。

「それまでにたくさんカツを揚げておくわ」

「やめなさい」

「これから毎日カツよ!」

「やめなさい」

霞の制止もどこ吹く風といった足柄。作戦が近づくに連れて揚げられるカツの量は増加していき、遠方の作戦から帰ってきた妙高にこつてりと絞られるまで止むことがなかつた。足柄のカツによつて提督は慢性的な胃もたれになり、しばらく苦しそうにしていた。

また後日、羽黒の提督への夜のアタック（物理）を球磨が止めるというハプニングが起きた。さすがは夜戦でとてつもない破壊力を見せつける雷巡三隻を妹に持つ長女だ、重巡洋艦をよく抑えないと提督から感謝されている。

彼女らの夜戦を見た足柄の戦意が更に高揚し、妙高の胃が荒れた。

## 第二部 彼女と向き合うまでの憂鬱

### 1 憂鬱な新年

正月といえばなにを思い浮かべるだろうか。おせちや門松、あとはお笑い番組などを挙げる人が多いかもしない。しかしながら、この提督という男は初詣というものが正月の大部分を占めていると考えている。

初詣は一大イベントだ。どこの神社も混み合い、普段の閑散とした雰囲気などどこかに行つてしまつたよう、多くの人々の声が響き合う。ついさっきもらつたばかりのお年玉を握り屋台で買い物をする子供や、カツプルで仲睦まじくデートをする若者。

提督もこの仕事に付く前までは毎年の正月はそういつた混み合つていた神社にいたのだが、いまはそうではない。わざわざ神社に行くまでもなく、全国各地の神社に初詣できるからだ。

元旦の早朝、まだ薄暗い中に彼は探しびとを求めて鎮守府を探し回っていた。目当ての人物は毎朝規則正しく目覚めて鎮守府のどこにいる。今日はなにをしているのだろうか、と考えながら足を進めていると綺麗な黒の長髪が揺れたのが見えた。

「長門！」

提督は可愛らしいエプロンを身に着けた長門を視界に入れた瞬間に彼女へ駆け寄つて小銭を投擲した。いきなり小銭を投げられたのだが、それくらい長門にとつては不意打ちに入らない。彼の投げた小銭はすべて片手で掴み取られた。彼女が手を開くとそこには500円玉、50円玉、そして5円玉の計555円があつた。

二札二拍手一札、きつかり90度まで腰を曲げた礼をした彼が顔をあげると長門は満更でもない顔をしていた。

「謹賀新年か、胸が熱いな」

さすがビッグセブン、提督の謎の奇行に動じていない。

彼女の小銭をとつさに受け止めたのとは反対の手には竹ぼうきが握られている。彼女は外で掃除をしていたようだ。正月というのに

生真面目な女性だ。朝っぱらから女性に向けて小銭を投げつけるような男に爪の垢を煎じて飲ませてやりたい。

謎のやりきったような表情をしている提督に彼女は頬を緩める。彼女は分かっていたのだ、提督の奇行には意味があるということを。長門型戦艦の一一番艦「長門」の艦内神社にその理由がある。「とりあえず長門に拝んでおこうと思つてね」

「住吉神社には住吉三神が祀られているからな」

彼女の艦内神社は住吉神社である。そこに祀られている神は住吉三神であり、航海の神なのだ。提督として一番初めに拝むのにこれほどふさわしい神はいないだろう。

あとは軍神であるタケミカヅチが祭神である鹿島神社にも参拝したいところではあるが、鹿島神社を艦内神社とする鹿島は今現在艦隊にいないために不可能。しかしながらこの提督、以前学校にいた頃の教官であつた鹿島に小銭を渡して毎年正月には参拝していた。彼を真似て多くの学生が同じように鹿島を拝むようになり、彼の卒業後も伝統として残つている。

ちなみに多くの少年から小銭を渡され二礼二拍手一礼をされる当の鹿島は笑顔で応対している。やはり天使か。

「あとは伊勢を探さなきやな」

「提督も大変だな」

「いや、半分趣味だし大変ではないかな」

「そうか」

伊勢は誰もが知っている伊勢神宮を艦内神社としている。

あとは高雄型の面々にも参ぱいしなきやな、と考えていることをおくびにも出さず提督は趣味といい切つた。彼は今すぐにでもビッグセブンの力で修正されるべきだろう。女性ばかりの職場のトップに立つ人間として最低である。

長門は提督から投げて寄越された小銭をぎゅっと握る。彼はこれらを握りしめながら自分のことを探していったのだろうと推測する。なぜなら小銭にはほのかに彼の暖かさを感じたからだ。

ちらちらと舞う雪に提督と長門の白い息。相当冷え込む朝ではあ

るが、艦娘である長門は普段の肌を露出した格好で海を平然と出られるため、この程度の寒さは大したことではない。ただ、提督は人間であるから相当の厚着をしている。

長門という艦娘はその勇ましさからか今のようにエプロンを身に付けている姿が似合わないようと思えるのだが、実際はよく似合っている。

武闘派に思われがちだが、彼女の本質は箱入り娘だ。大切に大切に外に出されず育てられた女の子。少年たちの憧れ、力の象徴とされた過去からあまり表に出さないが、本当は可愛らしいものを好んでいると提督は知っている。女子力の塊の妹である陸奥の私物と思われている、二人の部屋のファンシーな小物の半数は長門のものであるということを提督は先日知った。

「それじゃまた後でな」

「あまり遅くなるなよ？」鳳翔たちが悲しむ、せつかく多くの料理を準備したのだからな

「分かつてる」

長門の忠告はもつともだ。元旦ということで普段に増して気合を入れた鳳翔や間宮、ついでに川内などのメシウマ勢が頑張っている。川内は普段の夜戦とばかり叫ぶ姿からは女子力の欠片も感じられないのだが、その実トップクラスの女子力だ。女子の中の女子といつても過言ではない。提督としては意外だったのは川内型の中で女子力が一番低いのは神通という事実。浴衣など綺麗に着こなすのだが、全て姉と妹の見立てであると神通から聞かされたのだ。

普段の彼女のイメージからしたら意外すぎると提督は考えるのだが、二水戦の艦からすれば神通さんらしい、という感想になるという。提督は三回ほど首を傾げた。

「ああそりゃだつた、伊勢も調理場だ。会いに行くならあとにするといい」

歩きだしたところ背にかけられた長門の声に片手を上げて答た。まず正月にやろうと思っていたことは済ませたために多少暇になってしまった。とはいってもすぐに正月の宴会が始まるので長時間暇

になるということはないだろうと考える。宴会では酒飲み勢から逃れなければならないな、と逃亡の算段を立てながら足を進めた。現代つ子らしくアルコールには弱いのだ。

アルコールで潰れた例のクリスマスの翌日、目が覚めると横には陸奥がいた。前日の夜の記憶が吹っ飛んでいたためになにかやらかしたのじやないかと戦々恐々としているところへ彼女の「昨日は楽しかったわね」とのお言葉。提督は考えるのをやめた。それからしばらく顔を合わせるのが恥ずかしいような気がして仕方がない。

お酒には注意しないとなあ、と少し憂鬱な気分になつた。と同時に声をかけられる。

「どうかしました？ 正月なのに元氣がないですね司令官」

提督が声の方向へと顔を向けると、そこには特型24姉妹の一番上のお姉さんである吹雪型一番艦「吹雪」がいた。注意力が散漫だったせいか、彼女がいるのに気が付かなかつた。誤魔化すように彼は頬を搔いて苦笑いを浮かべる。吹雪は心配そうな表情をして見上げていた。

「あ、いいや違うよ。たくさん年賀状が届いてどちら手を付けるか戸惑っているんだ

「なんだ、良かつたです。そうだ！ あけましておめでとうございます！」

苦しい言い訳に突つ込むことなく吹雪は笑顔で応える。踏み入つてほしくない雰囲気を感じ取つたのだろう、こういうところが彼女のいいところだと提督は思つている。

元気よく挨拶する吹雪だが、ちなみに今日はパンツは見えていない。パンツは見えていない。大事なことである。

彼女と同じ別の「吹雪」が広報の資料に白い何かをチラ見せさせてしまつたために、世間ではパンツの子と言われているとか言われていないとか。全国の吹雪はそれを不満に思うことも多く、名誉挽回の機会を虎視眈々と狙つている……らしい。

吹雪は提督の手を取る。少女のほの暖かい体温が心地いい。子どもと加賀はいつだつて暖かいからこの季節はくつつきあつてているの

をたまに見かける。さすがにその中に混じつていく勇気はない。

すっかり冷えた提督の手を包み込んで吹雪は咳く。

「それにしても冷えますね」

「とか言いながら平気そうだよね君は」

「艦娘ですから！」

ふふん、と胸を張る吹雪。この季節は雪と名のつく駆逐艦にとつては馴染みの深い季節——ということではなく、実際北方に行くことはあまり無かつたらしい。

冷えるだろうから離しなさい、という提督。それに対して吹雪は嫌だと駄々をこねてしばらく膠着状態に陥つた。結局提督が折れて諦めて握られたままになつた。

「ですけど、やっぱり暖かいほうが良いですよね。炬燵とか気持ちいいですし」

「戦意高揚する？」

「しますよ～！」

炬燵の暖かさを思い出したのか、吹雪はえへへと笑みを浮かべた。可愛らしい少女が嬉しそうにしているとこちらも嬉しくなるものだと提督もほほ笑みを浮かべる。

「けど初雪とか炬燵から抜け出さなくなりそうだよな」

「え？ ……そ、そんなことはないですよ？」

「おい」

彼女の妹の一人、初雪なんかは設置された途端に炬燵へしがみつく勢いだつた。炬燵様と離れたくないと駄々をこねる彼女を、吹雪が深雪と共に引っ張り出すのは駆逐艦の中では冬の見慣れた光景になつてゐる。また初雪と似た引きこもり体质な望月なんかも姉妹に引っ張られること多々あり。

何度か「炬燵様～！」とこの世の終わりのような声を上げながら引きずられていく彼女らの姿を提督は見かけた。わかるよわかる、けど仕事しようなど暖房の効いた部屋で寒空の下に艦娘を送り出しながら考えていた。酷いやつだ。

「ああそうだ、吹雪もあとで長門に参拝しておくといい」

「そうですね、みんなと一緒に行こうとおもいます！」

「長門も喜ぶ」

来年は長門を座らせてその前に賽銭箱でも置こうか、と思いついた。翌年、ずらつと並んだ艦娘の列に提督がビビることになるのだが別の話。

輸送の安全は生命線ですからね、と語る吹雪は頼りになる娘さんだ。真面目で、多くの駆逐艦の姉ということもあり責任感も強い。提督が駆逐艦で電の次に頼りにしているのは吹雪だろうか。奇しくも末っ子と長女である。

「先日は大型艦の皆さんといらつしやつたので、今日は私達と一緒しませんか？」

クリスマスのときの事を思い出しながら吹雪は誘う。

「それも良いなあ。……食べ物も好きに食べられそうだし」

「あはは、特に空母の皆さんと一緒だとですね」

とは言いつつも10代前半やそれ以下に見える駆逐艦娘ですら成人男性並に食事を摂る。それに釣られて提督の一日の摂取カロリーも増加しつつあるが、運動量が増えてないためにいつかは太ってしまうのでは、と実は怯えている。神通にでも頼んで運動メニュー作つてもらおうかとも考えたが、執務に支障をきたしかねないので長良にでも頼むべきかと悩んでいる。

神通の海の上で姿を余り知らないが、うわさに聞く苛烈さが事実なら我が身がかわいいので頼むべきでないだろう。

ふと静かな周囲を吹雪は見回して呟いた。

「慣れはしましたけど、現代の正月というのは落ち着かないですね」「落ち着かない？」

「のんびりしすぎていて——あ、いや。悪いってことじやないですよ？」

吹雪が言うに、艦時代は人々が住まうこともあり大晦日の大掃除は大層な手間がかかつっていたとのこと。それに元旦も一般市民のようにのんびりと生活できていたわけではない。また歴史的事情や他国の感情などを配慮してやらなくなつた行事もある。

「俺らからすると陛下の写真を掲げて挙むというのが全然わからないんだけどなあ」

「教育で『象徴』としか教えられないというのが私達からすれば全然わかりません」

「半世紀以上のジェネレーションギヤップを感じる」

隣国の艦娘への国民感情は複雑だ。艦娘として現れるのは例の大戦時の艦であるのだが、当時の隣国は併合されていたためにこの国と同じ艦娘が現れることがとなつた。彼女らしかほとんど戦力がないため、過去の出来事との事情もあって意見が対立しているという。今のところは艦娘容認派が優勢だが、いざれはどうなるか分からぬ。

「難しいよな」

「そうですね。でも、私達が必要なくなつて否定されるのであれば、それはそれで素晴らしいことです。武器が要らない、平和な世界。そうなつたら一日中ひなたぼっこ出来ますよね？」

未来に思いを馳せて楽しそうな表情をする吹雪に、提督も明るい未来を思い描く。

「あ、おーい睦月ちゃん！」

もしそういう未来がきたら自分は何をしているのか想像していたら吹雪が声を上げて手を振つていた。彼女の視線の先には睦月がいる。声をかけられた睦月は提督と吹雪を見ると、同じように大きく手を振つた。吹雪はそれを見ると、提督の腕を引っ張つて駆け出す。

「司令官、行きましょう！」

「ちょ引っ張んないで！」

艦娘を引っ張つていく立場のはずなのに引っ張られてばかりだなあ、と思いながら彼も駆けた。

そして彼の、彼らの一年が始まつた。彼らにとつても、そして他の提督たちにとつても激動の一年が。しかし、彼はそんな未来のことなど一切知らずに、駆逐艦たちにお年玉を強請られたかられることになつた。

全員に配つたら破産するから勘弁してくれと情けない声をあげるまで、あと十数秒——

## 2 豊饒な取材

「と、こんなもんかな  
「きょーしゅくです！」

スツと机の上に差し出された紙を青葉型重巡洋艦の一番艦である「青葉」は受け取った。印刷機から吐き出されてまだほんのり温かい紙。彼女はいま相対している男の背にあるコピー機は音を立てて内部の掃除をしている。

ここは執務室、だがこの青葉の提督の執務室ではない。青葉は紙に落としていた視線をちらりと目の前に座る男の顔に向けた。目の前の男性は青葉の提督の学生時代の友人だつた人物だ。

細く痩せた神経質そうな顔に大きめな目と高い鼻。黄色人種そのものといった風貌はしているものの、彫りの深さは西洋人のようである。学生時代に青葉の提督やその友人からは「ゲッベルスに似てる」と言われていたと青葉は聞いていたのだが、こうやつてみてみると実際はそこまで似ていない。

一時期流行った映画に彼ら全員がハマつてその影響からそう言っていただけである。事実、彼の眉は映画のゲッベルスと異なり太い。「噂になっている常勝艦隊の艦娘が来てくれるだなんてね、いやあ光栄だ」

「いえいえ、おだてても何も出ませんよ？」

「事実だよ。あいつにもビックリだ、知らないうちに有名になっちゃつて」

アハハ、と笑いながら彼は机に置かれた湯呑みを手に取る。そして先ほど初期艦で、そして秘書艦の五月雨が淹れてくれたお茶を飲んで彼は一息ついた。

また美味くなつたな、と思いつつ真剣な表情で紙に目を通している青葉をじつとみつめる。

「青葉の改二つてどんなのかな、と思つてたけど、君は改二ではないんだな」

首を傾げながら観察するが、どこからどう見てもこの青葉は普通の

青葉だった。

「衣笠は改二なんですけどね。どおして私はまだ改なんでしょうねえ」と

問われた青葉は全然どうしてだろうと思つていなきそうな声色で返答した。気にしていないのか、と彼は考える。改二ではないといつても、目の前の彼女は尋常でない練度の青葉だと思い出す。

どういつたカラクリで新人のはずの友人がここまで練度を上げたのだろうと思いながら背筋を伸ばした。バキバキといつた小気味の良い音と程よい衝撃が心地良い。だが、その音と重なったため青葉のつぶやきが聞き取れなかつた。

「司令官が私の姿を思い出せば一瞬、ですけどね」

「ん、何か言つた？」

「いいえいいえ何でもないです！」

両の手を青葉は振つた。そして読み終えて机に置いていた紙にそつと手を乗せ感謝を述べる。

「いやあ頭が上がらないですよこれだけ書いてもらえて！」

「自分の提督を知りたがるのはどこの青葉も一緒だらうし慣れたさ」

彼の言うとおり、こうやって他の提督の青葉と会話するのは今までに何度もあつた。記者を自認するらしい青葉は時間があるときには自分の上司の取材をしに他の提督のもとへ向かうことがよくある。彼の青葉もそうだつたし、目の前の青葉もそのようだつた。そのために思い出すかぎりの青葉の提督とのエピソードを書き上げてプリントしてやつたのである。

ふつうの学生生活だつたけれどいか、と聞えばそれでもいいと青葉が答えたために、適当に過去を思い出しながら業務の片手間に書き上げた。どうせここから他人に取材をしたりして裏付けをとつていくだろうしこの程度の適当なものでいいのだろう、多分。

「青葉と言えば青葉山、ここからでも見えるだろ？」

「さてどうでしようねえ。自分のことですが全く気にしていませんでした」

あはは、と青葉は頭をかく。ここ舞鶴鎮守府のある舞鶴湾は青葉山

から一望できる位置にある。

青葉が数枚のプリントを綺麗に整えてクリアファイルに入れる。それと時を同じくして扉が開く音がし、五月雨が部屋に入ってきた。彼女の手にはお盆、そしてその上にはお菓子とお茶が置かれていた。

「五月雨、それ誰かのとかじゃないよな？」

「大丈夫ですよ、はい！」

「同じこと言つて赤城の茶菓子を持つてきたこと忘れてないけど」

後日なだめるために彼の財布が大破した。どこの鎮守府でもある話らしい。

「今日は大丈夫です、お客様用にストックしてたやつです！」

ほんとかなあ、という声にほんとです！ と五月雨が返す。のんびりとした日常風景に青葉は目を細めた。

五月雨が持つてきた落雁を一つ食べ、お茶で口を湿らせた青葉は問い合わせる。

「うちの司令官、学生時代になにかおもしろいことやつてませんでした？」

「んー、前も言つた香取教官や鹿島教官に詰め寄られた以外、ただ平々凡々な学生だったと思うよ」

田舎で学生をしていた頃を思い出す。提督というのにいちばん大事なのは資質であり、体力など付け焼き刃程度で十分だ。だからこそのんびりと学生をして数年扱かれただけの彼らがこうやって艦娘の上に立てている。

その資質というものは簡単に測れる。妖精が見えて意思疎通ができるだけでよかつた、と言つてもそれができるのは希少中の希少。見ることだけはできる、というのはいても意思疎通は難しい。五月雨と出会つて数年戦つている彼ですら時に妖精が好き勝手して困ることがある。

「そもそも妖精が見える、なんてことすら知らなかつたよ」

「やはり事故から、ですかね」

「むかし本で読んだことがある。頭をぶつけた人間が音楽の勉強をしたことがなかつたのに関わらずピアノをすらすらと弾けるように

なつた、と

たぶんそういうやつじゃないのかな、と椅子を軋ませて彼は窓から空を見上げた。

「なるほどですね……それじゃ、うちの司令官のことはひとまず置いてからあなたに取材いいですか？」

「ダメです」

即答だつた。だが、別方向からも返事が来る。

「いいですよ！」

「きよーしゅくです！」

「なんで五月雨が返事してんの」

勝手に五月雨が返答し、それに青葉が敬礼をする。彼は今まで青葉の取材にいい思い出が無かつたのだ。他人の記事は笑つて読めるけれど自分はいけない。他人の不幸（？）は蜜の味だが自分の不幸は苦いのだ。良薬でもないのに苦いのだ。

そんな思いがある彼とは反対に、五月雨は取材に積極的だつた。やはり自分の提督が知られるというのは嬉しいことなのだろう。

「定番の質問からいきます。彼女とかいらつしやらないのですか？」

「ちよそれ今関係ないだろ!?」

「関係ありますよあなたの取材ですし。で、いるんですかあ？　いな  
いんですかあ？」

ニヤニヤと笑みを浮かべ青葉が再度問いかける。嫌な予感が当たつた彼は冷や汗を垂らしながらなんと返答しようかと頭をつかう。返答次第ではとんでもないことになるからだ。

しかし、その思考は無駄に終わつた。なぜなら横から五月雨が口を出したからだつた。

「提督に彼女はいませんよ！　ぜつつたいいません！」

「おや、そうなんですか？　てつきりこの人は五月雨さんと付き合つてるものと思つてたんですけどねえ」

すっとぼけた表情で青葉が咳く。

「あう……」

「そ、そんなわけないだろ！」

すると、彼女の言葉が刺さり顔を赤くしてうつむく五月雨と、いきなり慌てだした彼。なるほどやはりそうだつたか、と二人の様子を見てさらに青葉のニヤニヤ笑い深くなる。別に青葉はこの二人の恋路を邪魔するつもりはないので馬に蹴られるなんてことはないだろうが、こういうのを見るといじりたくなつてしまふのが彼女の性なのだ。仕方のことなのだ。

二人の関係は本人たちからしたら隠しているつもりだつたのかもしれないが、見ていればバレバレだつた。また事前にこここの艦娘たちが二人の関係に気付いているけども気付かないふりをしてあげている、というのもリサーチ済み。最初から詰みの状態である、合掌。「うちの司令官の『ご友人』がまさか、こんな小さな子に欲情する口リコンさんだつたなんて」

「口リコソンじゃねえから。口リが好きなんじゃなくて五月雨が好きなだけだから！」

「でも五月雨さんは小さい女の子ですよ？　というかぶつちやけましたねえ」

慌てる彼の顔を激写。「あ、いい表情もう一枚いいですか？」とマイペースにシャッターを切り続ける。その横で人前で大胆に告白された五月雨は更に顔を赤くしていた。

「それに五月雨には将来性があるし！　白露型を見てみなよ！」

「こりやまた大胆なセクハラですねえ」

「あー！　もう!!」

暖簾に腕押し、適當言つてからかつてくる青葉に吠えた。

この後も青葉によつて根掘り葉掘り聞かれることとなり、出撃していた艦隊が帰投するまで質問攻めをされていた。帰つてきた艦隊はげんなりしている提督と、よその青葉をみて一瞬すべてを理解した。超速理解だつた。助けなくても害はない、むしろ面白いことになるということでスルーされる。そのためには四面楚歌の状況のまま質問攻めが続行された。

お前らあとで覚えておけよ、彼はそう心のなかで呟く。

「打てば鳴るつて感じで面白いですねえ！　さすが司令官の『ご友人』

## 「帰つてくれ」

結局、青葉が満足して帰路についたのは夕方だった。もう来なんと青葉が去った後に塩が撒かれたらしいが知つたことではない。取材に犠牲はつきものなのだから。

鎮守府を出て駅まで移動し電車に乗り込んだ青葉はノートPCの電源を入れる。わざわざ休暇をつかつて来た甲斐があつたな、と思いつながら受け取つた文書ファイルを整理していく。自分の提督のことを探りたい、という欲求に従つて彼の知人を訪ねること数度。今回ようやく同業の彼とアポイントが取れた。

提督になるまで何をしていたのか、どういう学生生活を送つていたのか、どういった幼少期を過ごしたのか。それらを仲間の助けも借りて調べ上げた。他人からの評価、自分自身の評価、家族からの評価も出来るかぎり全てだ。

調べれば調べるほど「普通のそちらへんによくいる少年だった。しかし在学中に起きて、学校をやめざるを得なくなつた大きな事故から一変した。

提督の家族は言つた。まるで人が変わつたような――そのまま成長して老成したようだと。

提督の友人は言つた。どこかよそよそしくなつた、と。

「事故による記憶の復活……記憶喪失の真逆ですねえ」

重巡の力でワンパンすればすべて思い出すだろうか、と青葉は恐ろしい思いつきをした。しかしそれは最終手段にしておこうと一旦保留する。自分の知らないところで提督の寿命が縮んだかと思うと伸びた瞬間だつたが油断はできない状況。油断しようにもワンパンされそうなこと自体を提督は知らないのだが。

艦娘と提督はそれこそ運命の赤い糸で結ばれている。艦娘は船とそれに内包された幾多の魂の集合体という、あやふやな存在。それでも国を守るために力を貸さんとする彼女らをこの世に繋ぎとめているのが提督だ。艦娘を指揮下におき、その力を最大に発揮させるためには、提督自身も人間以上の魂を持つ彼女らの負担に耐えうる強い魂を持つ必要がある。『今』より研究が進んで様々なことが解明されてい

た『前』での結論がこれだつた。

これに当てはめて青葉は提督の魂が記憶の回復に引つ張られて半分ほど目覚めていると推測する。即ち彼女らはまだ半分の力しか彼から引き出してもらつていないとのこと。だからこそ青葉は改二になれていないのだろう。

「さて、趣味の調べ物もそこそこにして本題の情報収集もしなくてはいけませんねえ」

先日手に入つた情報を思い返す。ある鎮守府の艦隊がまるごと消えたというのだ。大体なにがあったのかは想像ついていたし、裏付けも取れている。

（艦娘が『力を貸してあげている』のに勘違いする輩つてまだいたんですねえ。きちんと教育していたんでしょうか）

見た目麗しい艦娘たちが好意的に接してくるのだ。それもずつと男ばかりの環境だつたというのにそういうことをされたら勘違いして暴走してしまう提督が出てくるのも仕方のないことだろうが。

艦娘がこの世から消えることは真正面から殴り負ける以外にもある。それは艦娘自身がこの世から離れる決意をすることだ。

提督になつて順調に進む中で立場が上だからと傲慢になりおかしな要求でもしたに違ひない。だが忘れてはならないのは、のうのうと平和な世界で成長した提督とは違つて、艦たちは命の炎を燃やしてきた誇りを持っているということだ。

提督は決して力を貸してもらつているということを忘れてはならない。これが提督候補生が習う最初の言葉。

（女子は噂好きですからねえ。一人が嫌になつて消えたら連鎖して消えていくことだつてありえなくもない。しかも艦隊自体が30ほどという、成長しあげの少数なら全員消えていくのもありますねえ）

こういうことがあるから若い提督がなかなか任命されない。

良くない提督を引いてしまつた仲間たちをかわいそうに思うが、それよりも青葉はその抜けた艦隊の穴を誰が埋めるのかに思考が行く。（少しでも司令官に好意的な人間が新しく任命されてくれたら嬉しい

の  
で  
す  
が  
(

### 3 豊饒な岩風呂

「ほんつと疲れたな。人付き合いも大変だ」

「お疲れ様なのです」

車の中でぐつたりしている提督に電が助手席から振り向いて声をかけた。疲労困憊、といった様子の彼はすでに制服を着崩している。他提督との会議や立食パーティー、よく知らないお偉いさんとのお話などなど精神に多大な疲労を負っているようだ。

こころなしか彼にひつついでいる妖精も疲れている様子なのだが、果たして彼女らに疲れる出来事などあつたのだろうか。雰囲気に合わせているんだろうな、と提督は適当に考えを放棄する。

地獄のような数日を彼は思い出す。

「飲みニケーション？」 ていうのか。酒が苦手だからほんと辛くて辛くて

「鍛えたら飲めるようになるわ。今晚、どう？」

「謹んで遠慮させていただきます」

運転席の陸奥が誘つてきたが断つた。即答だつた。酒の強い彼女に付き合わされると潰されるのが目に見えていると提督は考えるが、さすがに陸奥も考えなしではない。考えなしでは無いはず、と電が苦笑いを浮かべる。飲める人間は時に横暴なのだ。

なおアルコールは鍛えたら飲めるようになる、なんてことはない。

「でも司令官さんは別にお酒、嫌いでは無いですね？」

「そりなんだけどさ。美味しいのを少しだけでいいかな」

「あなたの好きなペースで飲めばいいのに」

「男には色々あるんだよ、色々」

男は時に見栄つ張りである。女の子より飲めないのが恥ずかしいのだ、この男は。

「そう。私はいつでも待ってるからその気になつたら誘つてちようだい？」

「……おう」

間を開けての返答、絶対に彼は誘う気が無かつた。

それからしばらくして鎮守府にたどり着いた。夕日が海に落ちていて大層美しい光景であったのだが、提督にはそんなことは関係がなかった。

車から降りた彼が小走りで去つていったのを陸奥と電は見送り、そして顔を合わせて呆れたように笑つた。提督は真っ先に自室に向かう。数日分の疲れを癒やすためには風呂に限る、と彼の脳内は風呂でいっぱいだった。

昼間は晴れていたのだがいまは冬真っ只中のために暖かくなんてちつともない。体の芯が冷える寒さの中「おお寒い寒い」とひとりごちながら提督は廊下を小走りで移動する。あまりにも意識が自室に向かっていたために、不注意からか曲がり角からぬつと出てきた少女にぶつかりかけてしまった。

衝突しないよう急ブレーキをして態勢を崩した彼の腕を、グツと引つ張つたのは吹雪型の五番艦「叢雲」。呆れたかのような目で彼女は提督に声をかける。

「帰つてきたばかりなのに、まったく落ち着きが無いのね」「や、叢雲ただいま」

「はいおかえりなさい……じゃなくて！」

提督が姿勢を戻したのを見て彼女は掴んでいた手を離す。それと同時に「まずは謝りなさいよ」と睨むように薄い色素の瞳で提督を見上げながら彼女は言つた。

叢雲は芋っぽい田舎女学生な見た目の同型艦の中で、一番垢抜けて都會っぽい子である。と、提督は目の前の少女に怒られながらぼんやりと考へる。それなりに垢抜けた彼女のことだ「やーいお前の姉妹艦田舎つぺ」なんて言えば無言の蹴りを入れられるだろう。

幼いながらも肉付きが良いという体、そしてそのアンバランスな危うい色気を引き立てるぴつちりとした黒インナーは男の目に悪い。プロポーションも抜群で肉付きもえつちいとなればこう、駄目なのだ。

「ちょっと聞いてるの？」

「聞いてないよ」

「あんたねえ！」

あさつての方向に視線をやつて適当に返答した提督に、両腕を上げて「うがーっ！」と何とも言えない鳴き声を叢雲はあげた。突き上げられた両手を彼は掴み左右に大きく振つてみるとそれに抵抗しようと/orしてくる。面白いが本気を出されたら一瞬で振り払われるので限度が重要だろう。

「お説教はあとで聞くからまず部屋に帰らせて。疲れた」

「……まあ、仕方ないわね」

「そして飯食つて寝るから」

「明日になるじゃないの！ いつもいつもこの私をバカにして……！」

叢雲は気が強いからか、少しちよつかいかけただけで即座に反応してくれる。提督は確実に彼女のそういうところを楽しんでいた。だがやりすぎた場合は姉の吹雪にチクられる、それは良くない。

吹雪みたいな生真面目な小さな子に説教だけはされたくないのだ。しかし、そう提督は常日頃考えてはいても、吹雪より小さな子にしょっちゅう説教されているのをきつと忘れている。電はちよつぱり特型長女の吹雪に似ているのだ。

それじやあ急いでるから、と小走りで駆け出す背中に叢雲の廊下を走るなどの声がかけられるが、彼はそんなこと知ったこっちゃないと言わんばかりの速度で自室に移動した。

提督の自室には彼専用の風呂がある。艦娘たちには大浴場があるのでなんで自分はこんな狭いのだろうとたまに考えるが、人数の差だと諦める。

一度だけあまりにも艦娘たちが羨ましくて口が滑り「俺も大浴場に入りたい」と呟いてしまったのだが、近くでそれを聞いた駆逐艦に引っ張られて大浴場に連行されかけた。

もしあのとき彼が島風や夕立、如月などの構つてちゃん駆逐艦によつて大浴場に本当に連れ込まれてしまつた場合、色々大変なことになつていたに違ひない。事情がどうであれ悪いのは男性なのだ。

やはり慣れ親しんだ風呂はいいなあ、と満足して浴室から部屋に移

動すれば、どういうことかそこには叢雲がいた。

「あれなんで叢雲いるの」

彼女は椅子に座つて本を読んでいた。提督はさつき鍵をかけたはずと一瞬不思議に思つたが、きっとかけ忘れたのだろう。提督が出てきたのを見た彼女は本を閉じて机の上に置く。

「ここにいれば逃げられないでしよう?」

叢雲は説教の続きをしにきたのだろうが、しかしそれよりも綺麗に整えられていた布団に提督は倒れ込んで情けない声を出した。

「うああ……やっと帰つてこれたよ叢雲お……」

上官の部下に普通は見せるべきでないだろう情けない姿を見た叢雲は少し顔をしかめて椅子から立ち上がり、そして彼の倒れている布団に座つた。

「全く、もう少しシャンとしなさいよ。アンタがそんなんだから陸奥さんと榛名さんの喧嘩が続くのよ」

「……俺すつごいしつかりものだし。てかあの二人のあれ関係ないつしょ」

もごもごと布団に顔を埋めながら喋る提督の頭を叢雲はグツと下へと押し付けた。呼吸の苦しくなつた彼が「叢雲さんギブギブ!」と布団をバンバン叩いて、そしてようやく解放された。

「……死んでも馬鹿は治らないだろうからいつぺん沈めてからもつかいやればいいのかなつて思つたんだけど?」

「二度も殺す気か、せめて死ぬときは叢雲の太ももに顔を——」

「沈め」

顔を真っ赤にした叢雲によつて情け容赦なく提督はまた頭を抑えつけられた。今度は片手で布団を叩いても解放してもらえなかつた提督は両手で布団を叩いて、そしてようやく許された。

うつ伏せの姿勢から叢雲の顔が見えるように提督が体を捻る。ひっくり返つた提督は死んだ目で別世界へと視線をやつてゐるようだつた。

「泣くよ?」

「あら、曙に会うたびクソ提督と呼ばれて喜んでるアンタなら、これは

「ご褒美じゃないの？」

「元気なときならね」

「あつそ、都合のいい男ね」

元気なときなら喜んでいただろうが、もしそうでもドMではないのでそれ以上はいけない。再起不能になつてしまふのは確定的に明らかで、悲しみに包まれながら伊号潜水艦と共に急速潜航するだろう。提督は死ぬ。

しばらく天井を見つめた後に重い体をやつとの思いで彼は持ち上げて、まとめておいた荷物に手を伸ばした。届かなかつた。

「叢雲取つてくれ」

「……あんたの母親じやがないんだけど」

そうは言いつつも取つてあげている叢雲は優しい娘だつた。

部屋を出てから叢雲に普段の生活態度や心構え、その他諸々について説教されながら執務室へと提督は歩いていたのだが、その目的地にある異変が起こつていた。

執務室の扉がある位置が見えてくるとともに、二人は違和感を覚え始める。

「これつて……」

「暖簾、しかも温泉でみるようなやつ……」

叢雲の言うとおりのものがそこ、執務室の扉にはあつた。何か知つてるか、と提督は彼女に問い合わせるも叢雲も知らないようである。

扉の真ん前にまで歩いてきた二人は、その暖簾を触りながら首を傾げる。

「鎮守府のことであんたが知らないのに私が知るわけないじゃない」

一人して顔を見合わせてから数秒、沈黙を破つたのは叢雲だつた。

「とりあえず開けてみましょ」

そつとドアノブに手をかけて、そして扉を開いた。

二人の目に飛び込んできたのは白、真っ白な光景。生暖かなそれは微かな腐卵臭があり、つまりまるで温泉の湯気のようだつた。いや、や、実際に湯けむりだ。

謎の湯けむりの向こう側には岩風呂があつた。つい先日まで執務

室だったはずの部屋の中に岩風呂があつたのだ。茫然自失といった状態の提督に、岩風呂の中から声がかかる。

「おお、やつと来たか筑摩！ いやあ温泉は素晴らしいものじゃ、ほれ早く……つて」

「……は？」

「お、提督じやないか久しぶりじゃな！」

そこには普段はツインテールにしている髪を、タオルで湯につかないとまとめて上げている利根の姿があつた。濁った湯に入つても彼女は全裸なのだが、恥ずかしがる気配すらなく堂々としていた。利根は大きく手を振つて更に声をかける。

「ふふん、どうだ良い温泉岩風呂じやろう？ お主も入るか？」

「お、おう？」

「ようし、善は急げじや。吾輩が脱がしてやろう！」  
ざばつと勢い良く利根が立ち上がり、そして

「ボケつとしてるんじやじやないわよ！ あつち見るなこの変態！」

同時に提督の頭部へと背伸びした叢雲の一撃、そして元執務室の外へと叩き出された。

それから十数分後、叢雲からの連絡にやつてきた電に頬をペチペチと叩かれて正氣を取り戻した提督はやつてきた電、大淀、そして叢雲と共に利根を座らせて囮んでいた。叢雲以外は泣く子も黙る実質艦隊のトップ、しかもその三人に睨まれている状態、しかし利根はなんでこうなつてているのか理解していない様子だった。

咳払いをしてから大淀が利根に詰め寄る。

「はい、では利根さん。弁明があればどうぞ」

「弁明？ おお、岩風呂のことか！ 執務室に温泉があればいい眺めで入れると思ったのじゃ！ ふふん、どうじや良いじやろう！」

吾輩は何か悪いことをしたのか、とすつとぼけた表情で、むしろ胸を張つてぬかす利根。それを聞いた提督は叢雲、電に目配せをしてから三人同時に判決を言い渡した。

「有罪だ」

「有罪ね」

「有罪なのです」

満場一致の有罪である。これで利根の未来は決定した。利根からすればいきなり有罪と言い渡されたために、いきなり慌てはじめる。「ま、待て！ 吾輩はただ執務室に温泉があればいいな、といつただけで設置したのは吾輩じやないのじや！」

よりもよつて共犯者を売ろうとしていた。利根を囲む四人の脳内には何人かやりそうな連中がピックアップされる。だがどれも推測の域を出ないために、利根に吐かせるしかあるまい。非常に心苦しいが、提督は利根にとつて一番重いと思われる判決を言い渡す。

「判決、一週間筑摩抜きな」

「なんと！」

利根は絶望したような顔をした。それもそうだろう、彼女は筑摩無しでは生きていけない。もし筑摩がいなくなつたのならこれから誰が彼女の焼き魚から骨を取るのか、誰が彼女の部屋の掃除をするのか、誰が彼女を寝かしつけて起こすのか。

あまりにも残酷な、悪魔のような所業ともいえる提督の判決に、その他の三人は心が痛んだ。

「早く共犯者を吐け利根、でないと筑摩抜きが一週間になるぞ」「二週間も！？ ちくま……ちくまあ！！」

なお共犯者は初春だった模様。のじやのじや喋る者同士波長があつたのだろうか。

一見落着、といった様子の提督だつたが、大淀が彼の腕をガシツと掴んで眼鏡を光らせた。それを見た提督はなにか嫌な予感がしたのだが逃げられない。艦娘に人間が勝てるわけがないのだ。

「そういえば叢雲さんに聞いたのですけど、提督は利根さんの裸を見たそうですね」

「え」

「未婚女性の裸を覗くなんて、とんだ変態さんなのです！」

数分後、俺は無罪だと叫んで走り去つていく提督、そしてそれを追いかける電、叢雲に岩風呂に入ろうと執務室に向かっていた筑摩がすれ違つたそうな。

なお、岩風呂を無くすのはもったいないとのことで執務室は空き部屋に移動することとなつた。

## 4 夢鬱な真夜中

「あ、トッポ食いてえ」

唐突だつた。真冬、とてつもなく寒い外気温のせいで室内的温度も全く上がらない。暖房を使えば良いのだろうが、貧乏性のために炬燵で我慢している。そういうたものは全部国が払ってくれるといつても申し訳がないのだ。

でもなあ、外に出たくもねえよなあとぐだぐだとそのまま仕事を続けて數十分が経過、腹はさらにくうくうと鳴りはじめて、また炬燵の上のみかんも全て食べつくしてしまつた。妖精さんが。

なんでミカン食べようと思つて皮を剥いたのに自分が食べられな  
いのだ……。

「炬燵様、結婚したんだからご飯出してよー」

返事はない。それはそうだろう。

先日炬燵様と結婚したはずなのだが、恥ずかしがり屋なせいか一切口をきいてくれないし体を温める以外に何かをしてくれる様子はない。布団に浮氣してやろうか？　しかしうんともすんともいつてくれない。提督は寂しい。

最寄りでトッポを売つてあるところ、もしくは持つてそうなやつを脳内に浮かべる。鎮守府の売店は開いているのだろうけれども遠い。近くの艦娘の部屋から強奪してくるのが一番早いだろう。しかし都合よくトッポを持っているような娘はいるのだろうか、いやいまい。諦めて寝よう、そろそろ日付も変わる頃だと電波時計を見る。寝ないと明日に支障が出そうな時間だ。炬燵様のコンセントを抜き、浮気相手の布団へと向かおうとしたその時、ノックがされた。

「どちらさま？」

「大井です」

「ひえ……」

こうやつて夜遅くに艦娘が訪ねてくるのはそう珍しいことではない。特に用事がないのにやつてきて好き勝手していくのはほぼ毎晚といつても良いだろう。

正直いって、今日訪ねてきた大井は苦手である。別にその性格がどうとかそういうのではなく、自分の教官だつた過去と部下である現在の立場の逆転がむず痒いのがあるのだ。

そして一番大きいのは、かつてイベント海域での切り札として運用するためにケツコンカツコカリしていたつていうこと。ケツコンカツコカリの話は大井に限つたことではない。北上や木曾のような戦力目的でした娘、そして普段使いの多い潜水艦娘もだ。

一番気後れするのはやはり最初にケツコンカツコカリをして、一番使つて、練度も唯一上限に達した陸奥だということは言うまでもない。

艦娘らは俺がゲームでやつていたことを現実に起きたことであると、そしてゲームの提督の生まれ変わりが俺だと思っている。確かにそう、そうではあるのだが——ゲームの俺と彼女らが作り上げてきた糸を横取りしているようで。

だから知らんぷりをしている。しかしこのままでは良くない。

「開いてるよ」

提督が声をかけると同時に扉が開かれた。「開いてるよ」の「開」を口に出したと同時にだ。やだこわい、この人きつとなんて声をかけても部屋に入つてくるつもりだつたに違ひがない。

「……廊下とほとんど温度変わらないじゃないですか提督、暖房付けましよう」

「いや炬燵様で我慢できるしいいかなーつて」

「風邪ひいて困るのは提督だけではないのですから、付けますね？」

全く、自己管理もできないのかしら」

猫なで声からのドスの効いたつぶやき。冬の夜なだけあつてよく声が通る通る……怖い。

部屋に入つてきて真っ先に暖房を入れた彼女の手にはタッパが握られていた。はて、何だろうかと思つて見つめているとその視線に気がついたのか炬燵の上にそれを置いた。

「なんだこれ、つてチョコ?」

「はい、チョコレートです。本命なので気合を入れました」

「——北上に?」

「おすすめです。毒味役DEATH」

発音が怪しくなかつただろうか。

俺は彼女の真意を知らないふりをして当たり障りのないように返答をする。

そういえば数日後はバレンタインデー、世間では女の子たちが好きな男の子に頑張つてチョコレートを渡したりする甘酸っぱいようなイベントであり、モテない男子からするとそんなイベントなど存在しないように振る舞う悲しい日である。

我が艦隊においてチョコレートを受け取る数が多いのは明らかに自分である。そりや男女比が1：100以上なのだからそうだ。もしごん受け取り消費するとなれば酷いことになるのは火を見るよりも明らかであるために、

『提督にチョコレートを渡すのは禁止します』

と電が事前通達をしていたのだつた。ありがとう電、助かつたぞ電。だから俺の器に茄子を入れるのはやめような、好き嫌いはダメだぞ。え？　たけのこを入れるな？　ははこやつめ、俺はきのこ派だ。

そして戦争が起きたのだがそれはさておき。

「電さんは提督にチョコレートを渡してはいけないと言つていたけれども、バレンタインデーではないですしこれはおそらくこれから」「なるほど」

やはり抜け目のない性格をしていらっしゃるようで。

「今から珈琲を入れるのもなんですし、ホットミルクでお召し上がりくださいな」

勝手知つたる我が家みたいな感じで、数あるマグカップの中から俺のお気に入りを取り出し、ホットミルクを作ってくれた。来客用とごちゃまぜになつていてるのに迷いなくそれを選び出すのはさすがと言えば良いのか、なんというか。

タツパを開くと、そこには柔らかそうなチョコレートがサイコロのように四角くあつた。生チョコというやつだろうか、爪楊枝も簡単に刺さってしまう。

「まだ食べないでくださいね、ミルクと一緒にのほうが美味しいと思います」

まだ温まらない、とつぶやき電子レンジを再び使う大井。ようやく温まつたと彼女がカップを持ってきたときにはもう日付は変わってしまっていた。

まず先にチヨコを一口。

「……美味しい」

「良かつた」

さっきまで少し硬くてそして甘いお菓子を食べたいと思っていたのに、彼女の持ってきたそれが美味しかったおかげですっかり忘れ去ってしまった。

そして彼女がじいっと見つめる中完食し、ちびちびとミルクを飲む。充分に温められたそのためか、体もぽかぽかとしてきた。それどころか少し熱さすらある。炬燵の暖かさもあるのかぼうつと/or>きて、急激に眠気がしてきた。

基本的にデスクワークとはいっても激務だ。それなのにこの時間まで起きていたのだから当然だろう。数日かけて資料作りをする予定だつたがついつい捲つてしまつたためだ。

「聞いてます？ 提督？」

「きいてないよ」

「聞きなさい」

「あい」

低い声にほんの少し覚醒する。寝るなら布団で、歯を磨いてからと彼女は言っている。お前は俺の母親かなにかか？ ちなみにママはこの鎮守府に十人くらいいる。

彼女のいうことは最もなので素直に従う。布団に潜り込むと彼女は部屋の電気を消し「おやすみなさい、提督」と言って出ていこうとする。しかしそれを見届ける前には意識を手放して夢の世界へと旅立つてしまっていた。

※

「やあやあ、こんな夜遅くに一体なにをしていたのかなお嬢さん」

「夜戦馬鹿こそなにやつてるのよ」

大井が部屋から出ると、壁と同化するようにして自然と立っていた川内に声をかけられた。こんな真冬だというのに冬らしい装いはマフラーだけな川内であつたが全く寒そうな気配を見せていない。寒そうでないのは大井も同じで、へそ出しだというのに平然としている。極寒の冬の海にいつもこの服装で出撃しているのだから平然としていてもおかしくはないか。

「いやあ、可愛い乙女が愛しの男性のもとへ夜這いしたとなつたら野次馬したくなつてね」

「そ、毎晩のようにそれはもう可愛い女の子がこの扉から出てくることでしょう」

「わかつてんじやん」

ニマニマとした笑みを浮かべて大井に絡んでいく川内。正直なところ、ウザい。

川内はこうやつて提督の部屋を訪ねてくる艦娘を冷やかすことが多い。毎晩毎晩、誰かが出てくるたびにこうやつて声をかけている。出てきた艦娘は「また川内だ」と彼女を見るたびにもう何度目になるかわからぬため息をつくのだ。

おつさんが可愛い女の子に絡むかのような面倒臭さを發揮する川内、たまにセクハラもするしたまつたもんではない。

今日の標的たる大井は面倒くさそうな表情を隠すことなく応対する。

「別に特別なことはしていないわよ」

「ふうん、まあ大井がそう言うならなんだろうけど」

中で大井がなにをしたのかを全てわかっている様子の川内は笑みを浮かべたままだつた。

「今年の出来は?」

「——悪いものを渡すつて？ この私が？」

睨みつけてくる大井に川内は聞いただけじゃん、と肩をすくめる。

「作つている時少し失敬したけど眠くなるようなもの、入れたでしょ」

「正解。相変わらずおかしな味覚をしているのね」

「ニンジャだからね」

ニンニン♪と忍者が印を結ぶような動作で川内はおどけた。

寝付きが悪いと提督が話していたために、大井はほんの少し睡眠薬を混ぜてみたのだがそれを川内は言い当てた。ニンジャの味覚はヤバイ級なのだ。

「味覚が正しくないと美味しいお料理は作れないからね」

しかし当の本人はそれすら当たり前のことに、誇ることがない。

「あなたと同等な比叡さんの前でも同じこと言える？」

そんな川内に大井は疑問を投げかけた。

もし某格付けチエックに出たら全問正解連戦連勝間違い無しであるのにも関わらず、自らが料理や演奏をするとおかしなことになる金剛型の一隻の名前を大井は上げた。気合を入れすぎた結果永遠と空回りをし続けるハイスペックぽんこつ戦艦を脳裏に浮かべた川内は肩をすくめる。

「何事にも限度つて必要だよね」

「どつかの川内型に言つてやりたい言葉だわ」

「うちの妹がごめんね？」

「……言うだけ無駄ね」

こいつ全く自覚してねえ、と大井は額に手を当てる。

大井は提督のことが好きだ。だからこそ川内の好きな人を四六時中見ていたいという気持ちはまあわかる。分かりはするが、川内のストーキングだけはさすがに気持ちが悪い。愛しの彼をストーキングするのに飽き足らず、提督に害がありそうな連中もその対象になつてゐる……らしい。鎮守府内にもたらされる情報はだいたい彼女か青葉が持つてくるため皆がそう考えている。

ただいつも、提督に忍び寄る悪い輩に対処する以外、張り付くよう

にしている彼女がどうやっているのかは些<sup>少</sup>か疑問がある。やはり二ンジヤは実在したのか、影分身の術でも使っているのか。大井は深く追求するのは無駄だと割り切つていていたため好奇心はあつても聞くことはない。

それよりも大井は気になることがあった。

「アレはどうなの？」

「ん、上々」

「そう、ならないの」

全艦娘からチヨコレートを受け取つて提督が体調、懐事情の双方かわいそうなことにならないためにチヨコレートを渡す行為は禁止されているが、さすがに何もないというのは寂しい話だ。

ということで、艦娘全員からとことどでかいチヨコレートケーキを作成することにしたのだ。こうすれば全員で提督にチヨコを渡して日頃の感謝とか伝えられるし、何より楽しめる。しかし全員で作るのは不可能なために年で持ち回りの当番制にすることとなつた。

今年のチヨコレートケーキの総指揮は川内型がとつている。

「いつだつたつけ、律儀にチヨコをホワイトデーまでに全部食べて提督が酷いことになったの」

「忘れてしまつたわ、そんな昔のこと」

「ふうん……一番取り乱してたのは誰だつたか」

川内は大井が青い顔をして自分たちの責任だと自分を責めていたのを覚えている。

今でこそ艦娘たちは提督への高感度がMAXを振り切つていて、さすがに出会つた最初からそうだつた訳ではない。川内はずつと大井が提督を嫌つていてると思つていたために、その姿を見て驚いたのだつた。

『前』は毎年恒例だつたけど『今』ははじめて……喜んでもらえるかなあ

「自信がないの？」

「そういうことじやないけどさ」

どういうケーキが出来上がるのかは、作っているメンバー以外には非公開。大井もどんなものが出来上がるのか期待している。

「あ、そういうえば」

「なに、もつたいぶらないで早く言つたらどうなの」

「まあまあ急かさないで」

提督の部屋から少し離れたところでふと川内が咳く。ここなら大丈夫だろうという判断だつた。自分の掴んだ情報を聞いた大井がどういう反応するのかわからなかつたからだ。

「提督、上官命令で帰郷するらしいよ」

「上官命令で帰郷……？ どういうことなの」

大井は正月も実家に帰ることなくここにとどまつていた提督を思い出す。そのうち暇な時にでも実家に顔を出しに行くのだろうかと思つていたのだが、上官命令で帰郷とは一体どういうことだろうか。なにやら面倒な匂いを感じ取つた。

そしてそれは正しかつた。川内は続ける

「表向きは正月の埋め合わせなんだけどね」

その時期に『偶然』同窓会があつて、しかも『偶然』命令を出した上官の娘がそれに出席する。

川内は提督に同郷だからと気安く接触してきたその上官をマークしていたのだつたが、なんともまあ偶然が重なつたことだ。ご丁寧にも同窓会に娘が出るからよろしくな、とまで言つて。

そのことを伝えた川内は何かが割れる音を聞いた。音がした大井の手元を見てみれば、そこには割れたタッパがあつた。

「そう、そんなことが」

ドス黒い瘴気を撒き散らすかのような雰囲気で笑い始めた大井。そして川内はせつかく帰省するのに厄介事に巻き込まれそうな提督に頭のなかで手を合わせた。